Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

210.58
Ka191s
M
00263043

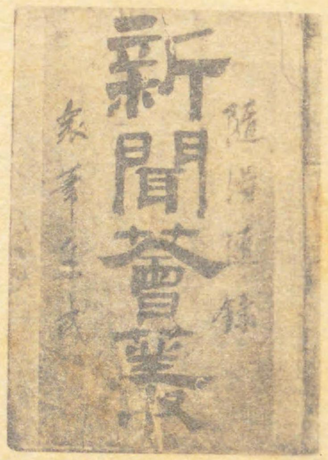
ISSEIDO
東京 神田 誠文

DO
東京

明治文化研究會

新聞叢雜

岩波書店刊行



原本卷一表紙

同　裏

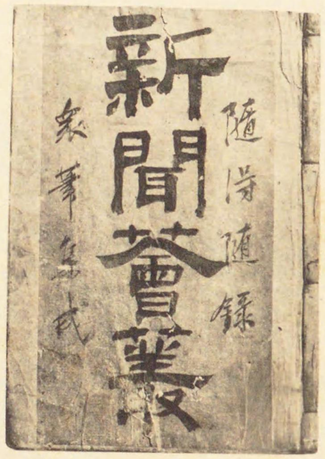
原本卷二表紙

同　裏

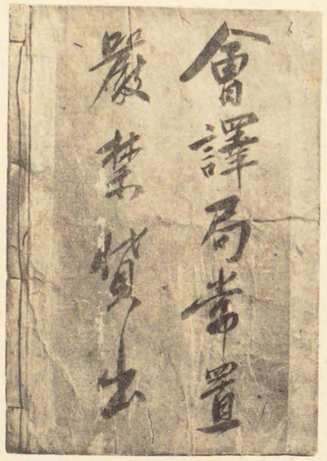
210.58
Ka19/s
M

国立国会
27.3.15
図書館

263043



原本卷一表紙



同　裏

原本卷二表紙

同　裏

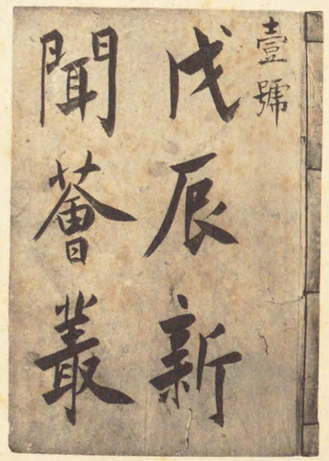
210.58
Ka191s
M

国立国会
27.3.15
図書館

263043

原本卷三表紙　　裏同

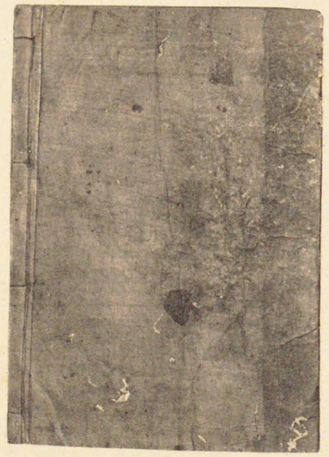
原本卷四表紙　　同裏



原本卷三表紙

同　裏

原本卷四表紙



同　裏

序に代へて

熱心なる本會會員にして、勝れたる才能を有し、豐富なる資料と不撓の努力とに因り、將に其の研究の大成せんとする間際に當り、不幸夭折したる若き篤學者故下出隼吉君の爲めに、本會は日本社會學會と共同主催の下に追悼會を開きたる夕、遺族の方より本會に金壹千圓の寄贈を受けたのである。

本會はその好意に感激し、此金員にて故人の志を成すべく最も有效に使用すべく、種々評議の末、爰に先づ『新聞叢叢』の刊行を企つるに到つたのである。

唯だ、その出版に際し、思はざる幾多の事故の爲め、發行を遲延せしは、故人に對し、將た遺族の方に對し、眞に申譯なきの極みである。茲に改めて陳謝の意を表するのである。更にまた悲むべきは、本會の首腦として、本書の刊行に盡力せられし吉野博士が、本書の出版を見ずして逝かれたことである。

『文學士經濟學士下出隼吉君が英明の資をいだいて夭折されたのは、たゞに下出家に取つてばかりでなく、同君のあらゆる交友、中にも學問上同じ道を辿つて來た知人に取つて亦大なる損害であつた。漸く緒について周圍からも近き將來の大成を期待せられてゐた學的業績を中途にして去られたのは、故人に於ても嘸殘念であつたらう。玲瓏珠の如き人格を永久に取去られたのは、後に遺れるものに取り何物に

も換へ難い苦痛である』と、下出君を哭せられた吉野博士も、また此語を以て弔せらるゝに至つたのである。人生眞に朝露の如し、本會の重要なる二人物は終に永久に歸らぬ門出に立たれたのである。我等會員は一同奮つて故人の志業を大成すべく、本書の刊行を機とし、茲に故人の靈位に誓ふのである。

明治文化研究會

同人一同

解題

慶應三年に『西洋雜誌』を發行して、雜誌の魁を爲し、次いで翌四年『中外新聞』を發行したる『會譯社』は、實に我邦新聞文化發祥の苗圃である。

此社の同人は

柳河春三、蘭鑑三郎、荒木謇之進、加藤弘藏（弘之）（文學博士 法學博士 男爵 樞密顧問）、箕作貞一郎（麟祥）（法學博士 男爵 行政裁判所長官）、堀達之助、竹原勇四郎、內田彌太郎、渡部一郎（溫）、石橋鎗次郎、春田與八郎、外山捨八（正一）（文學博士 文部大臣）、箕作奎吾、黑澤孫四郎（河津祐之）（遞信次官）、鈴木唯一、石川長次郎、小川吉之助、堀越英之助、川本淸次郎、市河齋宮等であり、明治初期に活躍した洋學者の大部分は、此同人である。而して、その首腦として牛耳を執つて居つたのは、柳河春三であつた。これ等の人々は、幕府の新學研究所たる『開成所』（帝國大學の前身）の敎授職、若くは、その同好者であり、始めは、その職務として、外國新聞の飜譯を爲し、當局の參考に供して居つたのが、漸次、新聞雜誌に興味を感じ、その飜譯の草稿を主として筆寫の回覽雜誌を作り、この團體を會譯社と稱して居つたが、これだけで滿足せず、遂に『西洋雜誌』『中外新聞』を發行して、近世文化に大なる貢獻を爲したのである。

また、一面、これ等の人々は、その職務の關係上、機務に通ずることが早く、その種を持寄つて書き蒐めたのが『新聞蒼叢』である。外字新聞の飜譯は公にせられたのだから差支はないが、これは機密の事でもあり、特に何事にも祕密を貴ぶ幕府のことであるから、同人間にのみ知られ、一般には極祕に附せられて居つた爲め、世に知らるゝ機會はなかつたのであるが、近年に至り、柳河春三と刎頸の交あり し會譯社同人の一人たる渡邊一郎の遺族の手に保存せられてあつたのを發見せられたのである。

此書は祕密にせられて居つた丈け、ニュースとしても、將た史料としても貴重なる幾多の材料に充滿して居る。

第一卷は慶應元年十一月に始まり、第二卷は慶應二年八月より、第三卷に至つて『戊辰新聞蒼叢』として號が改まつて居る。それに續いて別冊に『會議之記』が第四卷となりて『妄に他見を許さず』と大書してある。この頃となりては、別に『中外新聞』が發行せられて居り、この書の中から、公にして差支なき二三の記事が轉載されて居る。

此書の取扱つた時期は內外多事の際であり、特に長州征伐のときであつたから、これに關する記事が多い。それに內國の報道ばかりでなく、海外留學先よりの通信もあれば、京阪へ出張の同僚からの通信もある。

これ等の文中『長州の高杉新作』とか『薩の西鄕橘之助』などの句もあつて、薩長の豪傑も、當時幕府側にはあまり聞えて居なかつたことが知れる。幕軍を官軍と書いてあるのは、此書としては當然の筆法であるが、長賊とか賊徒襲來とか書かれて居るその所謂賊軍が、追々勢が强くなり、所謂官軍は頻りに敗れ、はては諸侯の軍は賴むに足らずとし、旗本だけが官軍であるらしくなり、これも漸次駄目となり、苦しまぎれに外國の力でも借りるより仕方がない。手段は選ぶところではない。どうでも幕府の面目は維持せなくてはならぬといふ窮狀が歷々として看取されるのである。これに付きては、從來知られて居なかつた驚くべき史料がある、それは

丙寅六月二十五日夜、佛蘭西ミニストル應接大意　但密話（二七八—二八四頁）

といふのであり、幕府の征長總督たる小笠原壹岐守が、密に佛蘭西公使のロッシュと會合し、長州征伐の密議を凝らした問答筆記である。幕府と佛蘭西との關係は、從來は朧氣ながら知られて居り、長州征伐も佛國の軍艦軍資を借りる約定があつたからだとの說が漠然として傳へられて居たに過ぎなかつたのであるが、實際は、こんなに迄進んで居るとは思はなかつた。これでは、まるで、幕府の長州征伐でなくて佛國の長州征伐を幕府が助けて居るやうな形である。

さうかと思へば

大君 Comeubine 三名御抱相成候、尤ホトグレヒーにて御撰ミ上、二條城へも御住込に成る評判なり。（三〇一頁）

との大君（タイクン）即ち慶喜將軍の珍聞もあり、同時に寫眞史上の一史料もある。

最後は、東海道先鋒總督の駿府着の記事に終つて居るが、別冊の『會議之記』も、始めて世に出た貴重なる史料である。

それは、明治元年正月、幕府側の諸藩士が、開成所に會して攻守の方策を議したとのことは、從來傳はつて居つたが、その内容は不明であつた。然るに、この『會議之記』にはその詳細が記されて居り、當時の佐幕側の意嚮を知るに好箇の史料である。

而して、この會合の主催者には、柳河春三が首腦者であり、その記事の大部分も柳河の筆蹟である。これに依り、柳河が明治政府に招聘せられながらも遲疑して應せなかつた事情や、その後、明治政府に仕へて大學少博士まで進みながら、突然免官された眞相も解することが出來るのである。

また、此書の末尾にある神田孝平（男爵・元老院議官）の『會議法則案』加藤弘藏の『會議法の愚按』は單なる會議法の史料としても珍らしいものである。

尾佐竹猛

新聞叢叢　目次

明治文化研究會同人一同

序に代へて　尾佐竹猛　卷頭

解題　卷頭

卷一　乙丑冬月爲始　柳河春蔭

〔序言〕　一

乙丑十月　朝廷ゟ御差出之御書付　九

十月九日於西城御達之趣　一一

十月十四日於西城御達之趣　一三

京師書翰中抄寫日表　一三

丑十月七日兵庫港ゟ碇泊外國船へ御渡し相成候開港　勅許之御書付　一三

丑十月十三日神奈川ゟ來る　一四

丑十月八日水野和泉守殿御渡候御書付寫　一五

和泉守殿御渡十六日朝　一六
同斷　一七
丑九月下旬薩藩ゟ　京師へ建白書寫　一九
〔日本政府ゟ御注文相成候御軍艦貳艘〕　二〇
風海情　申渡　二三
攝海ゟ渡來の佛國より差出候書翰　二四
口達書　二五
横濱來書中異人の說話　二九
和蘭□西周□報告　三〇
高杉新作と云者の詩　三三
長州八ヶ條答　三四
長防所置候儀に付　幕府ゟ御建白有之候處再度　天朝ゟ御沙汰寫　三六
別段從　天朝御沙汰書　三六
三月廿日出浪華書狀ミ大意抄寫　三六
寅正月紀州ゟ建白　三八

宍戸備前介藝州藩ゟ差出候書付左ミ通　三九
勅書　四〇
再度從　天朝　御沙汰書　四〇
別段　天朝御沙汰寫　四一
寅正月廿九日付二月八日來着浪華密談　四一
薩州重臣より幕府ゟ建白書　四九
寅三月十九日召捕相成候者　五一
あづまより〔和歌〕　五二
紀藩廻達寫　五三
紀藩ミ者ゟ柳河へ文通ミ寫　五四
從浪華來狀ミ寫　五四
四月五日　周防守殿御渡し　五七
同月八日〔同〕　五七
〔御沙汰書〕　五七
〔六月十七日河津駿河守發途〕　五九

六月十二日附大坂表ゟ差越候書狀中書抜　五九
大坂當月十八日出來狀之寫　六一
江川太郎左衞門支配下之者ゟ之文通　六二
六月廿八日陸軍方之咄　六三
紀州殿御家來ゟ御使番松浦彌五左衞門より來翰之寫　大島炮發承書　六四
〔六月十五日石州口戰爭〕　六五
中國筆報　六六
六月十九日伯耆守殿ゟ　紀伊殿御城附ゟ　六六
六月八日大坂に於て差出候　六八
紀藩某より來る浪華信報抄寫　七〇
七月十一日出横濱在留馬岡源十郎ゟ之書翰左之通　七二
七月十五日或人の文通に　七三
御持小筒組谷中七郎右衞門藝州大野村ゟ六月廿五日出書狀寫　七三
七月七日着坂　藝州表高尾宗十郎ゟ之書狀寫　七三
覺〔六月五日御討入に可相成候所〕　八四
覺〔六月十七日小倉表へ長防騎兵隊〕　八六
伊賀守殿御渡　八八
中國筋戰爭に付討死之姓名　八九
六月十九日大島戰爭之節分捕之品　九〇
七月廿五日河内守殿御渡　九〇
〔伯州失策以來〕　九一
〔在上に失策有之〕　九一
〔紀伊侯先鋒閣下に白す〕　九二
〔七月十二日　紀伊殿御家老御呼出〕　長防士民中
尾州侯建白　九四
越前春嶽公建白　九五
宮津侯ゟ御屆　九六
御所ゟ御沙汰　九七
七月五日閣老板倉侯ゟ諸藩討手之留守居御呼出之御達し御渡之書付寫　一〇〇
石州口は十一里斗も押出し候所〕　一〇一
一〇二

〔元三條實美始五人ミ者大坂表ゟ呼寄候儀〕　一〇三
〔七月五日高階典藥少允福井豐後守於大坂　大樹公診察ミ上御容體書ミ一條〕　一〇三
大坂表より書狀抄錄　一〇四
浪華ゟミ文通に　一〇五
七月廿日長崎出狀七月晦日着　一〇六
廻狀〔七月廿二日〕　一〇八
雲藩廻達　一一一
濱田侯ゟ御返答　一一三
七月〔三日曉七ツ時頃長勢小倉領内裏邊ゟ軍艦四艘にて〕　一一四
七月十八日　細川侯家來より言上書　一一四
備前侯より再度御達　一一四
鍋島侯より御達　一一五
長州末家より藝州へ差越候書面寫　一一五
長州奇兵隊より井伊榊原陣所送來書面寫　一一六
七月十六日廿日市より書面寫　一一七
七月十六日廿日市より書面寫　一一八

薩州御屆書京師ゟ差出　一一八
七月廿二日御達　一一九
〔英國ミニストル薩州へ參〕　一一九
大監察塚原但馬守殿演話　英佛情實聞取書　一二〇
紀伊侯布告　一二一
〔朝鮮人佛人五名を殺す〕　一二二
〔臣〇儀初夏以來染疾罷在〕　一二三
御所より被　仰出ミ御書付寫　一二三
福山藩某書翰抄書　一二四
伯州ゟ被相渡候書付　一二五

卷二　丙寅八月始

順天錄　一四五
作者不詳　夢の評　一五三
藝地新報　一六一

浪華大風雨　一六四
美濃守殿御渡御書付　一六六
覺〔今般遊撃隊被　仰付候〕　一七〇
浪華ゟ之文通　一七〇
御役替　一七一
伊賀守殿御渡し　一七二
〔寅八月八日惣出仕有之左之通被　仰出候由〕　一七三
〔八月朔日諸役人諸番頭　御目見以上之向迄　松平周防守殿御達〕　一七四
七月廿五日福山御屆書　一七六
寅七月因州候家中へ觸達　一七六
壹岐守殿ゟ　一七九
濱田侯ゟ御屆書　一八〇
雲州末家廣瀨ゟ御屆書　一八一
長防士民中ゟ雲州侯御家老へ送檄文寫　一八二
近國幷兩敬等之諸藩へ同斷

小倉ゟ御達之覺　一八三
七月廿一日廣島町觸　一八三
宇和島侯ゟ御達書寫　一八四
阿州備前藝州三藩連書建白　一八五
〔七月廿九日於京師御沙汰之事〕　一八七
七月廿五日美濃守殿御渡　一八九
七月廿六日水野出羽守様ゟ御達書諸藩討手之面々へ　一八九
七月廿六日稲葉侯ゟ御渡　一九〇
或る書翰中〔西筋も兎角不妙なる事〕　一九〇
八月十二日於大坂表中津侯ゟ御屆　一九一
京師密報會藩祕話　一九一
伊東長春院ゟ之書翰　一九三
京坂周旋方往復寫　一九三
酒井若狹守様ゟ御案内　牧野豐前守様へ來る別紙寫　一九四
越前藩瓜生三寅直話　一九四

京師書翰大略

八月十六日　新大君御上書　一九六

寅六月毛利大膳大夫父子罪狀左之通　一九七

寅五月廿九日於廣島表伯耆守に差出す　一九八

〔五月十五日閣老板倉侯熊本侯御家來御呼出に付〕　二〇三

〔寅五月廿七日藝州廣島大手筋一丁目其外三ヶ所昨夜張紙左之通〕　二〇四

寅四月於大坂表藝州建白　二〇五

同侯再建白　二〇六

寅正月一橋公御建白　二〇七

〔紀伊殿家來立石壽一郎儀藝州表去六日出立今十二日着坂　御城に罷出美濃守殿に御逢有之　二〇八

持參之書面〕

申聞覺〔紀伊公爲惣督既に大軍を率ひ我境上に被臨候〕　二一三

薩州へ長藩ゟ差出候書付　二一三

〔京師にて春嶽公板倉侯壹岐守樣御議論にて〕　二一四

一橋中納言殿御參內被爲濟候に付御達　二一五

〔此度薩藩京師爲御警衛人數一隊上京〕　二一六

山階宮へ薩州ゟ申立候五ヶ條　二一八

〔兵庫開港之儀幕府閣老中連名にて條約相濟〕　二一八

〔禁闕御守衛之儀〕　二一九

〔去月廿七日下ノ關賊徒方ゟ乘船にて襲來致〕　二一九

兵庫神戸灘大水　二一〇

〔和泉守人數先手頭奉行之內〕　二一〇

〔先達て御屆申上候通大坂廻米船壹艘〕　二一〇

〔若狹國領分越前國敦賀表に蒸氣船不日相廻り長州人乘組之旨〕　二一一

〔一橋樣御用人梅澤孫太郎去る廿日（八月）軍艦にて左之通御家々に御談示〕　二一二

八月五日假建丶丶丶に留守居被召被傳達候趣　二一二

所司代ゟ傳奏へ御達　二一二

〔德川中納言　今般致相續候に付ては兼て言上之趣も有之〕　二一三

九月二日於大坂表御渡　二一三

富士山御船日記拔書　二一四

在藝　紀藩ヨリ士ゟ書翰中　二三一
八月十四日於藝地紀州侯ゟ諸藩へ　御下けに相成候御書取寫　二三二
井伊侯答書　二三三
榊原侯答書　二三四
脇坂侯答書　二三四
明石藩士ヨリ答　二三五
八月　天朝より紀伊侯へ御沙汰ヨリ寫　二三五
備前侯藩中へ御達ヨリ趣　二三六
九月二日大坂來書に曰　二三六
備前侯自筆建白ヨリ寫　二三七
九月十八日或人ゟヨリ文通〔上方狀到着京坂の模樣おもしろからず〕　二三九
南瓜論　二四〇
〔大坂ゟ原市之進爲御差登相成諸藩御召ヨリ儀〕　二四一
〔松平安藝守家老辻將曹　右は此度長州表ゟ被差遣〕　二四二
〔御軍艦奉行勝安房守　御目付織田市藏　右大坂表御出帆〕　二四三
八月晦日夕於藝州表出羽守殿御達　二四三
京師風說　二四六
〔今般德川氏ヨリ暴擧防長ヨリ士民奮激終に戰に相成候は〕　二四八
津山侯御達寫　二四九
寅九月五日朝大坂ざこば丁下ヨリ橋邊張紙ヨリ寫　二五〇
八月廿八日小倉侯へ御達　覺　二五一
〔水野羽州病氣大切ヨリ風聞有之候〕　二五二
外國へ學藝修行罷越度相願候者名前書　二五三
泰平論　二五六
寅七月下旬坂地に於て會藩大野英馬淀閣老へ中立議論ヨリ大意　二五七
七月廿七日京地今出川町役人を藝州邸ゟ呼相渡候書付　二五八
寅七月薩州侯父子建白　二五九
寅八月藝州侯建白　二六二
寅七月高田侯建白　二六三
寅八月七日長賊ゟ高田侯陣所ゟ差出候書面左ヨリ通り　二六五

作者不詳

寅八月三日於大坂表美濃守殿に被差出　二六六
〔寅八月小石川　近來幕威微衰諸大名其命令に從はす〕　二六九
九月四日御勝手御用番周防守様に差出　二七一
九月廿六日京都發開木所筆記方木寺籌太郎書翰に　二七一
八月廿一日二條殿外へ張紙と寫　二七二
巷說　二七三
演舌と事　二七三
寅九月京師來翰　二七四
前一橋中納言殿諸侯に於大坂被　御渡寫　二七五
寅八月藝州侯藩士達命　二七五
佛蘭西公使より長州に差贈候書翰譯文　二七六
能勢大隅守より各國コンシュルへ差遣候書翰寫　二七八
丙寅六月廿五日夜佛蘭西ミニストル應接大意　二七八
八月廿八日小倉表戰爭中津藩探索方より差越候模樣書　二七四
越前老公建白寫　二八七

本月八日附京師市川齋宮より加藤弘藏に之書狀別紙寫〔公務と略記〕　二八九
同地西周助より加藤弘藏に之書狀寫　二九〇
寅八月檄文　二九一
寅九月奥平大膳太夫様より御屆　二九三
長州より差出候口上書寫　二九四
挨拶振　二九四
十一月朔日一閣老の藩士より文通中に〔今般彌廢甲〕　二九四
兩傳奏雜掌より達と寫　二九五
十月廿八日京師文通と內　二九五
和宮様より御詠三首　二九六
天璋院様の御詠七首　二九六
京師新報　二九七
市川　西　十一月十六日出京師報告大略　二九八
寅十月廿三日於紫宸殿御香と間　關白殿下御執達　三〇〇
十月廿八日於御茶座敷　上意　三〇〇
三〇二
三〇三

丙寅十月小倉表風説　三一〇五
所司代より傳奏に達寫　三一〇六
備前侯が黄門公に被差出候書寫　三一〇六
〔十一月朔日　松平宰相中將〕　三一〇八
〔二條殿御辭職願御添書寫〕　三一〇八
〔賀陽宮御辭職御願書寫〕　三一〇九
〔十月廿八日傳奏に　島津中將〕　三一〇九
〔謹て奉言上候　前大納言慶勝〕　三一一〇
〔謹て奉言上候　前大納言慶勝〕　三一一一
〔今般於　宮中　叡慮ゝ御旨奉畏　加賀宰相〕　三一一一
〔德川中納言樣言上ゝ趣　仙臺中將留守居國府〕　三一一二
〔上杉式部大輔　長々滯京苦勞被　思召〕　三一一三
〔有馬中務大輔　先月被　召候處〕　三一一三
〔細川越中守　先月被　召候處〕　三一一三
〔松平大藏大輔　先頃滯京ゝ處〕　三一一三
〔去月被　召候處所勞に付　紀伊中納言〕　三一一三
〔薩に　今般被　召候處〕　三一一三
〔仙臺中將　去九日被　召候處〕　三一一四
〔去月廿六日家來御呼出にて　松平三河守〕　三一一四
〔今般於　宮中　叡慮ゝ御旨奉畏　加賀宰相〕　三一一四
〔山内整之助樣此度御暇被下〕　三一一五
臘月廿七日着赤城書拔　三一一五
雲州侯伺書寫　三一一五
十二月十九日夜於和州郡山敵討　三一一六
〔大君命を下して京坂吳服店が反物を買ふ事最多し〕　三一一七
民部公一子佛行　三一一八

卷三

佛蘭西人外國局に贈る書翰　三一二三
薩摩琉球國主の褒賞金〔圖版〕　三一二六

京師探索書　一八
五月上旬着　京師密信抄寫　三三七
丁卯十月十四日被　仰上ミ御書面寫〔或探索家より借り候書面ミ寫〕　三三一
卯十月十八日京便着ミ内　三三五
檄文〔大丈夫誰か國家を泰山の〕　三三八
〔今般御改革に付　紀伊亞相公より京師へ御建白ミ寫〕　三四一
卯十月紀邸におゐて諸家留守居に爲讀聞候書付寫　三四五
千八百六十七年第十一月四日江戸にて　三四七
丁卯十月廿二日三田侯御家中に達寫　ポルスブルック　三五〇
〔德川内府征夷御委任大政返上〕　三五一
〔十二月廿五日鳥居丹波守手に酒井左衞門尉其外にて召捕候者〕　三五三
卯十二月十六日於浪華城外國公使御應對ミ書取　三五五
無題〔王自尊矣〕　三五七
大槻盤溪翁のよし〔可也非耶可也非〕　半林下人眞一翁　三五九
〔卯十二月新戲場　演石川五右衞門假聲〕　三六〇
〔圖版〕　三六〇
〔卯十一月廿五日夜　美濃守殿に渡〕　三六一
〔十二月廿八日於日御門前薩士長藝ミ兵操練〕　三六二
〔當月三日午刻頃か京都混雜ミ儀〕　三六四
〔正月八日浪華か急報有之〕　三六四
〔正月七日午過神奈川驛燒失〕　三六四
正月九日着浪華書狀寫　三六四
或る糖商の報告　三六五
〔紀藩某か來る〕　三六六
〔昨三日四時頃薩州戎裝にて多人數伏見ミ方へ押行候〕　三六六
〔昨夜中ミ處大坂勝利にて餘程京近く掛り候處〕　三六六
正月五日關宿より出たる書狀　三六七
又同日出ミ書翰　三六八
辰正月十日美濃守殿御渡　三六八
〔正月九日八時頃一見第三度目　大久保主膳正殿用達か四日附書狀八日相達す京都町奉行〕　三六九
　三七〇

〔正月四日出飛脚八日着〕　三七一
武家の目覺　田島貫道　三七三
〔辰正月十日美濃守殿御渡〕　三七四
〔正月十日於江戸表　老中格被　仰付〕　三七六
〔正月十日　營中噂〕　三七六
陸軍奉行ゟ借寫　三七七
〔丹後守殿よりミ御書狀認上候　川勝近江守〕　三七七
〔京都ミ形勢飛脚問屋ゟ急便有之〕　三七八
〔過刻申上候通今夕刻手配圖面取調中先方ゟ打掛　竹中丹後守〕　三七九
辰正月十日晝時過着大坂報告　三八〇
正月十一日營中おゐて聞取書〔浪華報告大意〕　三八一
別報ミ内抄錄　三八三
阿部美作守ゟ　三八四
阿部美作守家來ゟ達ミ覺　三八四
慶應三丁卯十二月朝廷ゟ獻白　三八五
〔十二月十二日　今度武家傳奏御役所御廢に付〕　三八七
〔參與役所五藩士參勤姓名〕　三八八
長征ミ儀に付差出候建白書　〔武内孫介〕　三九一
〔條約通信ミ國々事有時は互に應援致し候〕　三九四
〔卯十二月於浪華城外國公使御應接振〕　三九五
〔正月十一日夜五半時頃　還御御供〕　三九七
〔六日夜回歸丸へ　御乘込佛人シャノワン乘組〕　三九七
〔三日ミ戰　官軍初に勝利其後連敗〕　三九八
〔彥根　追々切迫ミ形勢に押移り東兵上京〕　三九九
天朝ゟ御屆　〔尾張前大納言　越前老侯〕　四〇〇
當今治定之文　四〇〇
正月十四日朝密報　四〇一
〔德川慶喜天下ミ形勢不得止を察し大政返上〕　四〇一
〔御用候間明九日辰刻　參與役所〕　四〇三
尾藩ゟ到來　正月十三日着便にて御家中ゟ御觸達ミ寫　四〇三

〔水野彦三郎儀急に召ミ由にて昨晩出立〕　四〇四
京師にて御觸寫　四〇五
駿府より來狀寫し　四一〇

卷四

戊辰正月中旬　會議之記　開成所　四一三
會議日記　正月十三日　四一四
十四日　四一四
〔戮力同心して義を唱へ兵を聚め國家を再興〕　武内孫介　四一七
〔今日は屋敷の命に因て出席仕候にも無之〕　藤野善藏　四一八
〔攻を主とする事〕　赤坂勘次郎　四一八
〔幕府と存亡を共に仕候儀〕　岩崎直之助　四一九
〔國家重大ミ事件御會議有之趣〕　畫學局繪圖調局　四一九
〔國家ミ御大事件〕　齋藤勝左衛門　四二〇
〔此度御大事件〕　田邊潤之丞　四二一
正月十三日美濃守殿より内々御尋に付不取敢相認差出候建白書草稿　柳河春三　四二一
〔急攻〕　茂原肇　白石七左衛門　四二四
今日席上私論　阿部甚四郎　三雲理兵衛　四二五
〔攻守〕　榊原耿之介　四二六
〔攝城御退去人心沮喪〕　村上彌左衛門　四二七
〔兩度ミ御奏問〕　金子泰輔　四二八
〔守者攻にしかす〕　依田七郎　四二九
〔大坂城陷るとき諸侯奉行壹人も〕　四三〇
〔十四日夜集會登營上言候儀評決〕　藤野善藏　四三一
會議に付至極ミ急務二ヶ條　上野初三　四三二
〔謹て攻守ミ兩策を按するに〕　上野初三　四三三
〔草莽ミ微臣謹て按するに〕　名取平四郎　四三四
會議ミ要領　後藤達三　四三六
見込書　四三七
〔此度御國家未曾有ミ大事件〕　四三八

土井大炊頭藩一同ニ見込
〔唯守に安するの機會にあらす〕
〔攻守ニ支御尋に付〕
〔國家存亡極切迫ニ時勢に付〕
〔高聲に御讀上げニ儀は〕
〔今般拜見仕候御演說〕
〔當今極切迫ニ折柄に付〕
〔御相談に及候ニ愚意〕
會議法則案
會議法ニ愚按

挿圖　色刷三葉

校訂につきて

赤見　貞　四三九
十河鑑次郎　四四〇
小林平次右衞門　四四二
河上六郎治　四四四
武内孫介　四四五
熊谷武右衞門　四五〇
篠崎佳門　四五〇
稻野多藏　四五二
神田孝平　四五五
加藤弘藏　四五九

新聞叢書
卷一
乙丑冬
月西始

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おはつる頃は一冊を毎日
ものを書き新聞を読む度毎
に諸氏の業を見るに多く
一面を面白くする点是也
片輪劇幾分か教俠を訪き
海事に関する事柄を
[illegible]

作品の三章は法を宜く
導きすべきものなり
第一新聞の[illegible]何なる
文体の短事に大なる
[illegible]写
[illegible]
あへて拒絶せ
[illegible]

第二 [illegible]
の筆勢を [illegible]
若し其時 [illegible] 別紙を
[illegible] 可[illegible]

第三 [illegible]
[illegible] 是人幸を [illegible]
人[illegible] 借[illegible]

[illegible] 決[illegible]
[illegible] 許[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

慶應元年十一月

○

乙丑十月　朝廷ゟ御差出ゟ御書付

臣家茂幼弱不才ゟ身を以て是迄叨に征夷ゟ大任を承り乍不及日夜勉強罷在候處内外多事ゟ時に膺り上宸襟を安し奉り下萬民を鎮むる叀不能加之國を富し兵を強くして　皇威を海外に輝し候力無之竟に職掌を汚し可申と痛心ゟ餘胸痛強く鬱閉致し罷在候然處臣家族内にて慶喜ゟ儀は年來闕下に罷在時勢にも通達仕大任に堪可申奉存候に付臣家茂退隱慶喜へ相續爲仕政務相讓申候間臣家茂時ゟ如く諸事委任被成置候樣偏奉希上候尤當今時勢ゟ儀に付ては以別紙奏聞仕候間右慶喜ゟ御沙汰被下候樣奉願置候

御別紙

臣家茂謹て宇内ゟ形勢を熟考仕候處近來追々變遷致し和親を結ひ有無を通し互に富强を計候風習に推移候上は是迄天地自然ゟ氣數不得止ゟ姿に可有之奉存候就ては　皇國に限り一向御外交不被爲在候ては卑

怯退縮ミ姿に相成御國體御國威とも却て相立申間敷既に先年於下田亞墨利加使節ト和親條約爲取替相成候も右等斟酌ミ上遂奏聞御許容相成候儀にて其以來追々鎖國ミ舊格を變し富强ミ基漸々相開け候處其後外交拒絶ミ儀被仰出候付可成丈　聖諭遵奉仕度志願に御座候へ共無謀ミ掃攘は致間敷旨被仰出候趣も有之候間何れにも富國强兵ミ策相立候上ならては膺懲ミ典難被相行就ては彼ミ所長を採り貿易ミ利を以て多く船礮を設備以夷制夷ミ術を講し候方當今第一ミ急務と奉存候是迄種々苦心罷在候折柄防長ミ事件相起り終に大坂城迄出張仕候處不料夷舶兵庫港へ渡來條約ミ廉々改て　勅許有之候樣申立若し臣家茂(E)於て取斗兼候へは彼　闕下ゟ直に可申立旨申張種々論談を盡し應接仕候へ共何分承諾不仕去迚無謀ミ干戈を動し候ては必勝ミ利無覺束縱令一時は勝算有之候共四方環海ミ御國柄東西南北旦暮攻掠を受候て戰爭無已時は　皇國生民ミ糜爛此時より相始り可申不仁不慈此上は有之間敷誠に以て歎敷儀臣一家ミ存亡は暫く差置寶祚ミ御安危にも關係仕實以不容易儀にて　陛下萬民を覆育被遊候御仁德に相悖り可申哉臣家茂に於ても職掌相立不申候間右等ミ處篤ト　思召被爲分乍恐衆口に御動搖無之斷然ミ御卓識被爲立何卒改て條約に付去虚存實至當ミ談判仕候儀判然ト　勅許被成下候樣仕度左候へは如何樣にも盡力仕外は外夷制馭ミ實備を立内は防長追討ミ功を遂上　宸襟を奉安下萬民を安堵せしめ臣家茂祖先ミ志に報ひ可申志願に御座候　皇國如何樣英武ミ御國に候共萬一内亂外寇一時に差湊ひ西洋萬國を敵に引受候ては終には　聖體ミ御安危にも拘り萬民塗炭ミ苦に陷り候は必然ミ儀と誠に以痛哭慨歎ミ極假りにも護國安民ミ任を荷ひし職務に於ては如何樣御沙汰御座候共施行仕候儀何分にも難忍奉存候仍て前文申上候通速に勅許ミ御沙汰被成下候はゝ百萬寶祚ミ無窮萬民ミ大幸無此上千々萬々奉懇願候寔に不堪悲歎號泣ミ至奉存候尤外夷　闕下ゟ罷出候樣相成候ては深く恐入候儀に付精々盡力遂談判來る七日迄兵庫港に爲差控候間成丈早く御沙汰被成下候樣仕度此段奉奏聞候

○

十月九日於西城御達ミ趣

方今内外御事多ミ折柄　宸襟不被安次第柄にも有之御職掌において御痛心ミ餘御胸痛御欝悶被爲在候就ては一橋中納言殿永く京都にも有之事務にも被相通候儀に付中納言殿ゟ御相續御政務御讓被遊度旨　御所ゟ御願置被爲在候此段御内意申達候樣御沙汰ミ事

此度　御所ゟ被仰上ミ趣も有之に付去三日大坂表御發途先伏見へ被爲入御泊夫ゟ東海道還御可被遊旨被仰出猶又還御ミ儀は御沙汰止伏見ゟ御逗留可被遊旨被仰出大坂御城出御陸路被爲成伏見奉行御役宅ゟ着御被遊同四日同所御發途御上洛可被遊旨被仰出候事

十月九日

十月五日　御參内大評議ゝ上開港は
勅許乍併條約ゝ廉々に付ては列藩衆議ゝ上可遂奏聞旨被　仰出候よし

○

十月十四日於西城御達ゝ趣

方今内外御事多ゝ時に膺り　御職掌難被爲　遊思召且近來御胸痛御臀被爲　在候に付御退任被遊度旨
御所ゟ御願置被爲　在候處難被及　御沙汰段被　仰出素ゟ御決心ゝ儀に付再應御願可被仰立候得共猶再
三再四御熟考被爲　在候處格別ゝ　御寵命を以被　仰出候に付　御感激ゝ餘り諸事御奮發御勉强被遊是
迄ゝ通御政務御掌握可被遊旨御受被仰上候此段相達候樣との　御答に候事

○

京師書翰中抄寫日表

十月二日午後尾張玄同殿御辭表御持參俄に御上京
三日朝御供揃（但四時過に相成）還御ゝ御支度にて大坂御發夕方に平方迄夫ゟ徹夜　御旅行四日曉六時前伏見御着
四日晝頃京都ゟ　還御御差留急に御上洛ゝ事御使を以被仰進七時頃伏見御發夜四時頃二條御着城

五日朝小笠原壹岐守京都發足兵庫へ行
　右ゝ通

○

條約ゝ儀
御許容被爲在候間至當ゝ所置可致事

別紙ゝ通被　仰出候に付ては是迄ゝ條約面品々不都合ゝ廉有之不應
叡慮に付新に取調被相窺可申諸藩衆評ゝ上　御取極可相成候事
　兵庫ゝ儀は被止候事
加州　薩州　細川　筑前　藝州　越州　因州　備前　土州　藤堂　會津　桑名　柳河　久留米
右ゝ周旋方壹人つゝ差出評議ゝ由

○

丑十月七日兵庫港ゟ碇泊外國船へ御渡し相成候開港　勅許ゝ御書付

家茂ゟ

條約之儀
御許容被爲在候間至當之
所置可致事

右大君ゟ　朝廷ゟ御歎願に相成候御書付相添伯耆守ゟ異船ゟ御渡に相成
但し英之通辯官佐道自筆之寫
異船九日朝兵庫港出帆十日夜初更横濱着岸

家茂ゟ

○

丑十月十三日神奈川ゟ來る

然者去月出帆之英佛蘭亞之軍船昨夜歸港有之候に付尋問いたし候處本月五日斷然　皇帝より　大君ゟ外國和親彌以懇篤致候樣御詔命相成且　皇帝より御直々御刀御陣羽織御拜領長州追討之命有之候趣カシヨン（佛の書記官）申聞候諸侯も三十頭程出張致し一同　大君ゟ恐入申述候由且關白幷内大臣共下坂有之候旨且カ

ション事坂地御城へ五六度參候旨申聞候尤最初は戰爭可致積故佛人抔は上海へ軍艦の迎ひとして差遣候よし然處前書之通相成申候
英ミニストル儀は上海ゟ大坂灣より直に自分妻を迎に參候趣に御座候
島津三郎儀も内々出坂之風聞有之候　下略

○

丑十月八日

水野和泉守殿御渡候御書付寫

大目付（ゟ）

阿部豐後守松前伊豆守事
叡慮趣被爲　在候官位被　召上候且於國許謹慎
御沙汰相待候樣
御所ゟ被　仰出候依之御役御免被成候間在所ゟ罷越慎可罷在候
右之通於大坂表去る朔日被　仰出候間向々へ可被達候

丑十月八日

○

制曰朕雖不肖踏天下萬民之上以敬天法祖續紹天位大業久成爾來宇内形勢不寧朕不安心爾將軍家茂盡力内則務而富强外通交于外夷採彼所長捨我舊典則朕實喜賴爾家茂合列藩力盡忠滅亡防長擒宰臣父子早奏凱歌定行封賞爾其欽哉

右勅書は眞僞おほつかなし

大君於　京師陣刀陣羽織拜領ありしに依て何人か此書を僞作せるにやあらん

○

和泉守殿御渡十六日朝

大目付に

松平肥後守事兼て御政事御相談之儀之　仰出有之候處當今不容易御時節に付猶又厚く申談無伏臓十分に取斗候樣被　仰出候

右之通去る七日於京都被　仰出候間爲心得萬石以上以下面々に可被達候

十月十五日

同斷

大目付に

小笠原壹岐守事去る九日於京都加判之列被　仰付候間此段向々に可被達候

十月十五日

○

此度格別之被爲蒙

御寵命御請は被　仰上候得共何分不容易御時節柄候間中納言殿に御政務御輔翼之儀被　仰出候別て十分

御助力被爲在候樣被　仰付候

右之通於京都去る十日被　仰出候間爲心得萬石以上以下末々迄云々

○

公方樣去る三日二條　御城

御發途伏見ゟ淀川通
御乘船同日大坂　御城ゟ
御着座被遊候事
十一月十一日

○

十一月

兵部少輔と改名若年寄被　仰付候

稲葉幾餘翁

加判ミ列被　仰付候

松平周防守

○

過日中より度々書翰差出其都度回答可及所我國多端にて延引相成氣ミ毒ミ至に候右回答旁左に申述候間可然了解有之候樣致度存候

一條約ミ義我　大君格別御盡力にて京師ゟ被仰立別紙ミ通御許容に相成候

一兵庫開港ミ義は直に談判致兼候固よりロンドンミ約定に極たる日限に開く積なりと雖萬一事情に依て

早々開候節は可開右ミ一件早速に難定候間我等ゟ江戸表ゟ申遣候下ノ關償金ミ第三度目可相納は約定ミ通り日本十二月中に可相納候樣申遣候其外は一千八百六十四年十月廿二日ミ條約面ミ通執行可申候

一稅改方ミ義委細承諾せり其段急速水野和泉守酒井飛驒守ゟ申遣於江戸表精々談判候樣爲取計可申候此段申入候相呈謹言

慶應元丑年十月七日

松平伯耆守　花押
松平周防守　同
小笠原壹岐守　同

○

丑九月下旬薩藩ゟ　京師へ建白書寫

此度兵庫表夷舶來着ミ趣意柄詳に承知不仕候得共過日阿部豐後守樣松前伊豆守樣御應接ミ上開港十日ミ期限に被相究右に付

大樹家不日　御上洛右事件

奏聞被爲在候哉に內々承知仕候就ては兵庫表ミ儀　帝都近殊に海內ミ要港にて素ゟ　勅許被爲在候儀ハ不奉存候墨夷初て襲ひ來候後積年確乎不被爲在　御動候儀は兼て拜承仕候付乍恐聊苦心仕候儀は無御

座候得共萬一
御動揺御許容被爲在候ては
皇國ゟ存亡未曾有ゟ御永恥千歳御取返しゟ期有御座間敷實に人心ゟ向背相拘り莫大ゟ御後難此一舉と奉
存候間　聞召不被爲在
皇威嚴然相立候樣有御座度奉存候左候はゝ日間も相懸り候儀にて强情申張萬一輕舉ゟ振舞も候はゝ速に
御打拂被
仰付度左候へは弊邸當分人少には御座候得共修理大夫大隅守兼て申付候趣も御座候間御先鋒相勤聊奉報
御國恩度御座候間兼て
聞食置被下度此段遮て奉願候樣重役共申付候事

松平修理大夫家來
某

九月

○

日本政府ゟ御注文相成候御軍艦貳艘ゟ内壹艘出來近々相迴り候由右御入用積左ゟ通亞國官吏ポルトメンより申立る

政府御誂にて製造いたし候富士山と號するコルヘット蒸氣軍艦幷諸品勘定書

第一　船　二十一萬六千六百六元八十五セント
第二　軍器　二萬三千四百七十二元三十九セント
第三　器械　二千百三十八元三十七セント
第四　船中用意品
三萬五千七百五十六元四十九セント
第五　乘組士官幷水夫共給料
五千六百五元
第六　合衆國政府預中失費
三萬百六十六元二十五セント
〆三十一萬三千七百四十五元三十五セント
但合衆國通用金にて
墨兵哥銀に直し
二十九萬九千八百八十四元六十八セントなり
但墨銀一元に付通用金

一元〇四セント六分貳厘貳毛

右之處ゟ六十萬元亞國ゟ御預け相成居候事

右フジヤマと號仕る軍船十二月七日入津のよし是は從來所有とちかひ眞と軍船にて御用に相立可申もの也と云

〇

風海情

申渡

其方儀近來世上騷擾と基本は外夷渡來後幕吏和親貿易と條約取結候を名と致し無賴と浮浪共未熟と書生血氣と狂勇等を煽動致し候抔とは乍申常陸坊源烈鹿兒嶋三六大江長門前輩內心開港の希望ありなから外面に攘夷鎖港と儀を主張いたし其虛に乘し自己の欲を遂可申企有之とは不心付種々の妄言を以幕吏を批判せしめ候を猥に信用致候者元來其方儀至尊と身を以匹夫と勇を好み候性質に被附込尊王と名義を唱音物等贈候義を全く崇と道を盡し候義と喜悅と思をなし彼是を依賴し尊位尊官を授け元より外國と義は勿論同國の事情强弱さへ更に不存攘夷は容易に出來候者と輕卒に心得諸民困窮人命に關係す可き大事の義

と不心付惣て無謀過激と暴論を正義と稱し微賤と藩士浮徒と妄言までも取揚品々不法の勅諚を出し三百年來と制度を犯し列藩を引付人心動搖せしめ候より諸藩台命を輕蔑し倒幕と議論におよひ候樣成行或は新政施行可致抔差圖におよひ又は監察使を差向國々も騷立諸藩を京師へ呼上け引留散財相掛候に付諸藩盡く及費弊候に至り候は其方心得振不宜より起候義既に京師兵火のために過半及燒亡候は天より下す災にて民の父母たる道理に相背き候罪科を示し候義に有之一體祖先以來相傳と皇統連綿たるは中古以來國政武家へ委任せしめ候故朝家難なく無異に相傳いたし候義に有之畢竟朝家におゐては佛に歸依し婦人の仁を仁とし詩歌管絃逸遊を旨とし男女の禮節不正の淫奔驕奢の風習を以て伊勢源氏物語抔の書を國史の如くに取扱武國遺風廢絕に及ひ鳥羽白河抔と不始末より國權武家に歸し候は却て皇國威武を持重し皇國安泰の良圖に候を不悟武家繁昌を妬忌し承久以來不謂企を致し身配所の鬼と相成候は自から招く災とは不心付終に建武の擾亂を起し一旦志を遂るといへとも素より自己の欲情より出候義にて是か爲に死亡も夥敷諸民困窮せしめ候其罪逃るゝに道なく正當と南朝及斷絕足利武將と建る處と北朝を以て皇統相傳いたし就中元和以來德川氏の治世六拾餘州蝦夷島々に至るまて德化に服し其方始め泰然たる上は假令何者か何樣申立る事ありとも動轉なく幕府へ委任致候はゝ世と騷擾も可少候處邪說を擧用し微賤の徒申立る暴論を是として國體を危くし萬民を塗炭に陷らしめんと相量り殊更皇國を焦土に致候とも不厭抔と以の外暴言を以不仁不慈を企候段重々不屆至極と次第不輕と罪科に候一體當今の夷狄は往昔と夷狄と類無之

國富兵強器械充實勝算を斗りての渡來に候得は彼に敵對いたし候は無智無謀自滅を招くの拙策に候を夷狄を攘ふは飯の上の蠅を拂ふにひとしく心得輕卒なる指揮に及候始末其方心得振不宜より臣下において も鷹司三條以下中山如き不屆なるものも出來候義に有之既に長州に被誘引流浪の身とも可相成と處僥倖にして免れ候上は悔悟謹慎と志を起し萬機幕府へ委任いたし可有之處今以其義に及兼候段欲念と爲に被暗候義と相聞不埒と至りに候急度も可申付候得共實以其方意中より出候事にも無之奸者の爲に被愚弄候を眞實と心得違候より事起り候義に付格別に令用捨不及其沙汰候向後可致改念此上心得違候はゝ嚴重と神罰を下すへきもの也

右之趣世上之於評定所八百萬神列座伊勢の神申渡御目付西洋天主相越す

○

攝海に渡來の佛國より差出候書翰丑十月五日禁中假建所に於て列藩被召出候節披見被仰附候由

此度某各樣方に得二御面語一可レ議の大事件に付吾隊の支配頭カションと申者に先其趣意を逐一申述候樣申附候就ては同人演述中に萬一申落等も可レ有レ之哉と心付別紙の通則書取を以差上申候御熟覽の上可レ然御存意可レ被二仰聞一候以上

慶應元年
丑九月
御老中樣

佛朗西全權
ミニストル
レオンロセフ

口達書

佛朗西全權ミニストル「レオンロセフ」申上候は吾政府　大君殿下に於て長州の重罪を猶豫すると更に其趣意を不レ知　大君殿下に於て今日迄急度其罪を不責唯彼か自ら過て降參するを待ち追々日數を費し給ふと云共今に至迄其證なく或は僞りて降參の約定を申立或は餘人立入りて終には　大君殿下の　御進發徒事に可成哉と某頻に此事を掛念して推參致し候」抑國民を哀憐するとは專ら人民の所務とはいへとも併　天子より預り先祖より受嗣所の天下泰平を亂さは仁心却て不仁となるへし倩(ツラ〳〵)方今日本の形勢を考ふるに上は　天子の　叡慮不レ決次に非儀なる謀反あり貴國の泰平に禍する者は不レ外此兩條にあらんか國政を委任せられしとなれは世界の變を見て時宜に從ふ故に各國と交易條約を取結はれし也素より條約取結のとは日本に於ても　天子及ひ諸侯方も政府と同意不成時は却て不慮の擾亂を釀すへし既に政府に背て内亂を爲す所の逆徒を日本政府に於て速に鎮靜方不二行屆一は各國より其逆徒を擊たんと既に

議定したり其期に及んて　貴政府より如何制し給ふとも不レ可レ從」就レ中英吉利政府の所爲を考ふるに交易を專として自己の利益而已を先とし追々疑念を生し彼の心　大君は最早無實意專ら鎖港の　思召ならんと思ひ居る所に薩州長州の大名英吉利に密に使者を遣はし何時となく二ヶ國に於て開港可レ致の存意を顯はし候故に却て諸大名と外國と睦しく交はるに獨　政府のみ鎖港の志有と英の政府深く疑ひ居候右の事實は貴政府に於ても未た疑ひ給はさるか右は某篤と觀定たる所ありて斯く申候故に英公使は是等の疑念を晴さんか爲上坂して右の實否を自ら辨明致さん存意に候得は過月某熱海に於て山口駿河守栗本瀨兵衞を以て　大君殿下は何れにも武威を振ひ給樣にと閣老衆迄申立置候其頃英の公使頻りに上坂せんとするを延日爲致之は前に述ふる如き大名の甘言は不都合なるへし併右は如何なる不都合なりとも其各國と兵端を開かは猶又禍大なるへし」亦日本にては發明したる武器も未た少く西洋には大國ありて其大國の兵士は年々の戰場を經て新に發明したる武器も多くあれは　日本政府の未た西洋に敵對する心なきは必定の理なり既に條約書を取替せし上は妄に廢する事叶ふへからす且鎖港せんには武備未た不調各國に使節を差遣し屢鎖港の談判に及ふと雖とも各國の政府敢て不三承引一左すれは戰爭の外他の策略不レ可レ有依て右等を貴國に災する者と申也」昨年毛利大膳意恨を含て外國船を妄に擊惱したる一件も速に僅の軍艦を差向て恨を晴さんと欲すれとも　大君殿下の制止難三默止一無三餘儀一軍艦引上候ひしか長防二國を攻擊ん事は素より各國政府の嚴令なり但　貴政府の主意に不レ戻か爲め各軍艦を引上けて長防を擊ん事は

止めたり」依て思ふに所詮外國條約の儀に付ては不レ惑樣篤と　日本の事情を說示し候故英公使今日迄出帆延引致したれとも最早待ち兼頻りに上坂せんとを望む若し一人にて大坂に至りなは如何なるとを申立候哉又は如何なる所業を致さんかも難レ計けれは猶又英公使と會議して某の意見を說き候故英公使某と同意して何事も卒爾の擧動無レ之樣堅く約して既に橫濱を出帆せんとするの日阿部豐後守樣松平伊豆守樣松平周防守樣より御書翰を得たり就ては此度某推參せしとは各樣方と計て諸事速に決斷致さん事を欲す左すれは英公使に理不盡なる擧動爲レ致間鋪若し各樣方格別の御配慮もなく御盡力もなきに於ては無三餘儀一某も英公使と同意して不日京師にまても推參可レ致候」佛公使至極の實狀を以て申進する條萬一この儀に付て

天子　大君と永く不レ被レ爲レ在三御同意一に於ては追々四公使上京の上推て　天子に可レ奉レ謁と公使等の衆議は既に決せり」素より於三京師一條約許容あらせられされは自然各國の疑心も不レ解して總しての交際大に親睦するを不レ得然る時は近來新に發明したる武器戰爭の珍書奇術等も不レ可三傳授一左すれは　日本堅レ國强レ武の策も不レ被レ行　貴國堅强せされは國不レ得レ貴國不レ得レ貴れは　天子及ひ政府も不レ貴就ては　大君　天子を貴せんとし給はゝ　天子暫く　各國の條約を被レ爲レ有三勅許一て交際の親睦を結給ふ樣　貴政府に於て宜しく御盡力肝要に可レ有レ之候」亦暫く各國と親睦し給はゝ多年を不レ經して貴國實に堅强なるとを可レ得若し極て堅强なるの後は譬ひ一二の外國より異論を發して　貴國人情に逆

ひ若しくは　貴國の疆界を犯さんとするまて理不盡の處置致す共其期に及んて大に防禦の力充ちなは各國の人心其時實に　貴國　天子を可レ貴又可レ恐」且　貴國の形勢を篤と按するに或諸侯不忠の働ありて表は鎖港の議論を立て且　天子まても及ニ　奏聞一裏には開港の志を抱き薩州長州の如き密に英國に使者を遣はし英政府と熟談して右二ヶ國の中の海邊に可レ然の地を擇て一個の港を開かんとの情を顯はせり然らは可ニ預願一兵庫を速に開港被レ成英吉利政府の疑念をも解かしめて不忠なる諸侯の邪謀を可レ挫御所置無レ之ては夥多の不都合を可レ釀も難レ計けれは此段篤と御賢察の上速に御明斷被レ爲レ有度存上候拜具謹言　〔原文片假名〕

慶應元丑年九月十九日

松平阿波守殿

右ニ奉書此度大坂御城に着御ニ上にて此以前の討手ニ面々に御達に相成尤文言攻口等ニ處は違候得共皆一同同文言にて近々討手ニ大名に御渡しに相成候ニ由

○

一筆致啓達候毛利大膳父子伏罪ニ儀御疑惑ニ廉々有之候に付右爲御糺大目付永井主水正御目付戸川鉾三郎松野孫八郎藝州廣嶋表に被遣大膳末家竝家老共ニ内且寄兵諸隊中ニ者も同所に呼出承糺ニ上模樣に寄惣御人數に差向候間上ノ關口二ニ見ニ心得を以て十二月五日限致出張差圖相待可被申候尤爲軍目付水野小左衞門被差遣候間可被相心得候且又攻口ニ割合別紙ニ通被仰出候間可被得其意候此段可相達旨依上意如此候恐々謹言

十一月　　連判

○

横濱來書中異人の說話

千八百六十一年横濱より潛逃して巴里斯に居る者あり倫頓へも參りたり此者熊谷宿一醫の弟齋藤健八郎と云ふ村上英俊門生にて一度横濱より賣船に乘付其事發顯して入牢し幸に免れて再乘付け巴里斯に至り或者の世話になり居る何も專學は不致れとも佛語は可なり出來候よし

薩州學生十五人倫同へ到れり居る其内三四人は餘程達學も出來へし一人前壹ヶ年七百金餘（八百元といふ）の費ありと

日本七月十五日に柴田日向守其外十五人巴里斯に着す此使節の趣意は佛國に書生を送る事又職人を出して學はしむる事又軍艦を造る事又長州一條ニ事と申せとも堅一尺幅五六寸の書翰箱を出したる由是は何事か不詳なれとも兵庫鎖港の事なるへし此節は尻を居へて談する積にや宿屋は入費多しとて借屋に移れ

り此人日本人を欺く才はあれとも佛人を欺き得へからす所詮叶はぬ事を云んより早く六十九年に兵庫を開く用意させよといふ評判也去年の使節は評判宜しからす唯ブンツキマン（使節に附添たる人）に欺かれ金を奪はれたるのみ柴田は前の使節より稍勝れたれとも却て日本の爲には覺束なし

和蘭傳習人は西暦來四月註文船にて歸る積り醫師の分は殘るともいふ

薩の貴族英國に在り諸處の大機器を見て驚歎し我一國の力の及ふへきに非されとも其中一二種は必す購ひ歸るへしといへりと

英國牡牛に一種の病流行し死する事國中三分の二なりボートルメルキの價これか爲に沸騰す

長州人三人英に在り二人は舍密を勉め一人は造船を學ひ居ると云ふ

○

和蘭□（不明）西周□（不明）報告

一當地にヘイメレイキ（祕密）のヘリフト（報告）あり我邦の爲めに甚た憂ふへき所なれとも果て其策の行はるゝ哉否やは知らす仔細は英國のプレミエル（上席）、ミニストル、パルメルストン去月中死去す是は有名の宰相にて近來英國の政事を穩に相成り漫に他邦に對し干戈を動かす事を好ます終始佛國と相表裏し歐地の靜謐を本となしたるは此人の功也然る所此宰相の死に付今迄ホレーンマツヘール（外國事務）の宰相なりしイールル、リユツセル、プレミエル（上席）となれり然所此プレミエルの變りにて內外共ポリチーキ（政治）のリフチング（形勢）の變を起すは萬國の同しき所にて支那のも日本のも同樣なり乍併英の如きコンスチチユオネル（公明正大の制度法令）の國にては內治の頓に變すへき理なきは更なりと雖外政卽ちヂプロマチーキ（外邦交際）のウエフ（筋）の變りは測り難き所なり然る所此リユツセルといふ人は老年にて久しく英の宰相たれとも元來彼の以前の英國振の人にて鴉片亂を引起せし米國元來の習氣を備へたる人なりといふ依て今歐地無事の折から他のウエーレルトテール（歐洲ノ外）へ羽を廣けんと思ふ私心ありと見たり右に付今日本在留の英國ミニストル、ハルリ、パークス（マヽ）なる者は其リユツセルか手先にて兼て支那に於てヂプロマチーキに相關せる人なりと聞けり則此人リユツセルと心を合せて日本のポリチーキ（政）にシフ（盡力）をヘムーエン（勞心）せんと欲する樣子なり其一證は日本の事に付色々骨折にて政府のヒントル（妨）パール（得）を開きたりと新聞にあるか如し然る所イールル、リユツセル此度プレミエル（上席）となり愈此策を遂けんと欲し英國より祕使イリエム某と申者を發し魯國に遣したりと聞く其仔細は日本の交易兎角捗々しからす此上荏苒打捨置ときは何時に歐人フレーニハン（自在交易）ドルトレーヘン（數多の港）せん事計りかたし故に條約を新に仕更へノフ（猶）、メール、ハーヘンを開かんか爲色々と政府の落度たる所を取りて難題を申出さんとなり萬一日本にて聽き入れさる時は干戈に及ふ可し左すれは長州の一件にて日本の手並も分りたれは償金の策あるましと云ふ夷狄無飽の欲を逞ふせんと欲する策なりといへり然る所魯にては肯せす魯は元來歐諸國と相反したるポリチーキ（政事）なれはなり魯のいふは我國にては本々交易を盛にする意なし但日本と相親和すれは

夫迄にて可なり何も此上ヘッエール〔暴猛〕トの策にて交易を盛にする意なしと答たりと其後右英使孛漏生に到り其説を述し所是も日耳曼は今盛に日本と交易する程の見込にもあらす又戰爭に及ひたる時送るへき戰艦とても多分なけれは右策に同せすと斷りたりと聞く其後右英使和蘭に來り候所和蘭にては正大に斷りていふは交易の盛なるは港の多少によらす又今日本國内に戰爭抔あり實に其政府も難爲の時なりかゝる時に乘して色々難題を言はんは我國日本と從來相親和するの意に背けりと云々右三ヶ國共皆英の策を拒みたれ共残る所は唯佛帝一人にて是は如何なる決定に及ひし哉未た知らす然る所愚考を以てするに佛は近來安南のエーン〔一〕、フレッキ〔小地〕を取り英と相競ふて亞細亞に手を廣けんと欲するの底意あれは如何にとも計り難し其餘スパニー等は計るに足らす合衆國へは英より別にデスヘッチ〔飛使〕を遣したりと聞く是詮する所所謂世界の合縱連衡にて魯は猶秦の如く英佛は齊楚の如く吾邦は其間に挾まり鄭の如く古は土耳古にて引受けし所今は變して吾邦となりたるなり此策に據れは吾對州をアモール〔臺灣〕のケイ〔鍵〕と唱へ候よし先年魯國の軍艦故なく吾對州に據りたり是は其節支那に在留する英のミニストル等竊に吾對〔マヽ〕を取るの斗あり是を魯のミニストル聞て直に軍艦に命して對州に來り據らしめ對州を英に向て拒きたりといふ後數十日英の軍艦果して來り魯人の已に來り居るを見て去れりと此説僕は從來アチラコチラに考へ居たれとも若くは然らん乎かゝる形勢若し眞ならは吾邦危急の秋といふへし是は外國奉行へは既に通せし人あり日本にては成丈オーフルレフ〔深謀遠慮〕を以て謀るへきと也〔然ラザレバ〕アンテルス忽ち大變を起すにも至るへし英ミニストル、ハークスは此説に據れは信すへき者にあらす乍併又佛のセンデリング〔弘法教師〕抔決て賴むへきにもあらす必す後害を起すとあらん乎要する所吾邦にては正大公明にして歐州諸國と直に親懇を厚くすれは自ら遠かるへし直の字極めて重し如何となれは間にミニストル抔且つオーストインチセ〔東印度〕の媒なとありては情意相通せす動もすれはフルスタントホウシンク〔文通〕の惡きよりいろ〳〵の事生すれはなり右は吾輩に在て如何とも仕方なけれともヘレール〔學者〕テの心得にもなるとならんと報置のみ

○

赫々東藩八萬兵　襲來屯在浪華城
吾呼彼死知何日　笑待四隣起砲聲

右長州奇兵隊長高杉新〔マヽ〕作と云者の詩の由

騎歩貔貅百萬兵　遠謀誰識鎮華城
將軍金鼓降天日　莫作滿城號哭聲

右作者不詳

○

長州八ヶ條答

慎中役方ミもの共私を致候に付騒動致候に付事大行幕府ゟ對し恐入候片時も難捨置不顧恐山口ゟは大膳士中鎮静仕候儀に御座候但此書付有之

山口は誠に茅屋にて大膳住居候處臣下ミ愛情にて難忍存候もの有之土砂少々つゝ運ひ寒氣ミ防仕候事共有之候得共早速差留候事に御座候昨年戸川様御見分ミ通に仕置候

萩ゟ罷歸慎可罷在筈に候處右騒動再差起候ては幕府ゟ彌以恐入候事相成可申と苦心仕山口に罷在騒動ミもの共鎮撫仕居其内御沙汰相待萩ゟ引取候も同様慎居旨心を盡し撫握致居候儀に付今更御疑惑蒙り候抔奉恐入候

昨年英吉利亞米利加佛蘭西戰爭後缺乏ミ品等兩三等贈り候事も有之尤兼て御觸面も有之候に隨ひ贈候乍去懇親接待致候儀には無之候

昨年來外夷英と戰爭ミ節釜を損しゝゝ不明亡仕其後引去り修復相加候得共何分大洋ゟ相越候儀は無覺束其後乘込候者も上陸爲致候處大船何れゝか紛失いたし候に付夫々穿鑿致候得共今に相分り不申然る處御糺ミ趣も初て承知仕左候はゝ其節脱走ミもの共若哉盗取候事と奉存候右ミ儀は無之趣に御座候

大膳父子おいては決て使者等は遣し不申候尤公に側近く出居候もの御座候て萬一私に罷越も有之哉も難

斗且は脱走ミもの共ミ内大膳家來と相名乘罷越候儀も有之候て若哉右等ミ儀御聞込にて御疑惑ミ事哉と奉存候

淡路監物兩人儀は家來共も數多召仕候事故主從ミ情愛耐忍奉存候乍去申上候儀も憚入候得共無據奉申上候武田高雲齋(マヽ)御取置眼前ミ事と奉存候何分田舍ミ者共故愚痴相迫り理義御糺問ミ上如何様被仰付候共無據儀に奉存候なれ共乍去主從ミ情愛にて兩人家來共疑惑仕彼是差出兼隙入候抔此度御糺問に相成何共恐入候故實事申上候儀にて誠に恐入候此段御賢察御憐愍を以幾重にも

大樹公ゟ御執成被下置度と奉願上候偏に御心愛被成下候はゝ主從一同難有御沙汰相待奉申上候

右ミ通身體(マヽ)慎て申上る永井戸川兩公も尤ミ顔色相見ると申噂なり

宍戸備後介

其外

右ミもの共御用相濟候間在所ゟ立戻り相慎居御沙汰次第早速罷出候様

右ミ通安藝守殿御家來ゟ御達し相成申候

以上

此文誤訛多し本ミまゝ寫し置

○

長防所置候儀に付　幕府ゟ御建白有之候處再度天朝ゟ御沙汰寫

長防所置ニ儀決議被聞食候方今外寇内憂紛亂にては於國體深被爲惱宸襟候間厚加仁惠早至當ニ施(マヽ)所置國内平穩可奉安　宸襟候樣被　仰出候事

正月

別段從　天朝御沙汰書

長防所置ニ儀昨日被　聞食候得共自然疎暴ニ所置有之候ては内憂外患ニ治亂に拘り候儀に付旁被惱　宸襟候間人心紛亂不致樣公明至當ニ所置可致別段被　仰出候事

右兩通會桑板笠ニ四侯ゟ御請被申上候よし尙又右四侯へ兩傳奏ゟ演說被仰渡左ニ通

十萬石愈於取上は精々下田を撰ひ不致紛亂候樣厚可有勘辨決て疎暴ニ所置無之樣旁申入置候事

○

三月廿日出浪華書狀ニ大意抄寫

長防ニ御所置も壹州侯御骨折ニ御樣子父子初御呼出に相成候處故障を申不畏樣子にて最早眞に御征討にも可相成と存候併是も少々難儀ニ品有之暫時御猶豫ニ御樣子也其内には御片付にも相成可申候へとも少々存込違ひ又此上は小子共も滯坂のみにも參りかね可申就ては又少々御手間も取れ可申此御一擧は實に天下ニ御大事何卒急速ニ御所置奉禱候事に御座候云々

○

四月九日御代官櫻井久之助支配所備中國倉敷陣屋ゟ浮浪ニ者凡貳百人程寄集大砲打掛亂妨(マヽ)仕候趣相聞候付板倉攝津守ゟ人數差出候處最早陣屋燒失死人手負等も御座候趣右は長州勢近海ゟ上陸仕右ニ及所業候ニ趣同所市中屯集罷在候に付尙變動ニ模樣に寄人數繰込可申候云々

右板倉家ゟ四月十日付にて同十八日御屆出

○

蒔田相模守領分備中國淺尾陣屋近邊ゟ去る十日夜長州浪士ニ由凡貳百人程押來領内井上寶福寺ゟ致屯集候趣に付早速家來ゟ及應接候處因州ニ方ゟ罷越候心得に候間兩三日當所ゟ滯留差免呉候樣申聞至極謹愼ニ答には候得共兼て被　仰出ニ趣も有之候付召捕手配仕候趣云々

右蒔田ゟ四月十九日御屆

○

寅正月紀州ゟ建白

去夏

御進發以來不肖ミ身を以辱も惣督ミ命を蒙り國力を傾け幣賦を盡當地迄出張罷在候舊冬迄殆と巨萬ミ横費有之候得共實に不容易時勢効忠盡力ミ秋被奉存候間右等費幣を不顧多分經理候て今日迄相勤罷在候儀只此度御一舉にて　幕府ミ御威德も相立就ては海内久安ミ基も可被爲立事にて旦暮奉渴望候儀に御座候然る處此度御糺問一條も相濟追々御手續も相付御所置振一條に相成候處右は無此上大事ミ儀に付容易に決議難相成儀に候得共愚考仕候處にては此度ミ御一舉實に海内治亂ミ機　幕府御興廢ミ境被奉存候斯御大造御進發相成候儀も全く一勞永逸ミ爲ミ御長策と奉存候得共何分にも此度嚴然ミ御所置候考にて天下ミ耳目を一洗致し長防ミ外諸藩ミ内にも萬々一覬覦ミ念を抱候もの有之候とも此一舉にて右禍心をも致消滅候樣恢豁御所置有御座度事奉存候若又萬々一目前苟安を計り曖昧ミ御所置有之候ては今日海内諸藩ミ誹哭を招而已ならず引續又々干戈を動候はねは不相濟樣成行天下ミ禍患年々深く相成詰り　幕府ミ御威勢御氣力共盡果糜亂鼎沸ミ世と可相成と深く憂慮仕候他藩は不知弊藩ミ如きは最早引續再擧ミ氣力無覺束候に付何分此度ミ御一擧にて御盪平御座候樣若　嚴命に抗拒仕候儀も只々弊藩費弊ミ餘りに候得共直樣(ママ)弊甲調兵を進め諸道ミ寄手と力を戮せ　天朝　幕府ミ御威靈に伏候儀義旗を建て朝敵を征討仕

候事に候得共必定虜膽を奪ひ微功を奏し可申何分にも天下ミ爲効忠ミ秋と奉存候に付兼て死力を盡し可申は覺悟罷在候仰き願くは目前姑息ミ御所置無之海内蒼生ミ爲に久安ミ御深策御座候樣奉懇願深禱度此段俯て奉建言候

正月

○

寅二月四日出坂閣老小笠原壹岐守殿藝州表ゟ着到ミ處左ミ書狀宍戸備前ゟ差出し儀に仰(ママ)て持參ミ　勅書も不被差出大狼狽因之諸藩一統迄も此上は　幕命も不可奉全く僞勅も同前と申内說也十九日早飛脚ミ譯は此一條歟

宍戸備前介藝州藩ゟ差出候書付左ミ通

別紙寫ミ通國許ゟ急便を以致承知候定て於尊藩頓(ママ)にも傳聞仕候哉も不存候得共猶爲心得申候事にて扨彌別紙ミ通趣にも候得は實に闔國意外ミ御沙汰被爲在則士民一統驚愕仕此上は父子底意士民情實共逐一縷述仕於大小監察にも巨細被聞屆候甲斐も無之萬一虛說哉も不存候得共追々御耳に入置候通り國情切迫ミ砌虛說なりとも掛念仕候故鳥渡御聞繕に及ひ申候彌右樣ミ御沙汰被　仰出候ては國内鎭靜(撫)も出來兼萬一には御沙汰承服も仕兼候事とも可有御座也

朝廷ゟ之奏聞書には如何有之候哉未た拜見不仕候得共
朝廷ゟ被　仰出候御文面に付推考仕候得は　幕府御所置振
叡慮と齟齬仕候哉に相覺へ申候旁疑敷所々も御座候故彼是御聞糺之程相願度乍毎々御面倒には候得共
と申越候儀故返答不申述候ては彌一統不安心に存候に付何分之處御申聞可被下候已上

正月廿一日別紙

勅書

長防所置之儀祖先ゟ勤功有之候に付寛典被行候思召之處今度決議之趣言上被聞食候猶國内平穩奉安
宸襟候樣被　仰出候事

再度從
天朝　御沙汰寫

長防所置之儀決議被聞食候方今外患内憂紛亂にては於國體深被爲惱　宸襟候間厚加仁惠早く至當之施所
置國内平穩可奉安　宸襟候樣被　仰出候事

正月

別段
天朝御沙汰寫

長防處置之儀昨日被聞食候得共自然疎暴之所置有之候ては内憂外患之紛亂に拘り候儀に付旁被惱
宸襟候間人心紛亂不致樣公明至當之所置可致別段被　仰出候事

右兩通會桑板笠之四侯ゟ御請被申上候由尙右四侯ゟ兩傳奏ゟ演舌被　仰渡左之通り

十萬石愈於取上は精々下田を撰不紛亂樣厚く可有勘辨決て疎暴之處無之樣申入置候事

寅正月廿九日付二月八日來着浪華密談

長州之儀先便粗申述候後は先相替候儀無之就ては御處置之儀殊更御寛典にて禁中御伺之處御極り其通り
被　仰出四五日以前兩閣老伊賀守壹岐守下坂御所置御決定未た極密なから此節早々此表出立御所置とし
て藝州表罷越候樣壹岐守被仰付其外大小監察御勘定奉行其外諸役拜命紀州家蒸氣船御用立出立之事に候
尤夫々被　仰付振相廻し不申候御所置振之儀は高之内十萬石没收大膳　居長門家蟄居　朝敵之名は削て
右等へ御所置不相極以前於京師も種々諸藩之議論有之紀藩にて別紙之通御獻白御差出御憤發にて　上

にも段々御議論有之漸右等之處御決定被相成候得共何分御手ぬるきとの事にて西國諸藩にても御家之御建白にて御盟主被奉仰細川彦根其外諸侯方追々御たより申上誠に御德功も有之難有事にて何れも極々之佐　幕にて何分此御一擧にて　公邊之御威光も相輝可申已壹岐守公用人神谷川抔は御家を御盟主と奉仰付て天下ゟ之布告文を相撰西國筋は不及申京師邊にて布告致し候其又至て面白き漢文なり定て御地へ相廻候事と存不相廻候哉京師にては諸藩各佐　幕一條にて致集會會津桑名頭取藝州抔擯斥致し候御家にても舊冬誰々在京被　仰付集會專紀州家を盟主に御立　公邊を御佐申上候事にて御旗本有之筋彼是紀州家を便り參り段々歎願致し候筋も有之候君上之御論にても決て御手强にも及不申只々此程之御所置曖昧中に御濟せ被遊候ては又々再三之御進發とも可相成就ては諸藩費幣も續き不申節用之諸家憤發も氣拔不致樣烽火臺之外議無之樣偏に御處置被遊度何分長防奇麗御掃除無之內に聊塵芥相殘候はゝ又外藩に窺窬之もの可有之其處を段々御申立被爲在候就ては此程は實に可然御處置に可相成と難有事にて尤藝州に在陣之筋は至極憤勵小出平九郎抔は格別之人物にて諸藩之名士を集め優待致し居別て彦根藩西川氏抔を始御倚賴被申上土州士抔も時々小子潛居候も參り實に憤發感泣致し相談誠に諸藩士には國家之爲には忠臣も有之哉と存候存(マヽ)候　人も多分相見へ愧入候是か爲に一層憤發致し候事も有之候此程は何分長防城下に相迫り一旦は是非　公邊御威光を輝し度其上にて兎角御寬大之御所置有之度左も無之ては一旦　朝敵に相成候程之者譬へ養子等にて相續致候共右等肩を並へ候は不面目と諸藩申候趣實に彦根侯抔は素々御爲にて櫻田之大變有之是か爲に十萬石削られ其身刄死候事　朝敵には決て不相成候處彦根藩ゟ御輕典に被爲處候ては同家抔之氣配如何可有之と存候何分夫等之處にて京師筋色々もつれ候品も有之歟にて無據儀も可有之と被伺申候

追て壹岐守當地出發は二月六日と相極候御家は蒸氣船御用立右御船直に歸り猶又御家人數多分發向に相成候陸路は九十里にて蒸氣船は二日か一日半に有之候

○

一墳墓を發事

和朝古今未曾有之御暴政なり古史に間々之を載候得とも其社稷長保全せす長州に被嫁候御內室方則越前宗家會津因州等なり則德川御家門長州先社は暫く之を差置德川氏の血胤を辱しめ候事

奉對　東照宮幕吏如何申譯可致乎

一江戶屋形幷大坂藏屋敷を毀候事

長州二州未た結局不相立候中其枝葉たる屋形屋敷等を打毀ち且家來共は不及申什器金銀穀物等被取上人々被召捕候事有眞の朝敵乎非朝敵乎罪之疑敷間々麁暴慘毒之御所置是如何

一位官被召放候事

大膳太夫は正親町帝の所賜當宰相官は　今上帝の所賜則尊攘之大効を賞し玉ふなり且松平の稱號は

台徳の所與徳川の因を結はん爲に被下置候事然るに　今上帝深　御叡念被仰候御事とも空敷相成
且二代様の御因にも忽ち破却致候乍去朝敵なれは尤も可有事に候得とも聖人の言に罪の疑敷は是を輕
くすと申言あり然るに其罪輕重も御正し無之右ミ御所置乍恐不審に奉存候昨七月十九日變動は岳飛か
所謂内奸を不掃は何そ外夷を攘はんと尹宮松平肥後守等は則城孤(ママ)社鼠を獵するの道理也（城孤は會津なり社鼠は昨年七月長人屢會津侯も御花畠に入て不出故に長人餘義なく推參するなり）其形は無狀似たれとも其情は哀むへきなり然れとも一旦御場所柄を不憚無狀
仕候事大不敬深奉恐入候間萬石以上ミ家老三人を斬り其三首級を奉獻　天朝幕府御詫申上候尾州御
愍督御威悟被爲遊諸軍勢終に御解兵に相成候

一不容易企ミ事

今般御再征ミ廉候得とも此儀長州か最初備前筑前藝州侯等へ委細申述候夷人の手を假り討幕なとゝ申
事〔不分明〕ゝゝゝ無有御座御洞察可被下抑長防州の士とも尊攘の大儀を深大曙(ママ)候得とも右等の事可有之筈も無
之右は全小笠原の讒言に起候事は和蘭人より委敷申出候此儀外國掛は御承知ミ事に候長州より夷人に
兵を假候事は決て無之候得とも幕府より長州再征に付外國の兵を被假候事は先達てイギリス候とミ趣
然は幕府より被願出候得とも應接の儀は固く斷候とミ趣然は幕府自ら其罪を隱して　奉欺　天朝候事

一外國取扱ミ事

右は昨秋八月イギリス、スラン(ママ)、アメリカ、ヲランタ、の四夷と及戰爭長州死する者纔十餘人怪我人十人

斗外夷ミ艦將討れ其外長の爲に擊れたるもの七八拾人怪我人七八拾人軍艦數艘擊破候併長州も臺場を
打崩され器械等奪はれ候得共師さん(ママ)勝敗軍用を費す處彼尤甚し　皇國全州の戰に幕府は不及申列藩
應接無之不得止戰の所置にいたる薪水食料丈けは與へ遣し可申御布告相成候依之右ミ所置に仕候共決
て惱　叡慮候事無御座候昨秋八月外夷ミ戰爭追討ミ御大軍被差向候ミ事に付東西干戈相引受候ては長
州父子指揮廻行(ママ)屆候に付右一時止戰仕候事抑外夷は　皇國の敵國なり則是　朝敵なり最前長州へ朝
敵退治の　勅命を下し賜ふ長州父子鳳詔奉戴雖然幕府兵馬の權を握り候故大樹公へ奉伺候處台命亦攘
夷被　仰付候間去癸亥五月十日　勅命期限の日於長州赤馬關攘夷被致候則七月　天子正親町少將公
を遣して父子ミ偉功を賞しむ　天子積年　御宸念を奉晴　御國體將に立んとするの時豈圖らんや
八月十八日　天朝不振幕長不和を生し今日の形勢に立到候三百ミ諸侯攘夷ミ　詔を不奉て長州征伐
ミ　詔を奉して速に兵を藝州に出したるは是何事そや

一外國に家賴を差置且器械注文ミ事

右尊攘ミ大義を擧るに無據儀ミ爲探索差遣候器械注文ミ儀も長州より相始不申幕府私に使節遣し私に
條約を結ひ私に器械を注文致候諸侯亦軍艦等を外國に注文致候獨り長州を責て幕府自ら其罪を責さる
何事そや

一武田伊賀守一件

右者天下正義ミ名士たる事　天朝諸侯御承知ミ處於幕府御暴殺被爲在筑波大平ミ義擧奉對幕府麁暴過激とは乍申幕府　天朝を輕蔑するより忠憤義慨發する處より然して第一幕府違勅ミ御罪を御正し結局相立候上伊賀守等ミ御處置被爲遊候はゝ御大政無偏賴と奉存候後編正史者必云はん德川氏攘夷の勅命に背ひて忠伊賀守武田氏等を暴殺すと嘗　天朝ミ御役人樣方亦後世ミ議謗を免さるなり

一削封廢立

今般長州膺征を御止め被遊德山岩國の兩家を大坂迄被召登御不審ミ廉々御詰問被遊候條奉恐入候抑今般ミ儀根本ミ尊　王又違　勅は賊なり

賊は朝敵なり奉勅は正なり正は忠臣なり長州應台命速に登坂不仕は我は正也彼は不正也乍恐此旨趣深く御酌分被遊其御所置無御座ては二州ミ臣民所詮折合申間敷幕威を以長防二州ミ田を削り世子長(マヽ)間を廢し候哉に相伺候得共二州ミ臣民不申及封ミ草木土石盡く　天朝ミ御物に候へ共賊と相戰ひ國爲燋土候共　上は乍恐　今上皇帝奉勅ミ始末を貫き下は先祖元就に地下に相見え申譯相立可申と必戰相待候哉にて伺候然は奉　勅ミ長州寸地不可削其君不可廢雖然幕府違　勅ミ罪判然明亮なれは二州被召上大膳父子被廢候も僅しも無悔と被存候既に征夷ミ御職掌を被爲失自己ミ御罪名を御消し被遊毛利ミ奉勅を深く被爲惡候故天下ミ人民疑惑を生し物價騰飛生民土炭(マヽ)に墮候幕府ミ有司一人も天下を治め德川家ミ永久を不祈惟幕府ミ御威光を强く張り天朝を輕蔑し萬民を苦しめる事豈大なる過にあらすや幸に

上聖明ミ天子被爲在御聰明ミ殿下御當職確乎として御正義不爲遊撓正義ミ公卿樣方亦不少候へ共皇國內亂ミ平定御盡力奉仰望候內亂ミ儀御猶豫被爲遊候はゝ外夷共可乘此虛內亂取扱御挨拶可申出は必然と奉存候萬一彼一度手を着候はゝ皇國ミ御挽回は六ヶ敷奉存候

一公事至當ミ事

右天朝より被仰出候御沙汰長州父子難有奉存候然るに違　勅ミ幕府奉　勅ミ長州地は削り君は廢するとの議論御主張被遊候哉と奉伺候今般御威光にては迚も落着相成申間敷候乍恐御德を被爲旋條理相立候はゝ長州も感服可仕候乍(マヽ)事至當と被仰出候御趣意も乍去奉勅違勅を御聖察被爲遊候御事と奉存候德川家基業時ミ三河ミ門徒蜂起す東照宮御譜代本多佐渡守牧野左馬允等門徒に與し主家へ弓を挽候得共公深く被爲憂天下法外ミ法を以被爲召歸候處右ミ人々等其德に服し終に德川家御開國ミ功臣と成られ候國の將に興らんとす其處置寬仁大度光明正大深奉敬服候側に承る　勅使山陽道まて御參向被爲遊長州結局御附被遊度との御事候へ共乍恐姦臣に阿諛被爲遊因循ミ公卿樣方御參向被遊候ては長州所詮居合申間敷萬一以勅使御取扱爲遊候はゝ有栖川御父子樣を奉始二十餘ミ公卿樣の幽閉を先つ被爲免て後條理相立候上正義ミ公卿樣方御任撰にて御參向被爲命候はゝ長州疑を晴し乍恐威服いたし御奉戴可申候皇(マヽ)國奉仰願候

慶應元丑年冬長崎奇兵隊より御目付差出し候內云々

○

松平備前守

此節内追々御屆申達候倉敷淺尾及亂妨候者共ニ儀昨十五日申達候以後川船にて安治川乘下り龜島にて海船へ乘替沖ニ方ハ乘出候儀に有之又は領分福田新田幷備前國ニ内へも上陸いたし候趣相聞候に付早速人數手配申付精々探索爲致候處所々にて生捕討取ニ者名前今日迄ニ處別紙ニ通御座候精々穿鑿可申出候得とも先此段御屆申上候已上

四月十六日

覺

生捕　長州藩　掃部坂太郎支配　西岡　龍太　廿五歳

同　同　長尾喜代熊　十六歳

同　防州　長本茂一郎　十四歳

同　同　石田　直　十四歳

同　同　淺尾正之助　三十四五歳

討取　騎兵隊　衞士　爲吉　忠成

福田新田畑中に手負行倒れ死壹人

以上

○

薩州重臣より幕府ハ建白書

即今内外危急ニ時節防長御所置ニ儀其當否に依り皇國の御興廢に相拘候重事にて實以不容易候儀に候處

追々御達ミ趣も被爲在猶又來る廿一日迄に大膳父子等被召呼若今度御請不仕候得は御討入に相成候に付相心得御差圖奉待候樣被仰渡ミ趣承知仕候一昨年尾州大納言樣爲惣督被差向伏罪ミ筋相立解兵迄相成候所却て御譴責同樣ミ御都合にて就中神速に御上洛ミ　朝命御請無之のみならす改て不容易企有之由を以て御再討被　仰出御進發に相成終に今日に立至候處御討入ミ時宜に相成候得は天下の亂階被爲開候事實に明白なる事に御座候從　朝廷時世相應ミ御所置を以寛典に被處候御趣意も被爲在候處　御奉戴無之由傳聞仕天下衆人物議喧々不堪聞次第に御座候征伐は天下ミ重典國家ミ大事後世靑史に不恥名分大義判然相立其罪を鳴し令を聞かすして四方響應致候樣無之ては至當難申尤凶器妄不可動ミ大戒も有之當節天下ミ耳目相開候得は無名を以兵機不可振は顯然相著なる譯に御座候增て國人不可討と謂に於ては却て撥亂濟世ミ御掌職にて動搖を被釀出候場合に相當候前條天理に相戾候戰鬪於大義御請難仕假令出兵ミ命令承知仕候共不得止御斷申上候間虛心を御聞屆被下候樣奉願候京都詰重役共より申上候樣申越候に付此段申上候以上

四月十四日

松平修理大夫内
木場傳内

○

寅三月十九日召捕相成候者

右九兵衞御調當人住居向
間口五十七間
奥行貳百七十間
家内人數八百九十七人
屋敷内土藏廿七戸前

一諸國出店土藏附三百五十二ヶ所
此召仕人數四千八百三人
一手船貳千八百四艘
此船乘人數三萬五人
一有金千八億壹萬八千兩
一有米三兆九億五千石餘

攝州兵庫表
高田屋
九兵衞

一洋銀潰し棒十七萬九千五百貫目
一西洋銀貳拾九萬三千七百枚
　此分トキ印と打置
外異國品物未御調不相成候
　　御掛り　板倉周防守殿
　　當時
　　松平伯耆守殿

（天保年度のとにもせようそなるへし）
武内孫介曰此書付は天保の初の支なり
吾現に年月を書きたる者を目擊せり
決して當今のとにあらす云々

○

あづまより

或說
　將軍が長州ちゞ見買に行き
　まけて貰てかつて御歸り

○

紀藩廻達寫

長防爲御征伐此度藝州表迄
御發向被遊候樣從
公邊被仰出候に付去月廿六日　御先手ゝ御人數明光丸御船ゟ乘組大坂表出船
右御船戻り次第
中納言樣御出船藝州廣島表迄
御出張被遊候筈に候以上
　六月二日

○

紀藩と者か柳河へ文通と寫

西國筋と模様廿日期限にて受書差出候筈と處吉川監物より廿九日迄御猶豫願出候御聞屆に相成御先手御人數は境迄繰込明五日御打入との御觸出しにて

君上には朔日御出馬廣島迄

御入込と積り廿五日不時御飛脚に申來候最早朔日も過去り候得共御受書差出候やと(マヽ)否未た相分り不申何さま長防士民動搖いたし候樣子此上と處忠永井雅樂之派激益田福原之黨二黨戰爭にも可及歟夫なれは却て國家と大幸と申事也

幕府彌御滯坂緩々と天下と居合を御待被遊候御模樣に御座候

六月四日

○

從浪華來狀と寫

長防事件彌六ヶ敷相成爲惣督紀伊殿御越右御差添として松平伯耆守樣今朝御出帆四國爲御取締京極主膳正樣明廿八日御發途と積り諸家惣討入日限來る六月五日と被　仰出候○當表米價餘り高直にて去る十四日朝四ッ時比困窮人一時に雲起米屋に推掛り我勝に米を舁出し支候處は悉く打毀申候且難波にも百姓穢多と類凡百五十人程徒黨いたし何れも竹槍を携へ大家二軒打こはし候處市巡邏と面々早速馳參り不殘召捕申候誠に不一ト方騷動御座候

五月廿七日

○

箱館奉行

小出大和守

御目付

某姓名忘る聞糺すへし

六月七日朝大早にて着

右に付殿中御下り延引に相成候箱館地方何歟少々事件有之候よし

○

一薩摩より英國へフレカット四艘及砂糖製造と機械等買入追々可相渡金子差迫り終には先達て過分と金子右英國より借用致候に付ては返辨と期畢迄琉球國引當として英國へ書入に相成候由

右は陸軍方某公と噂にて全く内目付聞繕方より申立候樣子也

六月十一日承る

○

毛利興丸

一昨子年家來と者共京師に亂入
禁闕に發砲候條於大膳父子其罪難遁嚴科にも可被仰付處恐懼謝罪三家老と首級備實見其後彌恭順謹慎と
趣に付
天幕と御主意を以格別寛典と御裁許五月朔日申渡廿日を限り御請書可差出筈と處廿九日迄猶豫と儀吉川
監物か願出候に付承屆候處闔國士民疑惑憂憤切迫と情狀鎮撫難屆旨を以此上猶寛大と御沙汰被　仰出候
樣三末家監物か又候書面差出右期限に至り御請書不差出候是迄も至難と國情御斟酌恩威兩道を以國家と
大典被正候處終に御請不致候條　天幕と命を遵奉不致　御裁許違背不屆至極に付　問罪と師被差向候間
其旨可被相心得候尤硬命候者を御誅鋤被成候御主意に付無罪と細民末々と者は猥に動搖致間敷候右と通
松平安藝守を以毛利興丸幷三末家吉川監物に相達候間御供萬石以上以下と面々に可相達候右と通於大坂
相達候間可然向々に可被達候

六月十三日

○

四月五日

周防守殿御渡し

大目付
御目付
へ

來卯年三月佛蘭西都府において宇内各州物産と物品を聚め展觀場相開候に付御國産物をも御差送に相成
候樣致し度旨同國政府より申立御國地出産と品々被差遣候筈に候間萬石以上以下領分知行出産と物品同
所に差送り度望とものは其筋へ可申立候且百姓町人にても同樣差送度ものは御差許に可相成候間是又其
筋へ可申立候
右と通可被相觸候

四月

大目付
御目付
へ

同月八日

海外諸國へ向後學科修業又は商業の爲相越度志願と者は願出次第御差許に可相成候尤願と上御免と節印

章可相渡候間其者ニ名前幷如何様ニ手續を以何々ニ儀にて何ニ國ゟ相越度旨等委細相認め陪臣は其主人百姓町人は其所ニ奉行御代官領主地頭ゟ其筋ゟ可申立候若し御免ニ印章無之して竊に相越候ものも有之候はゝ嚴重可申付候間心得違無之樣主人々々又は其所ニ御代官領主地頭ゟ入念可被申付候

右ニ趣可被相觸候

四月

大目付
御目付ゟ

○

毛利大膳父子　御裁許及違背候に付問罪ニ師被差向候旨被遂
御奏聞候處別紙ニ通
御所ゟ被　仰出候間此段爲心得御供萬石以上以下ニ面々へ可被達候

六月

右ニ通於大坂表御達候間向々ゟ可被達候

六月十五日

別紙

毛利大膳父子裁許ニ儀先般經
天聽其末申達候處及違背候に付問罪ニ師差向候旨遂
奏聞被　聞召候
大樹には永々滯坂此上模樣に寄進發にも可及大儀被　思召候速に
奏追討ニ功奉安
宸襟候樣討手諸藩ゟも可申付旨
御沙汰候ニ事

六月七日

○

六月十七日曉河津駿河守歩兵六小隊引連熊谷邊へ急に發途す右は彼地浪士博徒屯集亂妨ニ由に付て也

○

六月十二日附大坂表ゟ差越候書狀中書拔

昨夕騎兵隊方藝州表ゟ乘戻し注進致候趣にては去る八日周防大島郡にて戰爭相始り大勝利右勢ひにて岩國城ゟ押寄候趣御座候彌相始り候ては諸家も先を競ひ居候由に付不日平日(ママ)可相成就中細川立花等猛威を

張互に先陣を爭ひ候由其餘諸家おゐても乘氣に相成居候右大島郡と相始候は井伊榊原持口に付いつれか始め候哉其邊未相分尙追々注進可有之尙又模樣可申上候

御先列も御繰出し可相成歟と風聞には候得共未被仰出歩兵一大隊講武所砲隊は不日に出張被仰付候よし御座候此節藝州ゟ出張いたし居候者何れも勇氣相加り敵地近く成丈出張居候を手柄と申樣に相成同所に留り居候ものゟ時々苦情申越候事に御座候以下略之

六月十九日着

御徒目付某の話の由

井伊家より廿日に注進あり岩國城を攻ると二日二夜にして終に其城を乘取候云々

○

六月廿二日北利時國和親貿易御許相成候趣風聞有之

○

六月中旬の事なるへし米商一同に願出たる趣

方今米價騰貴は無餘儀事には候へとも現在淺草御藏等と正米六萬石より多からす其他市中に散在する米も亦六七萬石に過きす左すれは御府内に在る所の米僅に十二三萬石而已此米一時に喫盡し御府内殘米無きに至らは奈何ともすへからす何卒只今と内御建策ありて糴入と御處置あらまほしく云々

○

中國と信報有之大島を取りたるは相違無之當所はさしたる守兵も無之一擧にして取りたる也岩國を取りたるは虛說なるへし先鋒井榊と兩軍十三日一戰及ひ一旦揚取と樣子十五日頃再擧すへきと勢に相聞候水野大炊頭幷御手前江戸人殊に憤發能く持固と趣尙追々可申上候右は成丈け御祕置可被下候〔原文朱書〕

廿五日

○

大坂當月十八日出來狀と寫

藝州十二公と便船今朝入着仕候處防州國境九賀前島と申兩宿にて一戰有之候樣子に御座候處此處は格別と儀も無之相片付候趣然る處彌十六日諸手一統長州路へ御繰込被遊候御樣子且又岩國德山長府等何れも城明け捨萩山口と兩城へ楯籠り候趣何れ大合戰は右兩城に起り可申とと風聞に御座候先は不取敢右爲御知申上候餘は後可申上候早々以上

六月十八日

大坂　庄

○

或人書翰抄書　上略岩國城は吉川立退寺院に慎罷在候に付彦根高田御人數入城罷在候よし大島は歩兵にて燒打いたし乘取候よし承り申候岩國城下にて騎兵隊押寄戰爭有之過半兩家にて打捕有之分捕之品も御座候よし注進之儀承知仕候云々

○

江川太郎左衞門支配下之者かゝ文通

以宿繼啓上仕候然は教授方出張使御用狀昨十六日相達拜見仕候打毀一條委細御申越之趣承知御報略文仕候

一右打毀人數三手に分り候趣處々か注進有之候折柄御用狀到來何分日野宿之方手放し兼候に付築地川端に屯致し居候處最早宮津村へ數百人込入打毀居候得共農兵集り兼川切明候儀難出來無餘儀差支候處川向へ騷立人數凡そ千人程種々之建物拾三本押立押廻り是非共渡船八王子宿へ可參よし一同申居候に付難捨置駒木野宿農兵八王子宿農兵竹槍組人足共追々馳付候に付日野宿駒木野宿兩組合農兵凡そ五六十人程致人選舟二艘にて押渡り鎭靜方申付候得共不聞入却て惡口雜口(ママ)等申罵り不立去空砲打拂候得共更に恐れ候體無之大勢之者平押しに參候ては一方は如何樣にも仕留可申候得共其勢に乘し何れ之場所か押渡候も難斗手勢不亂内と玉入砲發幷に手向いたし候者は押果候に付一時に散亂夫々追遣り頭立候もの兩三人其外拾七八人召捕猶追討に砂川村迄罷越候處熊川福生兩村に七百人程集り居福生村十兵衞方にて焚出しいたし居候趣元名主源五右衞門申聞候に付直樣福村(ママ)へ罷越候處壹人も無之夫か於島村ゟ罷越同村にて壹人召捕築地村川端ゟ相詰居候もの共一同見張之もの相殘し右場所引拂日野宿にて夜食等いたし居候處猶又於島村へ亂妨人押還り候由注進之爲直樣築地川端迄出張いたし居候由右は風說迄之由に御座候間々十七日朝五半時頃日野宿ゟ引揚申候未た所々に潛伏罷在候樣子に御座候

一召捕人廿人程打果候もの拾三人程に御座候

右鐵砲疵は兩三人と御座候

○

六月廿八日陸軍方之咄

一昨夜藝州表より當府ゟ報告有之候には官軍近頃重々敗走いたし急に兵を召事(附)御持小筒組差圖役松平友之丞其外士官戰死

右に付西丸下歩兵屯所より二大隊御持小筒組三小隊其外大砲隊急速藝州表ゟ發途

○

六月十六日石州に於て初て合戰有之候由

○

紀州殿御家來ゟ御使番松浦彌五左衞門より來翰之寫

大島炮發承書

一六月八日御軍艦より大砲二十發程大島ゟ打懸候得共敵方ゟ炮發無之事

一同十一日大島久賀港にて炮戰有之敵方は臺場體之物を構へ居候由同所家數八十軒之間地雷火を拵置官軍此所ゟ上陸可致と心得居候處同所ゟ上陸不致少々所を替歩兵上陸いたし候に付地雷火は相屆不申敵方大に周章候内出逢候間散兵に相成打合候事且人家之内に潛伏いたし候者有之候に付半分通御軍艦ゟ燒玉を以て放火いたし候處敵兵不殘山上ゟ逃去候事右跡にて大炮六挺籾三千俵程分捕いたし候由右逃去候敵兵ゟ大炮打還候得共上陸之官軍ゟは中り不申候由又々御軍艦ゟ山々ゟ大炮を放し敵兵凡四百人斗り討取久賀港にて貳人討取之由

一山上之敵兵は上クミ店と申所に居候松平隱岐守殿人數千五百人程と挾み討に久賀港に攻登り候處敵兵不殘散亂之由同所にて四人討取大炮四挺分捕之由官軍は御軍艦方の外不殘上陸いたし候事

一同十三日曉七時頃敵方軍艦にて襲來大島ゟ大炮六發打懸申候右は　公邊御人數幷松平隱岐守殿人數上陸いたし居候を心得候と相見へ候夫ゟ御軍艦と打合に相成御軍艦ゟも燒彈實丸數發打懸候處敵船へ中

り候と見へ六ツ時頃下の方へ向ひ逃去之由御軍艦旭日丸敵ゟの炮發にて少々損候由

一大島より岩國迄十里餘海路有之候由

一今十四日大島之内今壹ヶ所山に潛伏有之候儀難斗候に付早天ゟ　公邊御人數幷松平隱岐守殿人數不殘岩國ゟ被向候事と相見ゟ申候大島は乘取に相成申候由

右之趣御徒目付鏑木千之助一昨十二日九時頃ゟ大島ゟ見物に相成候處昨十三日六時過廣島ゟ歸船同人ゟ聞取申候

大島出張之歩兵奉行

河野伊豫守

戸田肥後守

歩兵二大隊

御持小筒組貳組

○

六月十五日石州口戰爭始蒲原(ママ)に於て福山の勢一戰同十七日增田(ママ)と申所にて福山濱田の兵大敗軍監三枝刑部幷に福山の兵貳人濱田の家老某等打死其他死傷有之と雖未詳よし

○

中國筆報

松平式部大輔（隱岐守嫡子）人數幷に　公儀歩兵にて大島を取候よし確說也其後十六日長兵より取返しに參候處是又追拂候よし其節松本某討死歩兵も若干人卽死又小瀨川（藝防の境に在り）に陣したる井伊榊原十四日長州ゟ奇兵を以て挾擊に相成兩家共大敗軍のよし長兵小方邊放火亂妨いたし候由

右京都よりと文通

六月十九日伯耆守殿ゟ紀伊殿御城附ゟ

大野村へ賊兵爲追討御人數出張と處今曉俄に賊兵より及砲發候處夫々手筈行屆一同不惜身命格別勇奮苦戰速に勝利と段一段と事に候依之出張と者へ御酒肴被下候間爲給候（此處文字不分明）と段可成候此段可申上候

六月

○

紀伊殿藝州ゟ先手人數水野大炊頭引續大野村へ出張いたし候處去月十九日朝六時頃賊兵同村北と方山上より大炮火矢等放發致襲來十四五ヶ所より大小炮打立候に付右人數よりも大小炮打掛け及接戰候と處本道ゟも一隊と人數押出民家燒け出發砲相襲候に付頻に大小炮打立一時斗及接戰候處賊兵敗走散亂玖波邊へ逃去候に付人數大野村へ揚取候旨尤接戰と節賊方遊擊隊と內宇山宇作と申者討取其外生捕分捕等有之候旨藝州表ゟ申越候委細と儀は未難相分候へとも先此段各迄及御物語候

○

長の方に洋製軍船四艘有之右と內二艘は大島を取返しに來り候て一戰有之外二艘は小倉ゟ押寄小倉と砲臺一ヶ所打こわし候由然に小倉方ゟも烈敷砲發いたし二艘共に打沈め候よし風聞有之

○

津和野は最初に賊兵襲來防禦すると能はすして陣屋を捨て敗走し積貯の兵粮等多く奪ひ取られたる由是は石州濱田福山の兵の戰よりも前の事也

○

○長賊等穢多非人を集め兵隊を組立てたるよし井伊榊原を破りしは卽ち此穢多隊なりと云○井伊榊原兩家にて大砲十八門を奪はれたるよし○井伊榊原敗走の時兼て其聞へありしにより竹中丹後守幷紀州家にて大兵を發し迎へしと雖兩家の兵盛かへすと能はす却て味方の兵を推し破りて通りしと云○三兵隊幷に講武所及ひ別手組の隊共すへて官兵の分は極めて勇壯にて訓練行きとゝき夐かに諸侯の比に非すと○別手組悉く砲隊となりしよし○廟議（上方）諸侯の兵は賴むに足らす爾後益々官兵を盛にして復た諸侯

の兵を當てにもすまし○長州内情を察する所分家岩國其他二三の大家等は奇兵隊の意と合せす唯兵を案して動かす其有様宛も中國西國なとの諸侯の傍觀の有様に等し○此故に詰る所は奇兵隊の賊と官兵と眞の戰となるへし然るときは骨の折れる程には有るまし是官兵見込のよし○小倉の臺場を攻しは四艘の軍艦なりしか其内三艘は打沈め一艘は行方分らぬ由

（以上の話は此頃上方より歸れる人の語りしを記せし也）

○

六月八日大坂に於て差出候

今般京極主膳正事四國討手ミ面々爲御取締被差遣候付ては指揮ミ儀も相心得候樣猶又御達に相成候旨御達候趣は奉畏候へとも根元若年寄ミ指揮に相隨候譯柄に無之於此儀は御斷申上候已上

六月八日　　松平阿波守

右廿日出ミ便に申來る

○

六月十五日頃ゟ敵兵追々大島ゟ迫り候樣子に相見候處味方十一日以來連戰にて疲れ候故一先引揚候樣指揮有之十九日各隊ミ兵士船々ゟ乘込大島を引拂候由

先日佛國公使長崎に至り路次長州へ立寄り上陸し長州役人に面會し曰く長州侯若し和議を欲せは間に居て周旋すへしと長州役人慇懃に其厚意を謝し且曰弊邑和議を欲せす貴使の周旋を煩はさすと夫より國内諸所を遊覽せしめ且つ貴使若し意あらは山口城へ案内すへしといひしに佛公使云既に和議の周旋を托せられされは山口に到も利益なしとて別れ歸れるよし佛使曰長防諸所嚴重なる兵備なしと

○

九州の諸軍細川家を始めとして凡三萬斗小倉に來會せるよし細川家の兵到着ミ節塚但州出迎へ隊長に面會し凡三間斗（但州頗る滑稽を好むよし三間の三恐くは預値ならん）を隔て互に禮を施し低頭せられし所俄然として頭上に觸る者あり但州何物やらんと仰き見られし所隊長の指物の餘り長くして屈膝により前に伏して不斗頭上に觸れしなるよし

此一事瑣細の話なれとも亦以て細川家の兵制を察するに足るへしと云

○

或人の話を傳聞す

六月廿四日朝霧の深きに乘して長兵小倉の陣營を襲ふ小倉勢敗走す細川の兵遙に望て敵あるを知り急に來て援け大に長賊を敗ると云

○

六月廿五日藝州に於て大合戰官軍紀藩大垣と兵大勝利追ゝ北小瀨川及ひ記者に因て忘られし一所を經て先に井榊の失ひし地を悉く恢復し未た確報ならすと雖多分は既に敵地に深入せしよし

富士山船の功績甚た著し初め大島を奪ひし時も敵兵山腹に護胷壁を築き彈丸雨下味方之か爲に頗る危かりし所富士山より石榴彈一發丁度右壁内に達して破裂し敵兵一時敗走し我兵壁を奪ひし時敵の死傷五十人斗ありと云大島引取と節も富士山の應援なかりせは官兵松山兵共に生還する者なかるへしと云

九州には兵艦なきに依て敵地に渡るとを得す鍋島の兵二大隊小倉迄出張せし由なれ共二の見なるか故に猶控て進ますと云

廿五日の勝軍と節差圖役頭取間宮某其他差圖役三名討死

十九日勝軍と節敵將津田某單身返戰驍勇能戰味方と兵頗る辟易せし所遂に水野家の手にて討取しよし

○

紀藩某より來る浪華信報抄寫

一大膳父子吉川監物は異心無之激徒暴動に付官軍境に臨み候はゝ忽碎廢可致と　幕府も諸藩も見込有之候に付都て輕卒に敵を侮り井榊兩先鋒地理をも察せす深々と死地に陷り大敗に及ひ候儀に候處彼は年來と逆意深淵にして當今官軍に長防と寸地も足を入れしめす藝領玖波の邊兩先鋒打破られ候跡へ關門を建制札をも立候趣先鋒再擧と力無之津山明石も進みかね候に付水野大炊頭幷附屬(紀藩の)江戸隊公邊陸軍三大隊相連合し十九日と襲來を取挫き敵を討退け候此時大炊頭不意と攻擊を請け候處壹人庭ゟ飛ひ來り大砲二三發打放し追々人數相集り打立夫ゟ大炊頭先登して山手へ攻登り打合候

此時彈丸夥く來る家來危ふみ少しく退陣と議を述ふ大炊頭曰將一歩を退けは士卒十歩を退くへし退陣すへからす命は天に在り云々

大勇戰勝軍を奏し候廿五日又々襲來是も官軍勝利と由伯州侯巡囉(ヤヽ)と兵賊と戰ひ利有り其後と模樣未相知○石州路は是又賊徒襲來福山濱田兩軍大敗し雲州因州應援と出兵を催促し居城と守衛も無覺束と報あり津和野は未詳按するに畏縮恭禮して賊勢を避たるにや未審○大島郡は一旦奪ひ取るといへとも又賊手に被取返○小倉は十六日賊大船四五艘を以襲來寐込へ夜討を仕懸たるに小倉勢苦戰して賊と打合船二艘を打沈め討退け候よし生捕討取も有之趣小倉にも死傷多分に有之趣

按するに兩肥大軍出勢の下説あれとも小倉の難戰に應援と事を聞かす或は曰肥後は二百人斗鶴崎に屯集せりと肥前の出兵未た確信を不知

諸藩因循の説は是にして奮發の説は非ならん○雲州の兵出たるよし但石州一戰の後なり

○昨夕の新聞に津侯一萬人を出すと大監察留守居に問ふ銃は如何當今和銃の如きは利器とするに足らす津藩何をか用るや且戎衣は如何留守居の答に此儀は兼て心得あり當今と戰爭高虎時代に比すへから

す依て槍劔隊壹人も不用壹萬人悉く皆モニーグエールなり戎衣は黑羅紗裂き羽織を着襟に合印を付て重役頭役平士の等を分つ敵より見れは貴賤の別無し味方においては合印を以て知る也云々

實に其言の如くならは稍賴むに足るへし其他追て可申上候已上

七月十二日

○

七月十一日出横濱在留馬岡源十郎ゟ之書翰左之通

弟儀急御用にて明日英國蒸氣船フジヤマに乘組大坂表に出帆可仕候

フジヤマ船一ヶ月貳萬ドルにて借請申候右日數中大坂ゟ小倉諸方運轉之約束に付坂着之上何れへ御用御座候哉夫等之儀不極に御座候新聞は歸濱早速御告知可申上候

一乘組は御目付一人御小納戸壹人奥醫師四人御小人目付一人御普請役一人其他從者十人斗積荷は火藥幷にモニー也

○記者按にフジヤマ此方の船と同名なり英の蒸氣船にて近日長崎より來る船將ヂュンダス船載七百五十三噸

○

○記者按にフジヤマ此方の船と同名なり英の蒸氣船にて近日長崎より來る船將ヂュンダス船載七百五十三噸

○

七月十五日或人の文通に

大君御達例ミ事は御醫師急に上坂より起りて風說沸騰したるなるへし野生此事を聞て實に寢食を安するとあたはす然るに昨夕告來る者あり坪内氏大坂ゟ歸府に付

大君の安否を問ふ　曰　御暑邪(ママ)にて聊の脚氣なり決して御案し申上候程の事にあらす云々

又或人ゟ告け越したるには

大君御中暑にて霍亂あり一旦騷擾す最早追々御全快のよし云々

○右ミ外承込事無之候別紙圖面は寗早御覽濟歟不知候へとも方今ミ形勢是を見て知るへし

御慰に入御覽候

○淀侯今月五日彼表發足近日江戸着のよし是は重大事件にはあらさる由

○

御持小筒組谷中七郎右衞門藝州大野村ゟ六月廿五日出書狀寫

前文略　然は當月六日廣島表出立宮嶋へ出張滯留仕十三日大野村へ出張仕候當月十一日藝州口先手井伊掃部頭殿榊原式部大輔殿兩家大野村に致陣取候處騎兵隊俄に押寄せ戰爭に相成候處右兩家敗軍にて廿日

市と申所迄引退き怪我人も餘程有之候右兩家評判不宜中にも榊原侯は甚不評判に御座候右に付當月十三日小筒方三小隊大炮壹座幷紀伊殿人數大野村へ入替出張仕候長防賊兵は防州藝州國境ゟ藝州領へ三里程參り只今四十八坂峠先久場村へ陣取いたし候然處當月十九日曉七時賊兵共朝掛けに大野村山々幷本道陸共兩手に別れ俄に大小炮打出し大野村にても紀伊殿人數幷陸軍方直樣戰爭に及ひ朝五時頃迄打合し賊兵久場村引揚け候樣子に付四十八坂峠迄追討致し其節身方勝軍にて賊兵共方は五十人餘怪我人有之其上大砲壹座幷彈藥箱等其外小筒五六挺取捨逃去申候其節敵凡二大隊程に御座候其砌陸軍にては歩兵役々ミ者三人歩兵五六人怪我人有之其内役々ミ者壹人歩兵壹人卽死是は其夜火葬致申候小筒方にては壹人大炮方にては兩人紀伊殿人數ミ内怪我人も有之候へとも何人程御座候哉聢と相分り不申候是ゟ國境方へ打入岩國迄押寄候積に候へとも岩國は餘程堅固の樣子御座候其外下ノ關中ノ關上ノ關石州口萩口夫々大名人數相廻り居候得とも遠方ミ事故戰爭ミ模樣少も相分り不申候防州大島と申所是は六萬石ミ嶋に御座候是は御前列ミ陸軍方御軍艦にて打懸け是も味方に怪我人御座候へとも燒打に致し終に攻取只今は味方ミ地に相成申候只今藝州口にては紀伊殿人數殊ミ外勢も宜敷御座候野州ミ節より此度は大國故中々先々見當相分不申候大野村百姓共皆々外々へ立去り候故何れも百姓ミ明家に罷在候晝夜共巡囉夜分は別て少も油斷無之少々宛ミ休息にも出張ミ支度其外喰物菜に致候品無之無據兵粮ミ味噌梅干にて日々罷在候廣島城下迄八九里も御座候間買物も出來不申致方無御座候此書狀廣島ゟ能き便り有之候に付差出申候へとも最早

此上追々防州ミ方繰込候はゝ城下へ序も無御座候左候はゝ書狀差出兼候間左樣思召可被下候云々

六月廿四日認

土屋七兵衛殿　　谷中七郎右衛門

尙々　伯耆守殿御渡書付

今曉賊兵共俄に大野村へ致發砲候處一同行屆速に勝利勇奮苦戰ミ段一段ミ事候依之御酒御肴被下候間爲戴候樣可致候尤御品ミ儀は陸軍方用意金ミ内を以取斗可申候被下方割合左ミ通

頭取　金壹分貳朱
差圖役下役　金壹分
御組　金三朱
人足　金壹朱

右ミ通頂戴仕候一同日々に勞れ困入申候

下略

○

私惣軍昨十四日曉柳原式部大輔惣軍陸軍奉行竹中丹後守兼て打合候通岩國へ討入候積諸手分配先手木俣土佐二番手戸塚左太夫三番手河手主水大竹村へ早天繰詰軍同時朝夷藤十郎とも出張敷陣整列之從

天朝被　仰出之趣も爲申含使番竹原七郎兵衞曾根佐十郎差越小瀨川渉越候處賊勢防州脇村幷八幡山ゟ大小砲打掛候に付直に大砲隊相進八幡山臺場を始樹の間屯在之場所目的大小砲放擊脇村へ令放火候折柄賊勢三百人斗小瀨川渡り不圖藝州大竹山ゟ大小砲打出し追々味方之後山ゟ相廻り南之方海邊にて先式部大輔人數ゟ賊勢砲戰迫り來り候に付東之方字者山と唱候岡山ゟ轉陣待居候處終に進み擊不致二三番隊之儀は賊勢分配之後道を遮り候に付勇み味方に分配山林地理に寄り烈戰後襲を防候得共三方ゟ取固死地に陷り苦戰之處兼て相待置候陸軍方新港にも不相掛應援も無之無餘儀四時頃小方村にて三隊引纏玖波村へ引揚申候旗本先手貫名筑後隊を往來小瀨川筋若ノ坂之押として黑川村へ繰込早天若ノ坂ゟ出張致候處坂上ゟ押來り且兩傍之樹の間ゟ烈敷砲發致候に付接戰中味方大砲打損手詰之地理に無之賊勢北之方を東ゟ廻候に付小方村迄繰引備相立可致接戰候處筑後儀は銃丸に當り疵請候ゟ殿備横地左平太隊繰出し入代り嚴敷防戰本營ゟ締候處先手を始苦戰之機に乘り賊勢山上を渡寄本營近く進擊致候に付字四十八坂之死所轉陣同姓兵部大輔人數は淺原口ゟ出張襲來候賊勢と烈敷砲戰致候由申惣軍相纏め候處各隊山下海邊之難戰且歸途之村々悉運轉術を失ひ器械損亡何分屯在致候詮も無之候間於大野村式部申合伯耆守殿ゟ事機申達相伺候上廣嶋表へ一ト先引揚廿日市澤之者旗本之内廣瀨鄉右衞門隊殿備相兼差置申候人數死傷之儀は取調之上可申達此段御屆申上候以上

井伊掃部頭

○

去る十六日石州唐田峠ゟ陣取相待居候處長人濱田境目關門迄押寄津和野關門打破奇兵隊千人斗り致通行尤關門番五六人出居候處三四人卽死漸壹人相助り駕籠にて罷歸申候其後追々近寄報告も次第有之主計頭益田驛ゟ押寄濱田藩ゟも一手唐田峠ゟ繰出候に付右藩ゟ打合人數は裏手ゟ不意勝達寺ゟ押寄夫々嚴重陣取居候處敵二道ゟ押寄遂に二手共及發砲候に付味方ゟ二手ゟ打出し互に致砲戰候得共彼者萬福寺藪之向ゟ打候に付當りも相分不申擊砲戰勝敗不決敵引退致對陣候事に御座候人數之内別條無之併和田詫美右の手被打貫候得共命に別條無之足輕壹人少々手負其外別條無御座候勿論敵今以益田驛致對陣何時尙又砲戰相始り候も難斗御座候間嚴重に致手當相待候事に御座候旨彼地ゟ申越候に付此段御屆申上候已上

阿部主計頭内
大林軍左衞門

六月廿四日

○

拙者惣軍井伊掃部頭惣軍幷陸軍奉行竹中丹後守御目付大平鑛次郎等兼て打合之通り昨十四日曉岩國表ゟ可討入積諸手分配先手原田兵庫中根善次郎兩隊之内ゟ繰出藝領大竹村下方小瀨川端口表向岩國領脇村ゟ大砲五六發打入候處餘程手答致候得共何分夜中之儀に付敵之動靜虛實を伺進兵庫善次郎隊繰出し軍目付建部德次郎も出張陣列を調ゟ候砌掃部頭先隊も追々繰出し大竹村地田ゟ陣取敵地ゟ大小砲烈敷打入候に

付兵庫善次郎手ゟも同様敵地臺場樹間屯集ミ場所脇村等ゟ大小砲嚴敷放(マヽ)撃脇村等放火せしめ候折柄藝領袖見立戸兩村裏山奥上ミ方外壹ヶ所にて合圖打揚賊兵多人數出峯々ゟ起立大小砲打おろし追々味方ミ後山ゟ相廻り掃部頭人數ミ内ゟ烈敷打懸候に付嚴敷砲戰有之又脇村下方樹間海邊ゟ大小砲打出し拙者先手ゟも同様打合一時斗り及砲戰候内右大竹立戸袖見三ヶ村地内ゟ地雷火相發し無餘儀海邊ゟ轉陣堤脇にて及烈戰候得共三方取圍死地に陷り候苦戰にて器械損亡不少候間一ト先速(マヽ)人數引揚候ゟ他事無之哉候處軍目付建部徳二(マヽ)郎ゟ談ミ趣も有之候に付運送船ゟ爲乘船兵庫善二(マヽ)郎一ト先引揚申候又陸地引揚申候銃隊ミ者退候ミ節山上ミ賊徒八九人慥に打留候得共何分烈戰ミ折柄地理惡敷故首級揚不申致繰引候尤先勢應援ミ儀中軍ゟ追々繰出手筈に候得共山坂險難ミ場所柄里數隔り御座候に付先不取敢爲援兵十三日夜中軍ミ内ゟ物頭小川彌作一隊幷銃隊一小隊差添小船に爲乘組差出候處上陸ミ上先勢ゟ相加り及砲戰候儀に御座候且又往還若ノ坂峠には爲押御人數被差向候様竹中丹後守御家來ミ者ゟ及示合候處十三日夜に入若ノ坂押ミ儀差出兼候趣井伊掃部頭被斷候付手配人數繰出方ミ儀掃部頭ゟ申談有之候間差懸ミ取斗を以旗本ゟ物頭長谷川八郎左衞門組召連大砲壹挺打方ミ者は小船に及乘組繰出し候得共最早苦戰相濟人數引揚候放(マヽ)に至り手合に不及引揚申候且海路ゟも陸軍方打入無之甚以不都合ミ次第有之候拙者儀近々就注進大野村ミ内字四十八坂迄致出張候處掃部頭ゟも打合も有之伯耆守殿ゟ事機申達相伺候上廣嶋表ゟ一ト先引揚申候尤討死手負ミ儀猶取調可申達候得共此段御屆申達候已上

六月十五日　　榊原式部大輔

○

此程御屆被申達候井伊掃部頭人數去る十四日於藝防國境戰爭ミ節味方死傷

鐵砲疵　　隊長　貫名筑後

同　　戸塚左大夫隊　母衣役　大塚與一右衞門

敵陣へ使に參り　　木俣土佐隊使番　竹原七郎兵衞

罷歸り不申候　　曾根左十郎

討死　　戸塚左大夫隊　戰士　只木次郎右衞門

銃砲疵　　木俣土佐隊　大久保藤助組　梅本竹次郎

同
討死
同
同
銃砲疵
討死

西握才助組
中野房之助
陣場方手代
北川貫之丞
戸塚左大夫隊
物頭
吉川半右衞門組
藤田源三郎
河手主水隊
澤村左平太組
山本金吾
貫名筑後隊
物頭
黒柳孫右衞門組
一村由太郎
河手主水隊
旗指
中村千大夫
木俣土佐家來

同
手疵
討死
銃砲疵
討死
即死
手疵
即死
手疵
銃砲疵

北村宗大夫
同斷
北村要助
深田利八
貫名筑後家來
宮川鎗太
河手主水家來
木川權兵衞
戸塚左大夫隊
軍夫壹人
同
同四人
河手主水隊
同壹人
同
同壹人
貫名筑後隊
同壹人

即死

右ミ通御座候此段御屆可申上旨廣島表ゟ申付越候已上

六月廿五日

同　　同　壹人

○

右近將監人數一ノ手片岡彈正二ノ手松倉丹後領分津田村邊ゟ出陣致し居候處當十六日長賊多人數押寄候趣多田村關門詰より注進有之阿部主計頭樣御人數は益田村町外へ繰出に相成賊勢追々押寄候趣阿部陣所ゟ使番を以報し有之依て丹後手益田邊ゟ出張有之候處晝四ツ時頃賊勢多人數押來多田村關門ゟ發砲致し關門打破り益田町ゟ寄來り同所にて阿部樣丹後手と双方ゟ發砲いたし戰候内追々時刻移り既に夜に入互に戰を止め野陣致し居翌十七日彈正手ゟ同所ゟ勢を進め夫々切所ゟ陣替致し候處賊勢襲來發砲致し此方ゟ頻に打立程見合鑓を入嚴敷突立候處賊兵崩立四方ゟ散亂いたし樹間家蔭ゟ被打立貳ミ手ミ内戰士ミ長山本半彌其外餘程討死いたし其節御軍目付三枝刑部樣にも御討死被致候新手入替ミ間も無御座切所ゟ引取候趣在所表ゟ申越候間此段御屆申上候以上

井伊掃部頭内　今村忠右衞門

松平右近將監内

六月廿五日

○

今曉卯の刻山林にて二ヶ所火ミ手相見候に付早速人數相揃模樣相伺候處西北山ゟ鬨聲を發し兵粮御焚出所幷陣所ゟ鐵炮夥敷打掛候に付大小砲を以相防候處敵軍ゟ棒火矢にて放火いたし一端ミ勢猛烈には候得共大小砲を以散々打立追退げ申候彼我死傷ミ儀は未相分候へとも不取敢此段御屆申上候以上

姓名　戸田助三郎

六月十九日

○

上總海邊にて鄕士の悴十二歳と漁師の悴十六歳と戰爭の眞似をなして戲れしが鄕士の方は大君方と稱し漁師の方は長州方と稱し屢〻爭鬪する間鄕士の方屢〻敗を取れり一日其十二歳の兒小刀を懷にして出例の如く取組て勝負を爭ふ間に隱し持たる小刀にて漁師の悴を刺し即死す此事内濟にならずして遂に公裁を請ふに至れり吏斷じて曰十二歳の兒膽力可賞且奇特の事也　御凱陣の後褒賞あるべし漁師の方は急度愼可罷在旨云々

右風評のまゝ書記す〔原本片假名〕

○

七月廿一日左の信報を得たり一歎息

去月廿五日勝軍の後趣意不知宍戸備後介を可返と決議伯州一存にて取斗惣督(紀侯)に言上に相成候處大憤激にて即刻御家老一人早にて上坂惣督と辭表を被呈候よし尤大機密御祕し可被申候内實は諸藩進攻と義務無之只今　公邊御人數と紀藩のみ奮發と申事に御座候

○

長賊爲誅伐水野大炊頭御人數引纏大野村へ出陣罷在候處同人陣營へ再度犯來及砲發候處其節々大炊頭初出張御人數格別奮發勇戰兩度と御勝利就中此度と戰爭別て苦戰と處速に御討伐と段諸藩と龜鑑にも相成一段と事に候此旨大炊頭初へ御申達可被在候畢竟紀伊殿格別御盡力被爲在候段大坂表へ申上入御聽候はゝ御滿足可被思召候此段可被申上候事

六月廿五日

○

壹州小倉へ渡り指揮に及ふといへとも西國諸藩不從兎角和說を張候由

七月七日着坂　藝州表高尾宗十郎かと書狀寫

前略然は去る十三日夜御後列隊一同宮嶋表か乘船夜中出帆致し新港に討入候手筈と處船拂底と上船頭逃去悉く不都合にて乘組手間取彼是いたし候内夜明に至り候ても出帆相成不申十四日朝五時過掃部頭家來軍使として罷越候に付申述候には今拂曉井伊榊原兩家玖波村へ討入候處敵方伏兵所々か討出井伊捨打に相成悉苦戰に付玖波村海岸か陸軍方援兵として討入と程賴出候に付即刻出帆討入申度矢丈に存候へ共船拂底且風並惡敷帆前相視不申候に付小船にて爲引漸晝八時頃上大野村沖に着船候處最早玖波村大竹二ヶ所と砲火盛にて且御聞及も有之へく井伊家榊原勢最早退陣致候に付無詮方同沖に碇泊いたし翌十五日朝出帆廿日市着船上陸いたし陸地通り大野村へ到着

一十七日陸地山地兩手に別れ歩兵小筒大砲とも遠巡邏として四拾八坂邊迄出張爲致候處懸念も無御座相戻申候十八日夜俄に歩兵一大隊小筒一小隊大砲半座大嶋表へ出張と積にて御軍艦長崎丸に乘組器械積込として宮嶋湊に相迴候尤拙者は大野村に相殘申候

一十九日曉六時頃當大野村山手か賊兵俄に發砲致候に付夫々手配致候午去前宵半座出立跡と事故人數少にて萬端不都合と處一同奮發にて砲發いたし速に勝利相成申候當隊にては下役木下鎗太郎腰打拔れ候に付早速療養手當爲致置候翌廿日廣嶋表へ差遣療養爲致候尤命には拘り不申候右と外當隊怪我人無御座候歩兵局にては頭取友成求馬即死下役人深手歩兵怪我人十人程小筒局にては組と者一人左の手中指打拔れ外怪我人無之紀州勢大垣勢は少々怪我人有之趣兩家とも奮發一段と事に候

一右戰爭相濟未た大嶋表に出張と小筒大砲とも宮嶋表出帆相成不申候に付即刻呼戻申候

一大嶋表に出張と御前列隊去る廿日引上に相成候廿日市に到着當時同所に滯陣相成候へ共未た面會不致

候

右之廉々荒々申上候間江戸表ゟ可然御通達可被成候様いたし度候

六月廿四日　　高尾惣十郎

成瀨對馬守様

尚々彈藥無差支様御廻し方御取斗相成候様いたし度且當隊戰效記は追て御廻し可申候以上

○

覺

一六月五日御討入に可相成候所諸手不揃に付相延し同八日安藝守討手御免相成申候尤國境之守衛被仰付候

一同十一日御用に付小高引拂廣島へ罷出候所安藝守付添御免翔鶴御軍艦乘組軍目付被仰付候

一同十四日井伊榊原兩陣藝國大竹油見立戸北方迄繰出し合戰相始候所案外山の手ゟ逆寄致し候に付兩家先陣敗北引拂廣島へ引取申候右に付附添之建部朝倉も無據引揚申候

但大竹油見北方彼邊敵方にて燒拂申候に付前文之通り不都合相成申候

一同十五日大島郡にて陸軍歩兵大合戰難儀之旨申參候に付援兵相心得御軍艦方へ申達し八半時頃宮島出

帆七半時頃大島郡へ參着仕候處最早合戰最中に付餘程陸軍危く相見ゟ候之間速に御軍艦より大砲を打掛させ申候所都合克敵陣へ打込一發にて拾六人程討取候旨後日相分り申候

一同日戰は極て大合戰味方歩兵二大隊戸田肥後守城織部德山幸太郎出張尤八日ゟ大島へ打入度々戰に一度も敗軍致さす相戰居候所十七日には敵方人數增味方は後詰無之二大隊人數八千人程敵方は壹萬三千人餘にて已に皆討死にも可相成候所都合克御軍艦富士山翔鶴二艘相向ひ骨折打掛候に付全勝利に相成申候双方とも怪我人有之味方打死手負七百人程敵方には千百人たらすも有之様子御座候

一同十八日昨夜戸田肥後守より賴に付四半時頃より出帆宮島へ曉七ツ半時頃參着御軍艦頭取佐倉相太郎井上新八郎大野村へ出張之歩兵隊ゟ援兵之儀申遣し漸く晝後一大隊を引連井上敬次郎出張に付同人を乘組せ七ツ時頃出帆夜に入大島ゟ着一大隊上陸いたし候様申渡候事

一十九日陸軍隊御人數御分れ候に付後詰之諸侯も無之候に付一先引拂度由に付夕刻一同御軍艦ゟ乘組申候猶翔鶴ゟは戸田肥後守城織部其餘歩兵方多人數都合貳千人乘組せ殿りは井上敬二郎(ママ)相勤申候尤敵方より手出し不致候に付無滯引上け申候

一同廿日晝前廣島へ着八時過一同上陸致し候事

一同廿一日御目付大平鑛次郎大坂江戸兩御用有之翔鶴へ乘組大坂へ參候に付七ツ時出船致候先藝州合戰之模様如此御座候

覺

一六月十七日小倉表へ長防騎兵隊押寄田ノ浦燒拂候由軍艦三艘差向候處小倉臺場にて大砲を以て軍艦打沉め申候注進有之

一同人石州へも同斷濱田へ押寄申候趣には味方大不出來にて阿部主計頭先手敗北と申事軍目付山岡十兵衞は如何相成候哉又津和野附添長谷川久三郎如何相成候哉行衞相知れ不申甚心配致候併未注進不承知候事故眞僞不相分候

一十八日藝州大野村へ敵方ゟ逆寄致候歟歩兵一大隊大砲一座八挺水野大炊守人數戸田祐三郎人數にて大合戰致し敵方を追返し四拾八坂迄取返候由人數不相分候得共味方僅に五千人程にて勝軍大悅之事

一同十九日同州峠村と申所は松平伯耆守人數と敵兵相戰候所伯耆守人數二千人程にて全く軍に勝候旨承り申候先聞合如斯中々長防之者は軍上手にて困り申候長防人に一度も敗軍致さぬは陸軍隊の外討手大名衆は何れも悉く藝州侯始逃尻にて困り申候また〳〵下ノ關口は細川等有之候間定て强軍と被存候得共一戰之上ならては分り兼申候乍去拙者事は御軍艦乘組故先々大丈夫之譯併大名彼是申出張不致候

六月廿二日認め

一水野大炊頭は井伊殿之御先手故人數貳千五百人御附被成候伯耆守殿御差圖にて歩兵八千人附添藝州八

日市より押出防州境大野村に陣取翌十九日朝六ツ時頃敵兵三千八百人程にて寄來及合戰候處大炊頭家來敵之隊長を討取其餘首四ツ程取敵軍敗北大炊頭方には二百人打死怪我人七八百人有之由大坂より手筈着信行屆候故勝利相成候段一段之事御賞(ママ)しにて大炊頭へ御盃被下候由

右之趣紀州御屋形ゟ七月朔日申來る

七月十日

伊賀守殿御渡

毛利興丸家來宍戸備後介小田村(ママ)素太郎儀御不審之儀有之松平安藝守ゟ御預相成居候處此度於藝州廣嶋表伯耆守全く一己之差略を以竊に歸國爲致候段以之外之儀に付伯耆守儀早々大坂表ゟ御呼登糺問之上至當之御所置可有之積に付聊無疑念諸事是迄之通可被心得候

右之通口々討手之面々ゟ相達候間爲心得御供萬石以上以下之面々ゟ可被相達候

七月十日

○

中國筋戰爭に付討死之姓名

歩兵頭取間宮帶刀松平友三郎友成求馬外壹人大砲方三木多一郎其外下役にも討死有之由
當時西へ向ひ候御先手組等は存外組中行屆各帶刀又は目印等有之人は覗ひ討に相成に付一同申合兵賊同
様一刀にて筒袖ヅボンシャモミ外着用不致能働き候趣御先手頭大屋賴母本間彈正病氣にて歸坂御役御免
ミ由

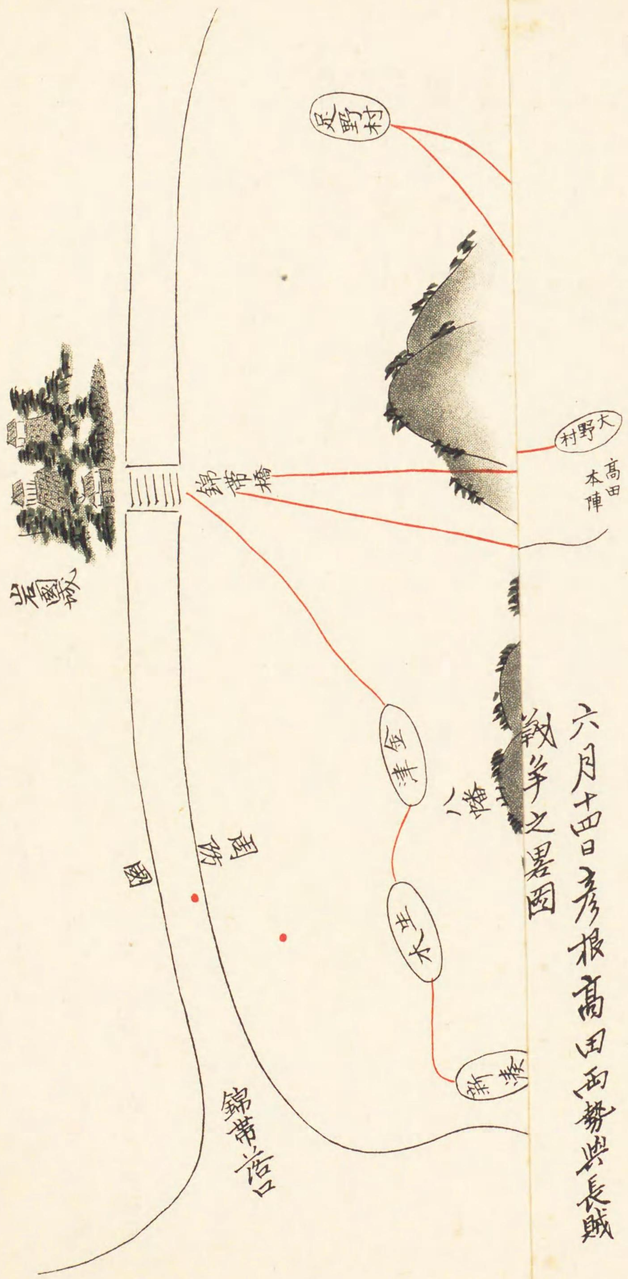
六月十九日大島戰爭ミ節分捕ミ品

西洋陣大鼓二ツ　一∴ノ印幕壹張
朱朱
＝＝角字　紙旗三十流　其外品々
遊撃隊第六隊宇山宇作英則ミ首
生捕兩人

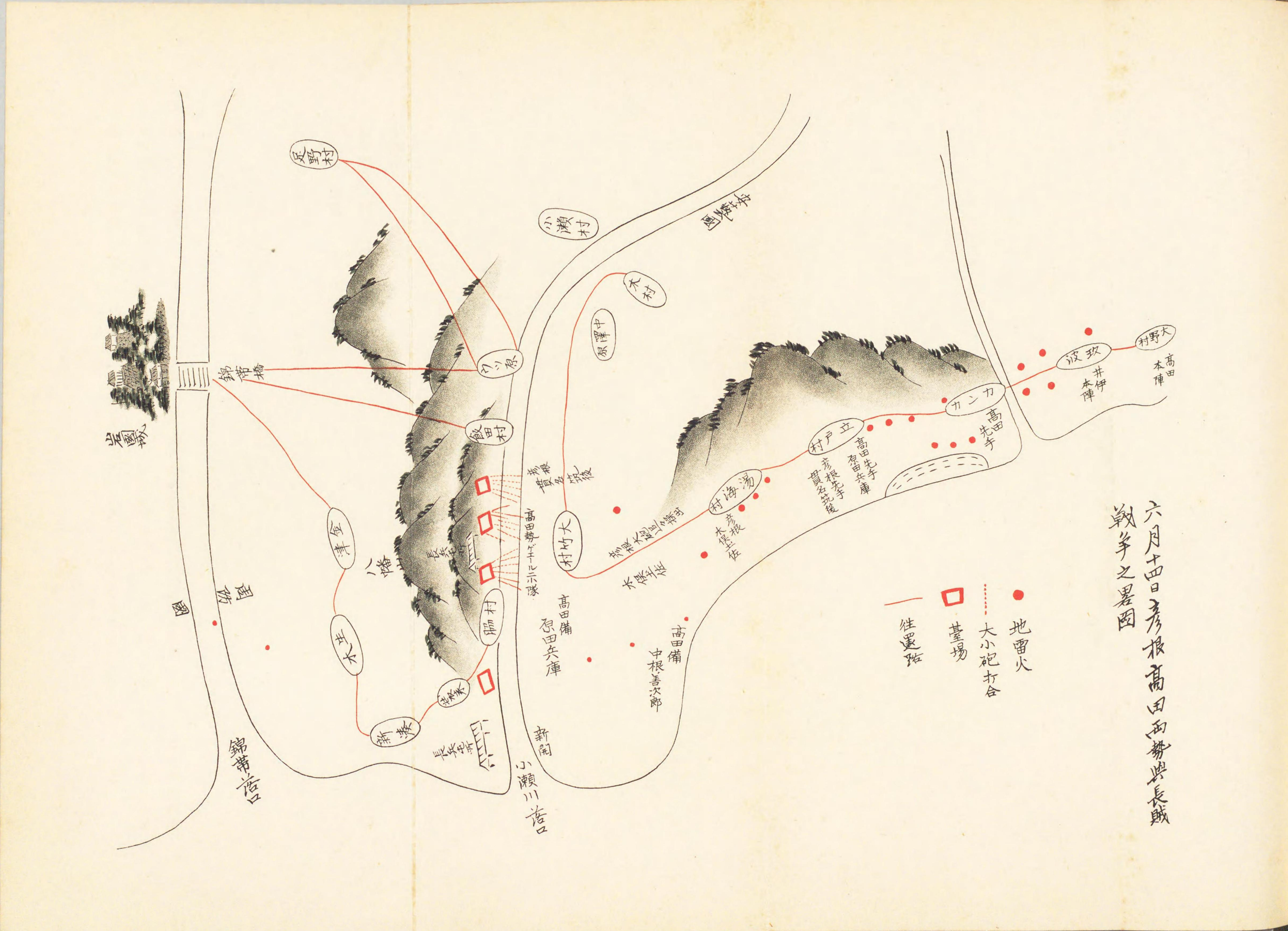
○

七月廿五日河内守殿御渡

出羽守事紀伊中納言爲御差添藝州表ゟ被差遣候旨去る十七日於大坂表被　仰出候此段向々ゟ可被相達候
七月



六月十四日彦根高田西勢與長賊
戰爭之畧圖



出羽守事紀伊中納言爲御差添藝州表ゟ被差遣候旨去る十七日於大坂表被　仰出候此段向々ゟ可被相達候

七月

○

伯州失策以來　官軍拱手して居候處賊藝州大野村邊迄侵掠の形也此所は大炊頭宿陣ミ所惣督の辭表を呈し軍を廣島迄引揚たる故空虛なり

七月當月十四日石州も同樣官軍手を出さざるの所に賊徒襲來し一戰有之雲州勢安藤飛州幷附屬ミ兵砲擊し賊敗走せし由尤詳を知らすといへとも小出平九郎の注進狀官報に成れる由は確說也

○

在上に失策有之廿五日以後諸方共先々休戰ミ姿にて此方ゟ戰を相始め候事不相成是には殆困窮仕候何れ其內相破れ戰爭相始り可申との事

一昨今ミ風聞石州へ賊打出一戰有之候趣未確信無之候

一津山途中より引返し病氣申立明石も病氣申立いまた出張無之

右兩家先手人數斗出張

一脇坂右同斷

一阿部主計頭途中にて病氣滯在

一雲州出馬ミ報有りて未敵地へ進たるを不聞

一因州同斷

一備前事を左右に寄せて兵を出さす
一九州諸侯傍觀閣老と指揮に不從
一其外諸侯多分因循大垣藩のみ不絶奮發
一彦柳(マヽ)金穀器械悉く失ひ再擧と力無之
一藝州因循伯州と失策も藝の周旋也
一濱田孤城に籠居し急を告く大切迫
一津和野束手孤城に畏縮賊と手中に在るが如し
一軍監長谷川不得已山口に招れ大膳父子應接として往き候報あり
一姫島に蓋藏と石炭百萬斤夜に乘して放火燒失

○

紀州軍務局小僕幾太郎と申者六月十九日大野村戰爭に長州へ捕はれ七月二日七ツ時頃大野村へ罷歸候節長州ゟ別紙書面相添使節を以相獻度候へとも御嚴備難相犯候故乍大儀相屆吳候樣懇に相命候小賊共玖波迄送り吳候との事

別紙

紀伊侯先鋒閣下に白す先般

幕府御問罪と師四境に被差向候に付ては弊藩士民一統不奉得其旨如何と御樣子に候哉と伺度隣境借地推參仕候處不圖も井伊榊原二侯御出陣に相成愈疑惑罷在候に付再度大野御屯所近邊迄不憚嚴威罷出候次第に御座候然處此度松平伯耆守樣御寛大と御所置を以是迄御拘留相成居候宍戸備後介御差返し被爲成候に付ては國情巨細御了解と御事と相考最早改て平穩と御沙汰可有之哉と奉渴望候處道路と風說先夜以來御襲來と御樣子承之不堪恐怖素ゟ下情欝塞匹夫匹婦も不獲其所ゟして今日と形勢に立至り候得共前斷伯耆守樣萬端御聞取被爲在候上又々　皇國と騷擾萬民と塗炭を釀候ては何歟私鬪と姿に相渡り上は奉對明天子賢將軍恐縮と至に奉存候別て願候は從來御柱石と御任を以明(マヽ)良御遭遇と御場合被爲當候御事に付早々平常と　御沙汰被　仰出候樣御盡力と程奉懇願候

七月三日　　長防士民中

○

一別紙と通大坂表ゟ被相願候に付ては今日ゟ藝石兩道共紀伊殿には指揮不被致候間伯耆守殿にて宜指揮等有之候樣被存候此段可申達旨被申付候事

七月五日

別紙

私儀不肖と身を以忝く御先手惣督と命を蒙り實に負乘其任に不堪儀に候へとも方今切迫と御時勢乍相

辨只々退讓のみ仕候も奉恐入候得共再應御辭退と上愚陋を不顧今日迄奉　命仕候儀に候得共元來若輩と私衆望に不相副惣督と任有名て無實軍と進退幷敵と重囚を放遣等別紙と通と大事件に付ても往々預聞不致儀多分有之諸藩進戰と兵士へ對し何共無面目次第に至り候儀も全く　公邊御趣意を不奉辨一己と鄙見を以明に重任を犯し居候故と儀と深悔悟仕此上羞恥を忍ひ强て勉强仕候共此分にては往々罪を重可申と深く奉恐怖候に付何卒惣督と職は今日ゟ御免被成下候樣仕度其上にて如何樣とも努力可仕と奉存候此段何分御許容被成下候樣伏て奉懇願候已上

七月

背張

書面之通　公邊ゟ御達被遊候間御役人向ゟ申合且藝石兩道討手諸藩へ爲心得候儀早々宜被取斗候事

御軍事奉行へ

○

七月十二日

紀伊殿御家老御呼出

御書面を以被仰立候趣委細達

御聽候處御重任御痛心之程申迄も無之處此度伯耆守不都合之取計等有之別て御苦慮之段御察被

思召候得共同人儀に付ては已に申達候次第も有之且は是迄御人數於數次捷報有之候も全く御盡力故と段々

御感稱被爲在候儀に付猶此上も御奮勵御成功相成候樣厚

御賴被成度との

御沙汰に候間其旨可申上候事

○

尾州侯建白

今度長防　御裁許被仰渡候に付末家幷士民共より差出候書付御差戻就ては彌問罪と師御差向被遊候儀御當然と儀奉存候尤諸藩盡力四方より討入候はゝ不日に御成功に可至且又是迄激徒事を取居候得共一戰と後自然玉石相分れ速に降參可致候間此期に臨み彼是申上候儀は過慮と至に候得共萬一二州と人民案外固結致し急卒御誅鋤不被行屆候節は　大旆をも御進め可被遊と奉拜察候抑此度征長と御一擧　幕威御挽回と御勇斷は奉伺候へ共頻年諸藩奔命に勞れ國力難支況卽今物價騰貴諸國內變も不少　御膝元すら動搖と機も相見候程と儀に付事宜に寄如何樣と禍難を釀し候儀も難斗此段深心配仕候間假令戰爭隙取候へ共天時人和御斟酌と上暫討手と兵を忍せられ　大旆は京攝と間へ御駐め篤と根本を御固め被遊候得は却

て力を不勞して御成功に可至哉奉存候古より軍を班し時を量り候例は數多有之候乍憚堂々たる　幕府彼二州と者に孤註と勝負を御爭ひ被遊候儀は無勿體儀と奉存候乍去一旦　御征伐と御事と御布告に相成候上御猶豫相成候ては天下に大信を御失ひ被遊　御威光にも相拘可申との論も有之候得共生民と塗炭を被　思召御至誠より被爲出候儀は自然人心感激仕努々　御威光に相拘申間敷と奉存候此後と御模樣に寄　御動座被遊儀は篤と　御再思被爲在候樣仕度奉懇願候右は動もすれは姑息と策に似寄候得共今日と御進退實に天下と御大事と奉存候間吐露肺腑獻言恐惶敬白

六月　　御官

越前春嶽公建白

此度長防と模樣に寄　御動座と御都合に可至とと處不可得止御次第には可有御座候得共　御家と御安危至大至當と處奉　恐入候是迄　朝廷御遵奉と筋に付追年御誠意被爲盡候由御一和と御運に相成御國是及外國と御所置追々御施行に可相成處長防と一條にて右至大と御急務は却て御捗取に相成兼候故人心と歸嚮茲相定諸藩疑惑を抱動すれは　公武と釁隙も可生勢且天下公私繁重賦役と申者遷沸騰か士民困窮の姿顯候折柄一度華城　御動座に相成候てば此際に乘し　公邊些と御失體を口實に致し困苦に陷人心も煽動と如何成禍胎變亂を斗る者有之とも難斗長防激徒等操虛と施策も難斗萬一大旆西に有之京攝に動搖を生

候得は天下と大勢中斷之運漕と路壅塞し問罪と形勢も氣分と心裂に候はゝ乍恐御進退御窮被相成長防と事も是に就て却て大成御手間取可相成況又兵庫港と儀も御宣儀に相成候樣にも不奉伺其内異船と儀渡來等無之儀も難差定如何樣と御運に相成候哉内外御困難も參(カ)長防と體　御苟且と御相應に相成候樣にては天下一同に廟堂と内廷を奉洞察し　御威光と稜も可申斗御次第にも可推移何分　公邊か内地と御戰爭を御引起にては御失策素か一旦萌動に及候亂開容易に平定可致樣も無之海邊も障破を生し御軍費勢も彌增候儀と恐懼患害消焦御安危浮沈と可機此時に可相決儀と恐懼悲歎と至奉存候乍憚此邊と御防備　御廟算　御遺策有之間敷儀とは奉存候得共何分抱憂に堪兼候故不憚鄙衷奉申上候　何卒乍此上長防と件は華城か夫々と御指揮を以蚤御濟せに相成當分京攝と間に御奉職御互援玉願國擣(ママ)御座候此段乍恐猶又委細奉申上候樣大藏大輔申含候以上

六月

○

宮津侯か御屆

兼て申達置候爲巡邏差出置候拙者人數峠村相固め居候處一昨十八日津田村に激徒八百人斗り罷越胸壁樣と所修理候形勢に付今午刻頃物見と者差出し候處先方も遠見と者出居出會候に付討懸候處討洩何方にか

逃散申候右に付人數繰詰三町斗前ゟ三手に分れ半時斗及砲戰候内一手は敵方ミ後へ相廻り頻に打詰一手は山中へ分入是又及砲戰追々及討追候處何れへ致散亂候哉相分不申候右屯集致居候草家四軒破裂彈落候や致燒失候討取人數怪我等ミ儀は取調ミ上可申上且又器械損も有之に付一先引揚候樣申置候不取敢此段御屆申達候以上

六月廿日　　松平伯耆守

昨廿日御屆申達候爲巡邏差出置候拙者人數峠村ミ要路へ固居候て激徒ミ事情致探索候所去る十八日津田村八百人斗罷越一昨十九日は川津原と申所ミ山手に寄追々人數相進め胸壁樣ミ所致造築候由相聞候に付彼ミ要害全備不致候内不意に是ゟ相進め可申と申合昨廿日午中刻比怠備候時刻を伺ひ物見ミ者を先へ進め引續人數を進め候處既に敵に地近に及彼物見に出會候に付味方物見ミ者直に馬上筒を以一發致候處討れ候得共大に狼狽致何れへ逃去候哉相分不申無程人數を三手に分山手に向前左右打入及砲戰申候其内味方ミ大砲利を得候事や打出候砲聲少く相成候内右三手に分候内ミ一手敵ミ横合ゟ顯出打出候處敵は追々逃去申候に付兵士槍入仕候今一手ミ兵は敵ミ後へ相廻逃去候跡ゟ打出申候に付敵兵散亂仕候右屯集ミ草家燒草ミ爲に候や致燒失候素ゟ敵ミ地利を辨へ人數ミ多少明に知候て進候儀に無之候に付何分味方小人數ミ儀に付右敵ミ別手に跡を被絶切候儀も有之候ては及難儀儀に付打首分捕等を禁し打捨其儘人數引揚申候討取人數討死怪我人等ミ儀は別紙ミ通に御座候此段御屆申達候

六月廿一日　　三拾五人

別紙

六月廿日藝州川津原屯集ミ激徒討取伯耆守家來討死手負左ミ通り

一　討取

右ミ外大小砲にて討取候分相分不申候

一　手負　左ミ通り

鐵砲疵深手　武器奉行　湊　孝治
同　河野　藤治
同　吉田　房藏
同　兵士　岡本　瓦
同　徒士　平田　友藏
同　小荷駄方　中邨　權七
同　淺手

同　原田　衛
同　楠　平治
同　鼓手　有吉　三七
同　深手　角田　瀧治
討死　徒士　松尾　兵治

右之通り御座候以上

○

御所ゟ御沙汰

非常之節以惣督之邊九門内家老以下重立候者拾人迄は乗馬不苦候事唐門内爲警衛人數貳拾人迄入込神嘉殿南方假屋へ可相詰事　一橋中納言

松平肥後守

263043

非常之節以守護職之邊御門内家老以下八人迄乗馬不苦候事唐門内警衛人數貳拾人迄入込堀重門南左之方假屋へ可相詰候事　松平越中守

非常之節以役邊唐門内爲警衛人數貳拾人迄入込神嘉殿南方假屋へ可相詰候事　松平出羽守

六月

七月五日閣老板倉侯ゟ諸藩討手之留守居御呼出之御達し御渡之書付寫

毛利興丸家來宍戸云々　重出

○

先達て石州濱田ゟ長州人侵入之處松平右近將監幷阿部主計頭先手一戰之後于今必至防守罷在候趣就ては其方儀兼て相達候通陸路出張應援可有之は勿論に候得共同所之儀は山陰道咽喉之土地諸討手兵勢にも差響此上長州人海路襲來水陸に相迫り候樣にては彌以不容易之儀に付其方所持之蒸氣船早々同處海邊ゟ相廻し海路應援も無油斷心付候樣可被致候

右ゝ通相達候間可被得其意候

七月

今度海路應援も無油斷心付候樣被　仰出候に付ては早速にも　公儀御軍艦御廻方に可相成ゝ處御船少にて其儀相成兼候事に付其段厚相心得格別ゝ盡力可被致候尤公儀御借受相成居候八雲丸は此節御修復中に付出來次第御差戻相成候筈に候事

松平出羽守

○

一橋中納言樣七月十七日曉丑ゝ刻御乘切にて御下坂同八ッ時頃御登城同十八日晝後八ッ時に御下城直樣御乘切にて御上京松平大藏大輔樣（春嶽樣御事）七月上旬御上京ゝ處同十八日曉御着坂同日五ッ時過同八ッ時過兩度御登城同夕刻御下り御滯坂被成候事

勅使飛鳥井殿七月十八日伏見ゟ御乘船同日七ッ時過大坂表ゟ御下向御旅館東本願寺掛り所同十九日四ッ時半御入城同廿日朝御用濟御歸京被成候

七月廿日

○

石州口は十一里斗も押出し候所に是ゟ長州借用地と棒杭建候よし

○

元三條實美始五人ゝ者共大坂表ゟ呼寄候儀此節手順宜取斗出來候儀に候はゝ呼寄ゝ儀は勿論に候得共萬一手間取れ候はゝ防長處置後に取斗候樣可致旨筑前表ゟ罷越居候目付小林甚七郎ゟ相達候右ゝ趣御兩卿ゟ御達可申旨在坂年寄共ゟ申越候間此段爲御心得申進候事

六月

○

七月五日高階典藥少允福井豐後守於大坂　大樹公診察ゝ上御容體書ゝ一條

御容體奉診ゝ所元來御壯實御血質御澁滯御瘡氣御欝伏ゝ御平體殊に昨年來風土も被爲替度々溫邪御含被爲遊四月下旬以來諸症御差引被爲在候六月下旬更に溫邪に御感被遊候哉御水氣被爲發御發熱御脈緊數御嘔吐惡心御不食御小水御不利等ゝ御諸症被爲加候御儀と奉診候御熱毒內外御强盛に被爲在候に付當時御發表利水劑御專要ゝ御症と奉診候御毒氣も被爲在候御事故自然脚氣症に被爲積候へは萬一御衝心ゝ程も難斗奉存候以上

七月五日

越脾湯加朮苓　犀角桑白皮

○

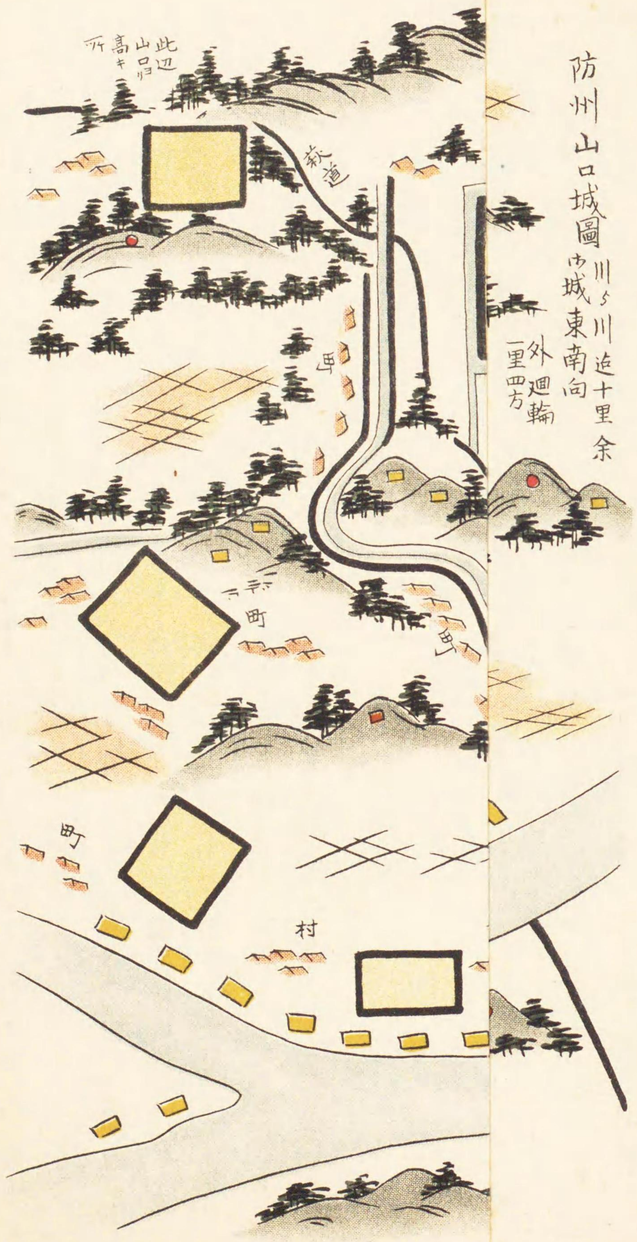
高階福井典藥少允

一大樹公急御不例に付　朝廷ゟ爲御見舞福井高階御醫師御診察に相越旨被　仰出右兩醫急卽下坂登城ミ處於黑書院板倉稻葉ミ兩閣老御應接先茶菓子等出後御居間へ伺候右黑書院ゟ御居間へは凡貳丁程も有之御居間は十貳疊敷其眞中へ紺縮緬ミ御蒲團其上に白衣にて御伏居相成相進み御容體被伺候處四體悉腫氣にて張裂く斗御息合幷に御脈も切數也御腹底を撫て爰は如何御座候哉と被伺候處格別疼は致不申と御丁寧に御答御診察相濟黑書院迄被召兩閣老其外御側衆へ御容體幷藥方委細被申上候乍併是迄幕醫は蘭方斗にて候處兩醫は漢方見立はヶ樣と態と差控被申候由於同處仙臺平袴一反つゝ被下夫ゟ直に下城旅館へ御歸に相成其内御側使者を以て黃金壹枚帷子地三反つゝ爲御挨拶被下七月七日右兩醫歸京ミ事

○

大坂表より書狀抄錄

上樣御俄御養生不被爲叶昨廿日明け方被遊御他界候尤極御内々故何事も際立不申樣平常ミ通御勤仕被遊候右に付來月中旬にも御病氣御養生ミ體にて　還御夫ゟ將軍宣下等引續可有之旨御老中方被仰出候處大目付御目付ゟは平常と違ひ左樣ミ儀は難相成當表にて表向被仰出當御城にて一橋樣ゟ將軍宣下直に御進發相成奥向にても半分は御附に相成半分は



候右に付來月中旬にも御病氣御養生と體にて　還御夫々將軍宣下等引續可有之旨御老中方被仰出候處大目付御目付々は平常と違ひ左樣と儀は難相成當表にて表向被仰出當御城にて一橋樣に將軍宣下直に御進發相成奥向にても半分は御附に相成半分は

御尊骸御附御供にて下向相成候方宜敷と申出未た御評議一決不致由

一一橋殿大坂御居付相成候に付御座所幷御館付諸役人詰所等昨今急速に御建立相成申候尤兩三日に御下坂有之候由

一松平伯耆守様御呼戻相成候處未た廣嶋御立に不相成尤宍戸備後外壹人御差留相成候に付御請等相違致候旨右兩人差廻し候に付俄に御請も可申上様相成先々御手柄と筋にも可相成右故御平定と上御歸坂可相成旨　御殿にて評判有之候へとも信用難致候

一廿一日夕御船にて一橋様御着坂相成直に御入城被遊候御跡より會津様にも御下坂可有之候由當時追々會津様と評判能く京坂市中にても會津様にて天下は持候旨申居候

○

浪華かゝ文通に

石州濱田は七月十日頃か十八日迄連日戰有之遂に籠城不相叶松平右近將監自ら城市に火を掛け何方へか退去被致候由

一松平伯耆守殿御糺問中大坂御城代牧野越中守へ御預相成候趣家報有之に付此表にて世子より差控と儀被相伺候處未た上には確報を不被爲致に付今暫く見合可罷在旨御内意有之候よし

○

七月廿日長崎出狀七月晦日着

翔鶴丸御船六月廿四日曉兵庫出帆讃州鹽飽島ゟ立寄廿五日朝豐前沓尾ゟ至り同所にて富士山と共に碇泊罷在候處壹岐守殿御指揮にて兩艦とも速に小倉ゟ相廻し可申旨申成廿八日兩艦同時に此所を出帆朝二時より四時の曉下ノ關と海峽を通(小倉と長門との間尤近き所六丁)先此所は何事もなく小倉沖に至り此所にて順動丸ゟ碇泊罷在廿九日小倉ゟ上陸先日長賊と爲に田ノ浦放火被致同日小倉方にて打沈めたる二艘ズルツプと由小倉にて被貯置候小舟數艘長賊と爲に被奪取其半は燒かれ如此折柄彼を攻むるよりも己を守る方專一とて諸方手配嚴重に候

七月二日曉前何方と舟なる哉翔鶴丸と近邊に來り候故何方と船なる哉と問ふ答て小倉と舟にて富士山を指さし向ひの御船ゟ少々用事有之罷越とて走り行間もなく六斤砲二發富士山ゟ向け砲發直樣下ノ關と方ゟ走行候故翔鶴丸にては兼て合圖と鐘を叩き發砲蒸氣運轉相始大小砲を打掛けれとも小舟故其行方を知らす日と昇る頃小倉方を見るに內裏に火事相始まれり暫ありて注進に長州と蒸氣軍艦來りて內裏を砲火いたし候間御船早々御廻し可被下候樣申來る早速內裏ゟ行其船と樣子を見る所帆前船二艘にて頻に發砲いたし居候故翔鶴丸よりも砲發に及ひ候賊船ゟ打立ては悉く破裂丸なりしか三發は船と甲板上を越へて

五間斗も跡にて破裂富士山は十町も跡の方にて僅に二三發も打出すと發砲を罷めし故不審に思ひ敵丸を受たる事あるへしとて佐々倉相太郎富士山ゟ行ひて見るに百斤鑄留と尻拔け卽死二人は砲術方士官松村久太郎水主彌八郎怪我人砲術方嶋津文三郎幷小頭步兵壹人火焚水主合五人此一條に付今日と戰爭を打罷內裏は九分燒る

陸路戰爭と樣子は小倉肥後勢上陸長賊を討取事百餘人小倉勢死傷三十餘人有之候由肥後勢戰死なし

六月廿八日夜中豐後姬島に貯置候石炭二百萬斤長賊と爲に火を放たれ燒失と段七月二日松平市正より屆出

先達て田ノ浦戰爭と樣子を聞くに曉天に蒸氣船二艘を以帆前船二艘を引船に致し日と丸と旗を建たるのみならす長門に向ひ砲發せし故小倉家來は全く幕府と御船と思ひ居ると一時に一∴と變し四艘悉く田ノ浦に向ひ發砲小倉方にては不意と事故防き兼終に上陸放火致されし由小笠原近江守幷軍目付も小倉迄逃來り七月十一日大江御船豐前沓尾着御目付二人小倉ゟ着

六月廿五日宍戸備後介藝州廣島にて伯耆守殿一己と御了簡にて御さし戻し相成候就ては討手と面々此事に拘るものなし時に七月二日惣督紀伊殿と御先陣に長賊一人來り宍戸備後介使者と由を告けて書狀さし出す其文面にて先比伯耆守殿ゟ申上私歸國候はゝ七日を限り必大膳父子說諭仕國內鎭靜可致候夫に附ては御先陣御引揚と積伯耆守殿と御契約いたし置候早々御退陣可然候其上主人ゟ說諭御鎭靜可致候と云々

の書狀故紀伊殿御憤怒被爲遊忝も惣督ミ命を奉して今此所に出張す然るに伯耆守一己ミ差略にて兩人ミ生捕を返す事不屆速に退陣可致とて其用意ミ由御目付二人松浦越中守溝口出羽守小倉より壹岐守殿ミ御さし圖にて廣島ゟ行紀伊殿ゟ御目見ミ上申上御退陣暫時御見合に相成夫より直樣右御目付大江丸にて上坂

七月十四日朝薩州ミ籏印を建候馬蒸氣船二艘小倉洋長門の地方を走りて御軍艦に向ひ籏を揚けて其式禮を行ひ下ノ關に向て走る

七月十七日夜下ノ關を出帆午後四時翔鶴丸長崎に着蒸氣罐御修覆に付五六日ミ内再ひ小倉ゟ返り戰爭ミ積りにて候

○濱田落城ミよし小倉にて風聞有之候

○

廻狀

別紙長防臣民弊藩ゟ依賴ミ儀有之至情無餘儀候併今日ミ形行にては取傳候儀不都合ミ姿に御座候へとも相互に武門通情旁傍觀堪兼候依之別紙相添御通達候間御推察御承知可被下候已上

松平修理大夫内

七月廿二日　　内田仲之丞

加州樣　仙臺樣　越前樣　肥後樣　筑前樣　肥前樣
因州樣　備前樣　津　樣　阿州樣　土州樣　久留米樣
秋田樣　盛岡樣　米澤樣　作州樣　雲州樣　川越樣
宇和島樣　高松樣　松山樣　柳川樣　明石樣　二本松樣
大聖寺樣　富山樣　中津樣　新發田樣　郡山樣　弘前樣

右御留守居中樣

別紙

長防士民泣血再拜謹て諸藩明侯閣下に白す主人多年　勅旨を奉して台命に從ひ東西奔走心力を盡し候所奸邪蔽明寃枉を受け仰て天に號ふ所也今日ミ急に迫り君子ミ不幸御憐察可被下候然共事既に爰に至り御救援も請奉らす二州の士民各臣士ミ分を盡して死を以主恩に報ひ知己を千載の下に待公論を百世ミ後に仰き候外無他事誓て奉對　天朝不遜ミ心底毫も無之天地鬼神照明森列敢て赤心を披候所に御座候間一樣暴舉ミ看を不被爲成樣奉願上候且亦弊國ミ存亡固ゟ不論ミ所弊國ミ事ゟして自然天下分列ミ基を開き外夷ミ術中に陷り候樣可相成遺憾に奉存候就ては何卒諸明侯力を戮して同く上　天朝を奉戴下幕府を扶け奸邪を誅鋤し忠節を登庸し天下をして判然名義相立人心一致仕候樣御盡力有之度右樣無之ては數年を不

出して遂に　神州をして外夷に棄與せられ候樣相成候事必然に奉存候偏に御亮察被下度泣血奉懇告候頓首謹言

右は大坂表に於て七日廿八日達す

○

長防討入御手始と事井伊榊原遂に敗走御勝利と御樣子毛頭も不承儀に御座候

此期に彼是忠諫申上候は別て奉恐入候得共堂々たる神州浮沈と界今日に御座候是迄每々建言仕候得共御採用無之却て御疑惑と件々不少候得共今日に至候ては假令一家存亡仕候共　皇國と存亡に比候ては九牛と一毛と奉存候不顧萬死言上仕候

一長防御討入頻々建言仕候會津中將儀寸刻も早京都御守衛御免被仰出加賀宰相ゟ被仰付事

一小笠原壹岐守儀此度藝州表に於て取計方士民一同不荷意と箇條不少候間被召寄至當と御所置御座候樣仕度候事

一長防一旦御討入に相成候根元壹岐守私意より出候重大と事件輕々敷取計候事故其次第被　仰立諸軍御引揚寛大と御所置に相成候得は自然幕府と御仁德列國幷萬民感服仕候は必然と儀と奉存候間一際出格と御思慮に被爲渡候樣無之候ては乍恐　德川と御家も最早今日に迫候儀外藩割據と志有之假令如何樣御台命御座候ても兵士差出候儀は無之情實明鏡に如見奉存候私共蒙數年と御大恩候身分此儘傍觀仕候ては背本意候間其他愚存と趣家來荒尾但馬伊木長門差出候間御不審と件々御糺被下度以萬死此段奉申上候恐々頓首々々

六月十一日

松平因幡守
松平備前守

○

雲藩廻達

石州路ゟ追々御人數御繰込に相成居候處先月十三日熱田村雲雀山邊にて一と見御人數及戰爭其節は此方樣御勝利に相成候處同十六日戰爭安藤飛驒守勢敗走に相成候より諸手と兵勢折け終に濱田及落城候付ては追々切迫と形勢に付平田御宿陣と御場合にも無之則同十九日晝御機嫌能一ト先御歸城に相成候旨御國より申來候事

八月二日

○

濱田侯閣下に白主人父子先年來　勅諚台諭と重を荷ひ專藩屏と任と相心得力を尊攘に盡し厚御褒詔被賜候處一旦要路欝塞上　天光を蔽ひ台諭を障碍し種々前日に齟齬と沙汰有之弊國と寃枉連年相湊遂に

小笠原壹岐守殿始下藝に相成主人父子ミ名代として宍戸備後介罷出候處却て御奉書は末家名代ゟ被相渡剩兵力を以主人名代を拘執相成殊に御達振に至ては削封廢立抔被仰出候段實慘刮ミ極士民驚惑不大形連に歎願仕候へ共却て拒絶に相成軍勢被差向終に沿海地方を砲擊し小民を暴動せられ差て順逆を明にし正否を正され候次第毫も無之彌以眞に　天旨台意に不出事明確旁此餘は出藝奸吏ミ心腹を尋問し拘留の名代を取返し前條ミ處置振直に　闕下に哀訴仕候心得にて國内一統罷在候處我々等兼て貴領近地に屯集候者には不得止事道を假り御當地迄押出候へ共決して御隣交忘却仕候事誓て無之伏て御亮察奉希候恐惶謹言

長防士民中

別紙ミ通過日御出先ゟ及御挨拶候處以兵力道路御要遮相成候故無據及接戰直に御城下ゟ罷越御國論ミ向背承度覺悟に罷在候處道路風說傳聞仕候へは藝州表に於て爲何御趣意歟不存候得共主人名代宍戸備後介御指返に相成且閣下御病床に被爲在候歟ミ由旁藝州情實相分候迄一先退三舍先鋒田野村三隅邊滯陣罷在候尤前條貴意に不被爲叶候はゝ敢不違命也此段御領掌被成下候て紀州其外出陣ミ諸陣ゟ可然御傳達可被下候以上

石州路出張

各中

濱田侯ゟ御返答

此節柄に付御札御別紙共我々等致披見候處過日出先に御挨拶御座候段は如何ミ儀に候哉一向承知致候者無之且又名實相反候儀も可有之哉と疑惑致候に付一と先別紙ミ通得貴意候尤諸藩ゟは通達可致候以上

濱田出張中

別紙

於貴國は累代ミ御名家　皇國ミ大義名分を重し君侯素より謹慎恭順ミ道を盡し奉對　天幕被盡忠敬候段兼々御申立ミ趣致傳聞候就ては其意あれは其實可有御座と存候處不圖も去月十六日益田表ゟ亂入被致長州領と傍示杭抔相立無沙汰に三隅邊迄進入被致候始末名實相反是迄傳聞致候とは相違如何ミ御遺恨に候哉元より隣接ミ交誼も有之一點ミ私怨は無之候得共今日ミ情態に相成候儀は明に　天幕ミ命を奉し候儀にて一己ミ事に無之候扨又即今承候へは傍示杭被取除候趣彌恭順ミ筋被盡候儀に候へは三隅益田表御退引　天幕ミ恩命御企待被致候儀至當ミ御處置と奉存候聊御來書ミ趣に依て此段爲可申述如此御座候以上

○

七月

七月三日曉七ツ時頃長勢小倉領内裏邊ゟ軍艦四艘にて押寄砲發に及ひ互に戰爭ミ内右内裏後口ミ山手より兼て埋伏ミ長勢起り立前後より挾打に致し小倉勢餘程ミ苦戰に及ひ右に付人家も燒失有之暫時ミ戰にて長勢引揚候趣

但し内裏より小倉城下ゟ引揚ミ人數を長勢と見違同士打にて餘程ミ恠我人有之小倉城下も少々放火燒失相成候よし

肥後人數も虛聲斗にて一向出張無之小倉勢一手にて働き大敗北先つ籠城ミ姿ミよし

七月十八日　細川侯家來より言上書

長防御處置ミ儀に付越中守人數ミ儀豐後鶴崎へ差出置候處今度御討入期限御達に付ては國許に揃置候人數も早々繰出候處折節風順も不宜候間豐前國小倉表ゟ順に繰出鶴崎出張ミ分も豐前路ゟ相廻申候此段申上候樣申付越候以上

七月十三日

細川越中守家來

青地源右衞門

備前侯より再度御達

去る十二日以書取奉伺候處御附札ミ趣承知仕候然る處先達て大目付より被相達候問罪師御差向ミ御主意は拒命ミ者御誅鋤被成候ミ御事に御座候處去る十一日御達に相成候　朝廷御奏問ミ趣にては毛利大膳父子御裁許及違背候との儀彼是御意味違候樣乍恐被相伺申候勿論期て重大ミ事件右樣ミ御儀有之間敷全く御深意も被爲在候御事とも奉存候得共徹底伺盡置候半ては先般も申上候通人心一定不仕候に付不顧恐懼再應奉伺候尤何分ミ御沙汰有之候迄は人數繰出ミ儀差控申候以上

六月十六日

松平備前守

○

鍋島侯より御達

肥前守人數ミ儀打續候强風雨にて何分從國許繰出候儀不相叶候に付其段は最前於小倉表小笠原壹岐守樣迄御屆仕置候然る處未一の見御出馬無御座内追々被相達候通人數繰出ミ儀は何れ順序ミ通無御座候ては混雜等も有之候に付一の見御出馬次第見斗を以順に國許繰出候心得に御座候此段被仰聞置被下候樣國許より申付越候以上

六月廿二日

一因州侯指揮不堪御任場を以御斷當時は御不快中少々快方に御座候はゝ出馬は可仕心得に候へ共指揮
ゝ儀は御斷と申越ゝ由

一備前家老上坂言上ゝ趣御聞屆無之直に上京に相成段は申上候件に有之趣

松平肥前守内
百武作右衞門

長州末家より藝州へ差越候書面寫

一翰啓上仕候日增炎威甚敷候處各樣愈御安泰可被成御勤仕奉恭賀候然は宗藩國情被成御承知候通御座候處過日來　幕府御軍勢大嶋郡ゟ被差向砲擊ゝ次第も有之由進戰ゝ次第も無之人心彌以沸騰不得止幕下御役々ゝ轅門を犯し宍戸備後介御拘留其他御仕置振御尋問として遊擊軍其外火急に御圍内へ入込候樣可有御座乍去多年爲宗家御盡力被下候段一統感銘仕且御隣交忘却仕候事決て無御座候就ては亂妨相戒候條村々安堵家業相働候樣御下方ゟ御通置被成下候樣奉存候不得止情狀とは乍申幾重にも御氣ゝ毒ゝ次第不惡御汲取被成下候樣奉希候右ゝ趣は不取敢以使者申上候筈ゝ御座候處混雜中不得止失敬相働候万々御深察奉希候以上

六月十四日曉

植田乙次郎樣
寺尾幾十郎樣

鹽谷　昇助
目加田彦助

○

長州奇兵隊より井伊榊原陣所送來書面寫

井伊　掃部頭
榊原式部大輔

其方共先祖に不相似武邊に疎く此度及敗北候故可處鑿處對　幕府寛大ゝ處置を以生虜ゝ向は宥歸之傷人は加藥用玖波村迄送遣候間無係念連歸可申候器械は慥に預置候間此上武邊を勵み受取に可來候事

右書付建札に相認長州より廣島表兩家ゝ陣所へ送候由尤死骸片付分捕ゝ品五日相懸候由生捕ゝ者は壹人毎に金五兩つゝ指遣相返し候趣

七月十六日廿日市より書面寫

七月廿三日寫歸る

一大野村對陣ゟ紀州水野大炊頭様去る六日廣嶋表ゟ引取申候○一公儀歩兵方同十三日大野より不殘引拂廣島へ罷歸申候○大垣勢同日同斷○津山勢當驛に罷在候分十四日晩同斷（但惣勢幷宮津侯故障出來候由右藩も引取候共下説有之）○榊原先鋒地ノ御前に屯居○彦根同斷木俣（ママ）何手小野田宮内より串戸幷戸塚當驛屯居候處大野着寄手引拂空虛に相成候に付長兵段々張出し追々宮内邊へも相見へ可申勢に付殊ゟ外周章にて十四日夜俄に廣島迄引取相成是より下は只今にては外藩壹人も相見へ不申候○藝州勢官道に有之趣來狀ゟ寫略

薩州御屆書京師ゟ差出

此節防長御討入相成兵端相開候段國元へ相達實に天下ゟ大變に付兼々禁闕御警衛ゟ命を奉し候へは一際嚴重行屆甚任に堪候様無之ては不相濟不取敢一隊ゟ人數差出蒸氣船貳艘攝海へ入港追々京着ゟ趣に御座候間當節柄ゟ儀に付此段不指置御屆申上候以上

七月十七日

右當地にて御差留も有之處彼是應接手間取候付押て上京候よし

七月廿二日御達

松平因幡守
藤堂和泉守

長防賊徒石州路へ追々相進松平右近將監城下近邊襲來同家人數は勿論松平出羽守阿部主計頭人數と度々苦戰ゟ趣相聞候間早々出兵救應可被致候

右ゟ通相達候間可被得其意候

歩兵頭並
淺野隼人　歩兵一大隊　御持小筒二小隊　大炮半座
軍目付
有馬式部

右ゟ通石州路爲討手被差遣候間爲心得相達候

七月廿二日

○

英國ミニストル薩州へ參此度ゟ征長同國は出兵不致と申趣意等篤と承込一旦長崎ゟ立戻尚又下ノ關ゟ罷

越長防戰爭ミ儀双方名義正敷方に味方可致積ミ段申立候に付追々御說得有之處漸く致承諾横濱へ歸帆ミ筈にて大目附塚原但馬守乘組出帆兵庫ゟ碇泊し其内但馬守上坂委細及言上候由尤英艦二艘にて一艘は宇和島へ用事有之趣を以相迴申候征長ミ儀彼是異存有之向ミ儀兼て承り込右樣薩州幷宇和島等へ存寄爲聞合相迴り候趣相聞候段内書を以肥前より議奏ミ内へ申來候事

右英船下ノ關ゟ乘入居候處小笠原壹州侯より用事有之候に付罷越候樣申遣候處異人相答候には御用ならは當方ゟ社御出可有之に當方より罷出る理無之と申候に付壹州侯より其船碇泊ミ處は敵地に付難罷出趣を又々申遣異人終に小倉ゟ罷越及談判て前文ミ次第に相成候

大監察塚原但馬守殿演話

英佛情實聞取書

一時日は不相分候得とも横濱碇泊ミ英船一艘俄に馬關に向て出帆甚以不穩ミ形色有之佛人見付殊ミ外心配英人出帆ミ模樣不容易是は迚も無事に罷歸候儀には不被存何角支を生る了簡ならんと直に佛人英人の跡を追々參候處漸藝州近海にて追付候に付ミニストル英ミニストル馬關へ罷越候趣意相尋候處長州征伐被致候處甚以不承知有之候間長人へ應接ミ爲罷越と申佛ミニストル彼是理解致候得とも聞入不申遂に一同馬關へ罷出候由然處先日中既長州征伐に付馬關邊諸夷通行不致候樣御達に相成候末と申兼々英船渡來ミ風聞も有之候に付不取敢御目付塚原但馬守被罷出長州征伐中に付此場所碇泊不致樣將又閣老罷出及應接儀も有之候へとも此處は最早敵地にて罷出候場所柄無之候間小倉へ相迴可申と應接被致候處英人不容易氣色にて義も無き無謀ミ征伐にては於我々も承知難致且外國ミ上官を容易に呼立候儀難心得と強く釁端を開き風情有之に付塚原殿精々理解にて長州征伐決て無謀ミ師に無之御裁許違背不得止候て此場に到候段被申諭候得は英人愕然として左樣ミ譯は始て致承知候夫は至極御尤御征伐ミ筈也是迄事情承り候と甚相違也さらは小倉へ罷出閣老ゟ及應接段ミ次第閣老ゟ被申諭候處彌理解に承伏致し候筈ミ模樣相見へ候由佛人は英人ミ理解に承伏致し候を見て廿五日に退帆兵庫ゟ入港右便船に塚原殿上坂佛人申候は乍恐日本は未た火器軍艦不揃候に付先日中於横濱右ミ器械御用も御座候はゝ何時成共御不自由無之樣可仕と申出候へ共江戸御役人方には大坂ミ御沙汰無之故於此方は存不申と御沙汰に候長州近海乘迴り彼是形勢相伺候處乍恐何分御備向御嚴重とも難申上此にては御出功難斗候此節柄速に平定不致して御成功及遲滯候樣にては其中には如何ミ變事出來いたし候哉も難斗甚以御心配申上候何れ器械御用意不相成候ては勝算難立候間御用丈ミ軍艦火器被仰付候はゝ急速御用立候樣御周旋可仕候尤差懸り候儀に付御借し申候ても不苦候得共外國ミ器械御借用にて御征伐と相成候ては人心折合如何と奉存候間矢張御買入相成候方可然と奉存候御用丈は何時にも差揃差上へく候間右を以急々御成功相立候樣吳々も奉存上ミ意味船中にて委細塚原殿ゟ申聞候由御同人着坂ミ上咄ミ由也

六月

紀伊侯布告

一寅七月廿三日在藝諸大名幷家老ゟ被仰聞　征長之儀に付ては從　天幕追々被　仰出之趣も有之御打入に相成候處不計も彼是御手違之廉も不少（私曰此御手違とは攻守處を異にし伯州獨斷にて休兵等之事を云）頃日石州口等守を失ひ候段私等職掌おゐて恐懼之至に候然る處今般於坂城御不例被爲在候旨相達候就ては兵氣沮喪人心危疑之間此餘如何樣之異事出來候哉と爲國家偏憂苦此事に候併今日之勢ひ一歩を退候へは終には天下之事不可救之場に立至り候も難斗に付此上は成敗利鈍を不論大義之在る所今一層勉勵盡力いたし速に征討之奏功相立天下後世へ對し不都合無之樣致度見込に候猶各一覽了管之趣致承知度候間國家之大事精々無伏臓被申聞候樣致度候事

右七月廿三日在藝諸藩幷家老被爲召被仰聞候也

○別紙之通布告有之諸藩之兵氣を鼓舞し再擧討入之支度中七月廿五日石州地戰爭石雲諸方之兵悉く敗北安藤飛州も大敗北にてすへて敗走就中安藤は石州地に足を留め兼藝州へ向て引取候由然處總督（紀公）大に怒り途中より逐ひ返され候との事に御座候其後之事狀未た相分り不申候

○雲藩なとにては兎角因州を氣遣はしく思ひ是迄捗々敷出兵も不出來因循いたし候趣

因はたとへ發奮助力いたし呉候てもあまり恃むに足らすといへとも萬一異心ありては大變なり其嫌疑之件と云は因より津和野へ向て使之往く事日々なり然るに一人も歸り來るを見す因て思ふに因藩之内賊に志を通する者在りて官軍の事情形勢を内通するには非すやなと評論區々なり云々

右浪華ゟ申越候密翰中抄錄大意

○

爰に一新報あり朝鮮人佛人五名を殺す佛怒て其國を攻むるの擧あり故に横濱に在る佛人皆引去ると云我政府長賊の罪狀十四ヶ條を掲けて外國各政府に布告すと云

○

臣○儀初夏以來染疾罷在其後精術相加快和に趣候處當月初旬ゟ再感既に此程勅使を以蒙　寵問實に過分之　鴻恩感戴之次第然るに病勢愈進不堪執務候間此上危篤に臨候は家族慶喜へ相續爲仕候尤防長之儀は至急に付爲名代出張爲仕度此段　勅許之　御沙汰被成候樣奉願候

○

七月

一橋中納言殿

此程中ゟ　御不例被爲被　在候處追々　御疲勞被爲　增候に付此上　御危篤にも被爲至候

は御相續ニ儀被　仰出且防長追討ニ儀至急に付爲御名代御出陣被成候樣思召候依之御別紙ニ通
御所ゟ被　仰上候間其段御心得可被在ニ旨被
仰出候此段申上候樣との　御意候

御所より被　仰出ニ御書付寫

大樹所勞追々差重候に付危篤ニ節は一橋中納言ゟ相續爲致度尤防長ニ儀は至急に付爲名代出張爲致度由願ニ趣被　聞食候事

此程中ゟ　御不例被爲　在候處追々　御疲勞被爲　增候に付此上　御危篤にも被爲至候は　御相續ニ儀被　仰出且防長ニ儀至急に付爲　御名代出陣可仕旨　御沙汰ニ趣奉畏不肖ニ私不存寄右樣ニ蒙台命候段偏に恐悚ニ至何共　御請ニ可申上樣無御座候防長ニ儀は卽今ニ急務國家　御安危ニ界に付乍不及粉骨碎身微力ニ相屆丈け勉勵可仕一死報恩ニ覺悟に御座候得共御相續ニ儀に至ては私輩ニ負荷に堪候筋に無之公武ゟ對し實に御斷申上候旨再三再四陳請仕候處　御許容無之內外危急ニ御時節彼是辭避仕數日相送候內には人心ニ向否に拘り如何樣ニ變事可相生も難斗何分國家ニ御大事には難替候間早々御請申上候樣可仕旨御年寄始め强て申聞も有之一身ニ進退此期に相窮當惑無限猶退て勘辨仕候處此上徒に固辭仕ても却て台慮相背き且は　御安危傍觀仕只管一身ニ樂地を求候に相近く深奉恐入候に付其身ニ庸劣を忘れ御相續ニ儀御請仕爲　御名代速に出陣可仕奉存候尤重き　御職任ニ儀薄力菲才所詮行屆不申覆錬(マヽ)ニ恐れ實に今日に差迫り戰栗難堪候に付此上幾重にも御斷申上候間兼て　御許容ニ　御沙汰被成下候樣奉存候右　御請奉申上候誠恐惶頓首謹言

七月　　臣　慶喜

御請

寅七月廿九日　板倉伊賀守殿　御使

○

福山藩某書翰抄書

大坂ゟ着ニ上御藏屋敷にて承る左ニ通　十九日

一十七日戰爭ニ節怪我人廿五六人○下宮治右衞門長刀にて大働　五十歲位の仁　○卽死網川馬之助瀨尾八十助○堀越庄左衞門天海次郎兵衞如何いたし候哉行方相知不申其後出候哉未た調も發輝と不致由○本間務吉川

保前田小藤太武田金太郎藤江次郎菊池武三郎藤江某堀内楫之助此外侍分三人樣御足輕十人斗御長柄五人斗

一備前侯人數差出し不申○藤堂も人數差出し不申如何ゝ了簡歟難斗由○細川は人數小倉へ出張候へとも一向戰ひは不致形勢

一小倉領へ七月三日長州ゟ討入所々放火亂妨戰爭有之勝負は五分に候へとも討死は小倉方多きよし右ゝ次第にても細川更に援兵不致由

一紀州惣督御人數石州口へ多人數出張候へとも柔弱にて更に戰ひ不申由

一大島又々長州へ被取返候得とも諸藩加勢無之に付松山侯も國元へ人數引取候由

一薩州にては攘夷ゝ廉立不申候ては人數出し不申趣意申立候由

一宍戸備後介國元へ御歸しに相成候へは如何樣にも鎮靜方盡力可致と申候に付伯耆守樣御戻し被成候由計略に落入候由にて大不評判右に付紀州樣惣督御免御願被成候處御差留右備後介差戻し候儀御惣督へ御相談も無之に付御願被成候

一薩州人此間ゟ又々多人數入京十九日抔も追々餘程入京何等ゝ趣意歟いつれ底意有之事哉得と周旋致し内意探索可致と存居候や内話有之由

一長人津和野領を越し濱田ゝ境へ嚴重ゝ關門築立候よし津和野は長領に相成旗下同樣ゝ由

一國主方は勿論諸藩とも戰爭ゝ意無之に付御家にても御人數御引取ゝ御見込に有之候へとも濱田幷雲州にて頻に留め候よし併御本隊丈けは御引取に可相成趣

一上樣御不例に付大坂混雜ゝ由一橋樣も御馬にて被爲入十九日朝御歸り一昨日と歟爲御尋勅使飛鳥井殿御下坂御座候由此條實に絶言語候

一當時御藏屋敷へ春嶽樣御借用にて去る八日ゟ御旅館に相成候由（七月朔日頃御上京夫ゟ御下坂）

右ゝ外四五條混雜にて失念右ゝケ條にて紛々ゝ世評は筆を厭ひ不申上候間萬事御察可被下候

○

七月廿日大坂出立貳里程罷越候處福井侯ゝ輕き御家來兵庫ゝ御臺場へ罷越候由道連れに成色々咄ゝ内覺候分左ゝ通

一上樣御不快相尋候處最初は一ト通りゝ挨拶に候處能々相探り候處何も不審ゝ事には無之由全く御實病ゝ御樣子恐入候事に御座候○御跡ゝ評承り候處橋公へと申論に相成候處當時形勢力に不及との御趣意にて强て御斷と申事依て尾州何千代樣（御名忘レ）と申事に可相成との沙汰のよし○但し愚案にて此は跡目ゝ事は眞僞不慥と奉存候賢者宜御察可被下候

一春侯御出勤は昨年來　公儀ゟ度々ゝ御沙汰其上先達てゟ會公薩ゝ重臣等福井城下に逗留頻に懇願無御據御出京被成候よし

一伯耆守様御惣督へ無御相談備後介御歸し被成候に付紀州公御立腹惣督御免御願に付伯耆守様事御糺問
ミ上相當ミ御沙汰に可被仰付旨被仰出藝州ゟ御呼出しに相成候よし
一宍戸備後(マヽ)助は水藩ミ留守居ミ次男のよし
一本多内藏助は格別ミ仁物に無之に嫡子(名忘レ)は年若には候へとも至て賢明才發ミ由衆人歸服いたし候由
内實は水老公ミ御子様ミ由既に櫻田一件に御出被成候由○愚案此條不審○耕雲齋難所へ引附御手際殊
に一戰も不致降伏に成候儀は全く本多ミ計略にて天晴ミ軍師と美談仕候
此外にも咄有之候へとも失念○下路所々問屋場其外人足等ミ風説左ミ通
一長征福山侯大垣侯專ら評判宜○井伊榊原度々敗北ミ由
一岡山人足ミ咄御出張ミ御模様は更に無之此間伊木長門船にて大坂へ被參候右は彌出張不致事治定に相
成候事ミ由高くは不被申候得共長量屓ミ程難斗由問屋場役人ミ咄其外人足等も同様又濱田へ爲加勢少
々被遣候處去る十八日夕燒打に逢ひ落城濱田公は因州へ御引取依て加勢も近々召歸候よし
但し其後途中にて加勢引取ミ人數に逢ひ申候間實事に御座候
一龍野侯備中(地名忘レ)矢掛けミ先也御出張に相成候へとも御不快ミ由にて御人數進み不申今以同所に逗留
一長州十萬ミ勢にて上京ミ申事專ら風説
一問屋場ミ咄あまり違ひ不申御家ミ十六日十七日ミ戰爭委敷咄申候

一作州侯も一向戰ミ氣無く近々引取ミ申説但河内邊にて行逢申候如何ミ趣意にて御引取か不審に御座候
一松平伯耆守様藝州ゟ御戻り山手邊にて行逢杖拂付き居候間其後承り候處いまた御役御免には成不申候
○御人數藤井宿に旅宿致し殘居候に付様子承り候處又々藝州へ御下り故ミ申候世評は御役御免ミ申事
に御座候
一姫路宿はづれ並木にて大助殿早にて上坂に逢候よし誰も不心付故挨拶不致何歟に福山ミ申印を見請候
由右に付如何ミ事哉ミ定て變事出來候歟福着を急ぎ可申ミ淺川ミ申候處有根峠越し候處にて福山より
ミ飛脚兩人馬にて來る由人足申候間和駕籠より出様子承候處御不快も御心能被爲在候得ども惣御人數
御引揚御自國御固めミ申候御趣意ミ由右に付先刻大助殿早にて上坂夫ゟ上京夫ゟ殊に寄候ては江戸表
へ御出被成候ミ申聞候に付一統力を落し急足ミ念も絶申候爰にて大助殿ミ申事初て承知此飛脚松本利
三郎一人は名不承候○此節ミ咄井伊榊原とも藝州へ引取候よし榊原は寺町ミ由
其後神邊本陣へ參候處問屋役人諸藩早打ミ咄又公邊御人數等ミ咄探索致候て福山へ注進いたし候控帳
爲見候間荒々一覽候處前條大坂以來ミ風説異同有之候へとも詰り趣意柄は違ひ無之種々委敷書面も有
之不殘寫取度候へとも何分遠方殊に寸暇無之に付甚殘念奉存候其内工夫可仕ミ奉存候寫し候はゝ相廻
し可申候其内備後介ゟ伯耆守様へ差出候書面御取上けミ十萬石を繩打候様に歎願致候處更に御取上け
無之殘りミ廿六萬何千石丈け繩打候て渡し候事に被仰渡候間一藩不伏に付何卒御取上け高へ繩打被下

候へは大膳父子如何様被仰付候とも御請仕候様可仕と申趣意也風説には伯州侯戰爭嫌ひ故此計略に落ち候由其後備後介大將にて藝州領へ押來亂妨致し候由

一長人上京ミ評判專ら既に藝州へ申越し候には此度長征ミ趣意爲伺上京致候に付御領分無差支通し吳候様斷有之由右は實事と相見藝藩御家中へ御觸面○此度長人上京に付ては定て多人數に可有之候へ共兼て申渡候通聊動揺不致妻子等夫々取片付一藩死力を盡し可申との大意也

一藝領吉田と申所に元就ミ墓有之右ミ邊より都て五六里程藝領へ入込從是長州領と申杭を建候よし且右村々ミ百姓へ金銀を與へ長州へ連れ行候處百姓悅ひ參候由右百姓家不殘燒拂候共申又長領ミ百姓と入替り候とも說區々右に付藝方使を以尋候處隣國ミ好みを失ひ所謂無き長征ミ人數を廣島へ差出候儀は定て存寄可有之又使者に差出候備後介被取押候を傍觀致居候次第心得有之候ての儀にて此方へ尋候には不及申との暴言を以答候故藝州にても殊ミ外立腹と申說也又一說に長州ミ歎願引受周旋いたし整ひ候はゝ右ミ地面元ミ如く戻し可申と答候由○藝領と津和野領にて長領十五六萬石廣まり候由申居候右風說際限無之に付筆留申候

一廿五日晝頃福着仕懇意ミ仁入替り來候へともいつれも混雜にて永居不致候其譯は　御上には廿三日晝頃府中方無御滯御歸城被爲在候得共先鋒ミ人數未府中に滯陣然處戰爭以來何れも勞れ居り候に付代りミ人數御差立に相成交代爲致爲引取候様に被申事にて急に支度致し夜半頃迄に漸出立相濟申候廿六日夜明方方追々引取又長人襲來ミ風說專らにて御城下入口等ミ往還小道へ急に土俵にて臺場形ち出來夫々人數配り其内大筒隊人數不足故大混雜

一御目付方談遠路ミ旅行一統勞れ居可申候へとも仕儀に寄只今にもいつれへ成共御差向可被成候間右様相心得候様兵重郎へ談有之右に付江戸表方廻し候長持方小筒其外取出し用意致候

一廿六日朝方腰辨當にて御備懸り荒木市助と申仁爲見分罷越候に付地利爲見置各胴亂小筒を背負ひ御城下廻り口々臺場へ罷越候西御門を出こう崎と申所方右土手廻り野上草戸邊妙法寺沖王子笠岡海道市村在府中海道木ノ庄村山々見物致し七時過歸宅草臥申候五里餘の道法に候へとも小筒を持候故勞れ候右は身體ミ試に致し候

一右臺場大砲貳挺つゝ備有之御筒も引足不申候故和筒少々交り申候

一今日御目付方談にて草戸方先に臺場一ケ所江戸より參り候者一組に被仰付候地名追て可申上候

一何分自國ミ防禦專要ミ御趣意に相成申候大坂ミ御模様次第府中ミ御人數も引揚候由右様ミ次第に付町方にては道具類在方へ運ひ出し候様子先年異國騷きにて國々へ引越し品川高縄ミ者共田舍へ運ひ候様子と同斷荷拵いたし候に依て買物斷候に付困り申候

一今にも長人襲來候様に相見候間江戸方引越來候婦人は別て如何成因果にてケ様成浮目に逢ひ候事と歎候も尤千萬氣ミ毒に存候

一御筒人數も引足不申故鞆津ゟ御固めは不致萬一押來候へは捨置候御見込ゟ樣子

一四五日以前長人無刀にて忍ひ來り何村とかゟ百姓をだまし御城下所々案内致し御堀ゟ淺深測量致候由右村ゟ露顯に依て被召捕昨廿五日ゟ郡役所にて吟味有之候へとも生得馬鹿か馬鹿ゟ眞似か前後不揃ゟ事而已申居候よし今日は拷問に懸け候との噂

一廿四日には尾ノ道へ參り候場所に關門有之由商人體ゟ者兩人參り候に付咎め候處長州ゟ者ゟ由答に付入れ不申差返し候へとも何歟樣子探りゟ爲にも可有之と存福山へ申越候に付御物頭一人御足輕召連出張いたし候由

一堀越庄左衞門事佐和ゟ嘶にては生捕られ候には無之全打死ゟ由此方ゟ追打ゟ節敵壹人突候由其後敗北逃候節も同人を見受候後一向不相見全く被打候事に相違無之何分追打に逢ひ候事故死骸ゟ始末も出來不申其儘に捨置候由廿六日堀越ゟ鎗宅へ歸り候に付悴松太郎只今に親も歸り候半と待居候由氣ゟ毒成事に御座候堀庄出陣ゟ節此度戰場にて死候へは悴ゟ爲に成候と被申居候よし果て如此堀庄本望可成と申候

一或人の咄に此方にて二人も三人も突留候抔申候へとも達者成者を突候は無之多く玉に中り歩行不叶或は倒れ候者を突一人を兩三人にて突候も有之由名を忘れ候へとも十四五間程にて敵銕砲を向け候に付太刀を振上け控へ候處運能打損し候に付其儘追懸け打取候由是等は見事ゟ由

○

一此度疊具足御物入を掛け持參候處更に用立不申不益相成候右ゟ譯は此處ゟ戰爭刀槍ゟ疵は壹人も無之皆砲丸疵のみ其内淺深有之別紙ゟ通脇亦こうもんの邊より腹中を打拔かれ或は臍の脇より脊へ被拔又脊骨の肉を脇腹より打込まれ脇腹皮肉に玉留り自分にて掘出し候抔聞も恐敷疊ゟ上にての考にては迚も助命は在間敷と存候處何れも追々平癒中にて近々出勤致候樣申居候然る處兩人程急所にも無之場所を被打候へ共臑當致居候に付鎖を肉中へ被打込場所にても掘出し候へ共殘り有之宅へ歸り候後尙又掘出し候へとも未殘り有之候今次深疵のものより平癒に手間取殊に度々苦痛を致し難儀ゟ由依て場所に て若手の氣早ゟ者は後來不用物故四兩餘も掛け候胄幷籠手臑當とも河(カ)へ投込候由此仁秋月辰三の從弟也其外入來る人殊に籠手臑當共決して用間敷と口々に申右は疊の上の論と違ひ實地檢究ゟ軍人申候に付一統稽古着と相極り疊具足抔の噂も嫌ひ申候長持へ入候まゝ部やの角へ置申候就ては江戸表にても出張ゟ模樣に依り砲戰專と見込候はゝ六具ゟ類一切無用に候

一何分長人砲術丈け熟練成事何れも驚き居申候ェイ／／ドン／／抔にては迚も間に合不申御役人始後悔ゟ樣子場所にて掛候時分貝太鼓更に用立不申氣億(ヤ)れか故操練場ゟ樣には音も不出柳原か山下の左衞門の如くボロン／／位ゟ事にて一向役に立不申故後には金鼓相用不申由御老若初あきらめ申候依之近々に西洋銃隊散兵ゟ稽古初候噂に御座候廿五日夜より廿六日迄に追々に引取候面々西洋流の好き嫌ひの

差別無く逢候人殊に偽の挨拶は不致戰場に出るなら具足幷に赤白黄と筒袖陣羽織大口と類必用申間敷
又銃はミニーゲウェールにては丁間不飛中りあらく必用間敷又槍抔も爲持候は益少と申候
一槍の論に曰く手詰に成候迄には敵を打か打たれるかにて萬一打たるゝ處手詰に成りいざ槍と申時分に
は槍持何へ參候か中々側には居不申調練と様には參り不申山上へ登り又急に下り所々奔走致候故續き
事無之由諸人噂皆同斷
一大口と類は山坂道無き場所奔走と節木其外等引掛り何れも裾はずた〳〵に致し候ゆへ皆下を切取候よ
し堀幾馬申候には同人は半大口着用候處夫にても所々へ引掛り邪魔に成り候間股引かダン袋に無之て
は差支候よし其外も同斷に付此度一同ダン袋を拵へ候事に相成今廿六日紺木綿求急に申付候岩井一右
衛門に逢様子承り候處何分伊賀袴抔は不便に付私も極可申と存居候旨噺に御座候
一長人四五丁の川を隔て打候得共不殘ミニー筒故敵と玉は尖く飛來候得共此方と玉は中々屆不申殊に當
りも細にて耳の左右を飛音數發の由右に付追々引取候仁甲冑を賣拂ひ借金致し候てもミニーヘールを
求め不申候ては戰場へは出不申抔口々に申居候又長人千人程出候噂に候得共漸く一バタロンの内を半
分に分一行に押出し夫か相圖にて散兵に分れ候ても二人位つゝの打方草木の影或は百姓家の家根の上
抔か打出し身體顯不申一場所か二發は打不申由煙を目當に打たれ候事を厭ひ一發打候と場所をかへ殊
に立込不致皆寢込と由又元込と筒を多く用ひ候様子と由山を登り又駈下り或は家根の上か打直に飛下

り候由猿の如しと申居候又追々詰寄るに從ひ散兵廣く散り候故多人數の様に思ひ候由然る處御家の人
數は懸り初は十分に散し候ても詰寄るに從ひ追々すぼみ集り候故猶更當り候由今更後悔間に合不申疊
の上の今津流バカ〳〵敷事と諸人申居候併十七日に戰士の分筒無之に付槍を入候には軍目付初長人も
驚き候由筒先を向ひ槍にて打込抔無法と事にて福山人數は他藩と違ひがへん同様無敵なる仕業を恐居
候由
一目立候陣羽織或は筒袖共敵か多く覗ひ候由依て山岡十郎兵衛様差圖にて目立候陣羽織を脱せ木の枝其
外等へ懸けさせ候て働かせ候由跡にて右の羽折見候處玉の跡數發有之全く實の人と存打候事に候由夫
に付急き白抔目立候筒袖の人は染させ或は割羽織の袖を切捨上着抔に致し候由依て三吉に罷在候者は
同所にて不殘染させ候由右に付白の筒袖着用の者を見請候へは白はイケヌゾ〳〵被申候に付伊藤初今
日白の分紺屋へ被持私の體卷も白に付同様紺屋へ持參染させ申候目立候色は夜分抔も別して宜敷から
す由紺屋にて申候には四五日以前か筒袖の染物敵に參り昨日は安藤様斗二十斗其外等にて五十程染候
由
右と條々過文殊に差急き認猶更御分り惡き儀は御賢察被下以後右と心得を以御用意相成候様奉存候併日
本流を守る偏顧の者は是非に不及候
一玉留り掘出し候は馬場長之助籠手の鎖打込今以難儀折々出候者は吉川保也

一何れも能く働候内十六日一番鐵砲打入候は岩井龜次郎とか申御足輕衆人々八九間も追々打初め候由依て忽ち被打取卽死ミ由其外數輩の戰爭ミ次第難盡是にて筆を留申候

一猶崎十郎兵衞弟宇田太郎右衞門十六日戰爭始候頃一發も打出さす逃け出候よし骨柄も能く槍劒も免許濟平日大言をはく男にて此度小銃隊に罷出候處右ミ次第三次迄跡をも見す逃け來候に付大和章之介弟某も小銃隊仲間故か懇意ミ場か段々諭示致し當人屈伏致し大和某へ介錯賴切腹致候事に極り候に付大和ミ持にて大目付へ内々屆け候處先差控候樣沙汰有之其後章之介へ内々　君上方の御沙汰と申事にて三次出奔致候夫より又々先陣へ戻り候由右は此後の戰に爲働恥辱を爲雪候内意と相見候由然る處廿六日夕引取候者の噺には立戻り候へとも矢張震居更に用立不申勿論其後の戰爭は遠方より打合候のみにて格別ミ事は無之湯水を呑にも震へ候由

一十三日十五日十六日十七日ミ戰爭厲しき事は無之由何分紀州御人數極臆病にて諸家立腹濱田領にマヤ山と申は登り一里半餘も有之要害宜しく此山敵に取られ候ては難儀に付防禦肝要と申候は山上に濱田御家半途に雲州下に紀州御人數六七千にて堅め候處敵の聲を聞き一發も不致紀州人數一里程逃出し候に付雲州迚も不叶と存又逃候に付小勢ミ兩家にては大山ミ事迚も不叶と濱田へ打合せ右山を下り候由程無く長人押來り忽ち右ミ山を乘取候よし

一何分濱田始紀州にはあきれ候に付紀州ミ人數へは何品たりとも買ひ候事不相成湯水なりとも無用に申

事故勿論宿も借不申依て始終野陣にて食物に差支ひ困り候由十八日益田より引取候者紀州人と跡になり前になり尾ノ道と府中とへ分れ候迄一所に相成り或は茶店にて御家の人々牡丹餅喰ひ居候處へ紀人參り吳候樣申候へとも無之由答茶にても吳候樣申候へとも無之由答候に付殊ミ外困候樣子にて無心致し候へとも福山樣人數へ上け候御品に候間不被上と答候由佐和宗太郎見兼ね二つ程遣候處殊の外歡ひ候由佐和話す○御家にても神戸通り都て紀州御人數宿は不相成何品にても賣り候事無用と申廣(マヽ)よし風說承り候戰爭中も右へ逃け左へ逃け兎角諸藩ミ邪魔に成り候故諸隊に被嫌諸藩ミ陣近くへは置不申由

一十八日一里程引取頃濱田城黑煙上り候處所々百姓家に濱田家中婦兒子立逃居り候もの敵方燒き候事哉と心得候に付左樣には無之濱田侯には船にて因州へ引取夫方濱田にて火を掛候趣答候處いつれも力を落し涙を流しあわれ成姿を見候得は自然一統涙を催し候由

一長人能く人を馴付候由定て濱田領分ミ百姓上手に押付候半とミ說繩川死體を見何れ侍分ミ者に可有之と申立流(マヽ)に石塔立候由福山にては死候ては加樣には不行屆と申說御長柄一人足を打れ寺に休居候處諸隊崩れ逃候跡にて長人見付長ミ方へ連行醫師に掛け十分に療治折々見舞人來り平癒ミ上最早步行出來可申と連返し路用無之由に付二步吳十里程ミ事故如何樣にも致し參り候樣途中迄送り來り候由

一濱田領分其外御代官領にても右近邊にては福山樣御武運ミ祈禱を致し候抔何分福山樣御出無之ては忽ち濱田滅亡候間幾重にも止り吳候樣下々迄申候由

一此夏長征にて評判宜は御家大垣斗と由併内々にて承り候はゝ下三殿三家殿指揮にては此後出張不致抔申居候書面にては難盡候間不申上候得共下知更に究り不申江木繁太郎其外兩三人と智恵を借り候に付何事も誰を呼て相談と上と申吳候由夫より江木を打殺し可申と一統申居候得共戰爭始り候頃はいつも何れへかかくれ見へ不申故打事も不成何分戰爭とまきれに可打と申居候

一雲州西洋銃隊はか成に引迴し候得共士氣不振由因州は和筒を用出し次第一同役に立不申由

○

一寅七月　松平伯耆守御用狀

例文略す然は此度と祕密一條可否不分不都合に至り顯然紀伊殿彼是と被仰聞御尤と儀右取扱候は拙者固り覺悟と儀今更申上候樣も無御座謹て奉待　尊命候乍併夫迄と處は諸軍英氣に拘り候て重々恐入候得とも相勤居候此上彌御失策にも可相成哉畏縮待罪と外無他事候恐惶謹言

七月五日　　松平伯耆守

板倉――樣

稲葉――樣

猶以此度と說得人差遣候儀は壹岐殿初御役人向壹人も相談不仕愚存と見込にて申遣候事に御座候

別啓

本文說得人差遣候見込は何分當時と場合兎角も平穩御請に相成候へは都てと御都合と一筋に存込候處より差遣候事に候尙備後介を差遣し候事は是迄も說得と筋も有之候由と處何分にも不屆候間此賊にて毒は毒を制し候理も有之儀と存候間遣候事にて壹岐殿初御役人方相談不致儀は調ひ候得は宜不調時は一同御咎を蒙り候儀と存相談も不致事に候何分討長と力攻は迚も永引可申其内には不思議と御不都合も出來可致哉と恐入候御地にては如斯と激徒可有之とは淺見にて不存寄候處此度と一條にて愚考仕候に長防と二州九分過激と境界にて加之薩英と激論助之蒸氣船等借候哉と風聞有之薩人は内實入込居候哉にも相聞候右等と儀故此末と見込甚た六ヶ敷存候今に九州四國石州藝州地と應援二と見等出兵不致偶出兵の藩は糴米等相願或は暫時御取替と金を相願其人數多候ても雜人斗にて人數甚少く銃砲は火繩筒にて眞と古風にて鐵砲渡り始りと容體に候然は砲隊にても多く候哉と存候處砲隊も甚少く有之候當時砲隊と開け候は第一

公邊と陸軍幷講武所第二薩州第三大鍋嶋　皇國中此三つ斗「ミニーヘール」好候位實用に渡り眞と御用に立候又爰に長防と徒は不殘農兵「ミニーヘール」にて穢多迄も同樣にて困却と一つにて候夫是合考致候に容易に御平均見据無之然とも佛蘭西に及談判三十艘も軍艦を借出し世上と評論は不顧夷人を遣候て夫ならは速功も可有其他は更に無之唯爰にても陸地とふくれ出候を待受候樣と合力は如何と存候而已にて追々見合候得は中々しぶとき惡る者多く候へは夫等にて何分承服御請御座候を最第一と致愚

考候事にて候暗愚短見恐入候へとも心底之處不得已奉申上候頓首百拜多罪

七月五日　　伯耆守

坂地

御兩所様

○

伯州ゟ被相渡候書付

松平安藝守へ

毛利興丸家來

宍戸　備後助

小田村素太郎

右兩人之者先達て其方へ御預け被置候處御不審之廉も相分り候間興丸へ差戻候様可被致候事

○

松平安藝守へ

毛利興丸へ之者先達て其方へ可被達候

○

毛利興丸へ

高杉　晋作

桂　小五郎

外十人

右十二人之者先達て相尋候儀有之呼出申達置候處最早不及其儀候

○

松平安藝守へ

先頃宍戸備後助(マヽ)差戻候節申合候儀も有之且歎願之趣も申聞置候旁右否相分り候迄は諸手動搖差留置候て其地之士民におゐても輕舉無之様宗家ゟ申付取斗候様其方ゟ吉川監物へ可被達候

○

松平安藝守へ

大野村へ爲守衛早々人數差出是迄出張之三兵隊と代り合三兵隊一ト先廣島表ゟ引上候様相達候間可被得其意候

七月